

ぜに　　ほたけ　　い　　せき  
銭　　畑　　遺　　跡　　Ⅱ

レストラン建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993. 11

石川県小松市教育委員会  
有限会社　叶　井



せに ばたけ い せき  
銭 畑 遺 跡 II

レストラン建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993. 11

石川県小松市教育委員会  
有限会社 叶 井





# 例 言

1. 本書は有限会社叶井（取締役叶井章）が実施するレストラン建設に伴って、平成4年度に実施した銭畑遺跡（ぜにばたけいせき）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土品整理は有限会社叶井（取締役叶井章）の依頼を受け、小松市教育委員会が主体となり実施した。なお、事業費は全額、事業者である有限会社叶井（取締役叶井章）が出費した。
3. 発掘調査の調査地、調査面積、調査期間、担当者は次のとおりである。

《調査地》 小松市御館町（おたちまち）甲80-1、81、82、83、84、85番地  
《調査面積》 約900㎡  
《調査期間》 平成4年9月1日～11月24日  
《担当者》 小松市教育委員会 埋蔵文化財調査室 望月精司
4. 出土品整理及び報告書作成は小松市教育委員会埋蔵文化財調査室望月が担当し、埋蔵文化財調査室臨時職員打田外喜代、江野直子、国本久美子、山口美子の協力を得た。  
なお、出土品の整理作業にあたっては、村井美樹、一島和美、大槻泰子の3名を雇用し、これに従事した。
5. 写真撮影は遺構・遺物とも望月が担当した。
6. 本書の執筆・編集は望月が担当し、中世陶器については埋蔵文化財調査室主査宮下幸夫の指導を受けた。なお、須恵器の胎土分析については蛍光X線分析を奈良教育大学教授三辻利一氏に依頼し、玉稿を戴いた。感謝の意を表したい。
7. 本書で示す方位は全て磁北である。なお、第1図の銭畑遺跡と周辺の遺跡には国土地理院発行50,000分の1地形図（昭和58年発行「小松」）と国土地理院発行25,000分の1地形図（昭和62年発行「小松」、「美川」）を、第2図の銭畑遺跡発掘調査区域図には小松市発行2,500分の1国土基本図を使用した。
8. 本調査において出土した遺物をはじめ遺構・遺物の実測図、写真等の資料は小松市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査と報告書の作成にあたっては、次の方々、機関、団体から御協力・御指導を賜った。御芳名を記し、感謝の意を表したい（敬称略）。  
上野与一、加納他家男、川畑 誠、木立雅朗、北野勝次、北野博司、田嶋明人、橋本澄夫、浜岡賢太郎、平口哲夫、藤田邦雄、南征建設運輸株式会社、石川県立埋蔵文化財センター、石川県埋蔵文化財保存協会

# 目 次

第1章 遺跡の位置と環境 .....	(望月精司) ...	1
第2章 調査の経緯と調査概要 .....	(望月) .....	3
第1節 調査に至るまでの経緯 .....		3
第2節 発掘調査の概要 .....		3
第3章 遺跡の概要と本調査の概要 .....	(望月) .....	5
第1節 遺跡の概要 .....		5
第2節 本調査の概要 .....		6
第4章 発見された遺構と遺物 .....	(望月) .....	12
第1節 弥生時代の遺構と遺物 .....		12
第1項 遺 構 .....		12
第2項 遺 物 .....		12
第2節 古墳時代の遺構と遺物 .....		14
第1項 遺 構 .....		14
第2項 遺 物 .....		16
第3項 須恵器・土師器の産地と供給体制 .....		30
第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物 .....		33
第4節 鎌倉・室町時代以降の遺構と遺物 .....		34
第1項 遺 構 .....		34
第2項 遺 物 .....		40
第5章 自然科学的分析 .....		59
錢畑遺跡出土土器の蛍光X線分析 .....		59
第1項 分析試料の概要 .....	(望月) .....	59
第2項 蛍光X線分析 .....	(三辻利一) ...	59
第3項 蛍光X線分析結果に対する考古学的所見 .....	(望月) .....	73
写真図版 .....		1~14

# 第1章 遺跡の位置と環境

本遺跡は小松市街地の北部、御館町周辺に位置し、梯川の中流域、支流の八丁川合流点近くに立地する。当地域は、梯川やその他支流の大小河川による泥土や砂層の堆積が厚く、右岸では手取川扇状地の南縁と接して広大な沖積平野を形成している。

本遺跡の周辺には多くの遺跡が分布するが、縄文時代に遡るものは一針遺跡のみで、弥生時代以降、遺跡の数が急増する。これは梯川の水利と低湿な土壌が農耕に適していたために、水田経営の浸透する弥生時代以降に当地への集落進出が活発となったものと言える。その後、遺跡の数は増加しないが、同所において遺跡が断続的に営まれ、中世まで継続する複合集落遺跡が数多く存在する。本遺跡も主体は中世にあるが、弥生時代から古代にかけて遺物の出土が見られ、今回の調査では古墳時代後期の遺物が全体の4割程度出土している。

さて、本遺跡の中心的な時代である鎌倉・室町時代については、御館町地内に、西堀、東堀、水渡口、馬場、城門、門出、御庵等の小字名が伝えられており、御館町の両側には大門という名称が伝えられている。当時、当地は板津荘に属し、12～13世紀頃、鎮守府将軍藤原利仁の末裔と称する林成景が石川郡より当地に来住・土着し、板津氏を名乗った。板津氏は後に得橋郷・能美荘にも領主経営を拡大し、地頭領主として成長、当地域の筆頭領主としての位置を確保した。御館の名称は、能美郡誌に「口碑に、往時一介の士ありて、宏大なる館を造り伽藍に撰す、彼れ、衆望ありしかば、世人呼びて御館と称す」とあり、有力者の居館があったことから付けられていることは明白で、これに該当するものとして先に述べた板津荘に居を構えたとする板津氏が最も有力である。また、一方では一向一揆の大將であった経川心七郎重親の居館跡であるとする説もあり、時代を違えて、当町が豪族等の居館として占地された可能性もある。さて、本遺跡の「銭畑遺跡」という名称は、江戸時代に鑄銭数百貫を掘り出したことよりつけられているが、この遺跡は広義では北側に分布する御館遺跡と同種のもので、御館町を中心とする広い範囲に分布する鎌倉・室町時代の遺跡の中にこのような豪族居館が存在していたものと予想する。

番号	名称	種別	時代	番号	名称	種別	時代
1	銭畑遺跡	館跡	弥生～中世	14	佐々木ノテウラ遺跡	集落跡	弥生～中世
2	御館遺跡	遺跡	鎌倉・室町	15	佐々木遺跡	集落跡	平安
3	松裂遺跡	集落跡	弥生～鎌倉	16	鎌町遺跡	集落跡	縄文～中世
4	中之江遺跡	集落跡	古墳	17	白江念仏寺塔遺跡	集落跡	弥生～中世
5	高堂遺跡	集落跡	弥生～中世	18	一針遺跡	包含地	縄文
6	千代遺跡	集落跡	縄文～中世	19	定地坊跡	寺院跡	室町
7	千代オオキダ遺跡	包含地	奈良～中世	20	白江集落	館跡	室町
8	小野町遺跡	包含地	古墳	21	白江梯川遺跡	集落跡	弥生・古墳・中世
9	千代城跡	城跡	室町	22	平面梯川遺跡	包含地	弥生
10	古府フドンド遺跡	集落跡	平安	23	梯川鉄橋遺跡	包含地	弥生
11	横地遺跡	包含地	縄文	24	小松城跡	城跡	江戸
12	本村遺跡	包含地	古墳	25	上小松遺跡	包含地	平安
13	千代マエグ遺跡	包含地	古墳～平安				

第1表 遺跡地名表



第1図 鉄道遺跡と周辺の遺跡 (S=1/25,000)

## 第2章 調査に至る経緯と調査概要

### 第1節 調査に至るまでの経緯

平成2年5月、小松市西町所在の有限会社北愛商事よりレストラン建設に伴う、御館町甲80-1、82、82、83、84、85番地における埋蔵文化財の協議が小松市教育委員会に提出された。当地は以前より、埋蔵文化財包蔵地の多く分布する区域として、小松市教育委員会としても注意していた区域であったので、試掘調査必要の旨を回答した。

同年5月17日、小松市教育委員会は有限会社北愛商事より提出された申請地における試掘調査の依頼を受け、2,000㎡を対象として試掘トレンチ（トレンチ3本設定）による調査を実施した。その結果、すべてのトレンチにおいて中世の遺物を検出し、銭畑遺跡が申請地全域に分布していることを確認した。この試掘調査結果により、有限会社北愛商事は費用負担等の理由より当地における開発計画を断念し、計画を白紙に戻すこととなった。

平成4年6月、同地におけるレストラン建設の開発計画が有限会社叶井より提出され、小松市教育委員会は当地の試掘調査の結果を回答した。これを受けて、有限会社叶井は平成4年中に発掘調査を実施してほしいと小松市教育委員会へ要望、その後、小松市教育委員会と有限会社叶井とで協議した結果、平成4年9月より調査を実施することとなった。また、発掘調査地については、工事計画がレストランの建物建設用地が南側の約800㎡のみで、北側は簡易舗装工事による駐車場となっていたため、駐車場区域は盛土施工による仮設の工事の前提で、盛土による現状保存区域とし、建物の建設される区域のみを全面発掘調査の対象区域とした。

平成4年7月1日、有限会社叶井より文化庁への埋蔵文化財発掘の届出が提出され、7月27日、小松市教育委員会は文化庁へ埋蔵文化財発掘調査の通知を提出した。同年7月18日、有限会社叶井より小松市教育委員会に埋蔵文化財発掘調査の依頼が提出され、これを受け、小松市教育委員会は9月1日より調査を開始する旨の回答をするとともに、発掘調査の実施及び出土品整理の一切を取り決めた「レストラン建設に伴う銭畑遺跡発掘調査事業の実施に関する覚書」を有限会社叶井と交換し、発掘調査に着手した。

なお、当調査は調査の円滑化を図るため、委託事業という形は取らず、調査事務の一切を有限会社叶井の直営とし、小松市教育委員会が調査員を派遣するという形の調査・事務体制を取った。

### 第2節 発掘調査の概要

平成4年9月1日、発掘調査区域の耕作表土の除去を重機械により実施し、遺物包含層まで掘り下げた。また、当地は湧水が激しく、排水を24時間行わないと水没してしまうため、調査区域周縁に排水溝を掘り、ポンプアップして排水の円滑を図った。

9月4日、調査区域内に5mメッシュのグリッド杭を打ち、器材運搬作業をおこなう。

9月7日、本日より遺物包含層の掘り下げを開始する。遺物包含層の掘り下げは、粘土層又は砂層の遺構検出面まで薄く剥ぎ取るように行い、出土した遺物はグリッドごとに取り上げた。また、遺物包含層剥ぎ取り後、随時遺構プラン確認を実施した。

9月24日、遺物包含層の掘り下げを完了し、遺構プラン確認段階の各遺構の全景写真を撮影した。検出した遺構は、調査区域中央を南北に走る大型の溝1条（1号溝）とこの溝を切って同軸上にのびた後逆L字状に西へと屈曲する5号溝、1号溝の西側を南北に走る2号溝、この2号溝と連結又は重複する東西に走る3号溝、2号溝の西側を南北に走り、3号溝を切る形の7号溝、調査区域の北西側で確認されたコの字状を呈する溝（4号溝）、調査区域の南端で確認されたコ字状の溝状遺構（6号溝）の7条と、この他に調査区域の南東側では2基の井戸が重複して、そして小型の土坑も3基確認された。

9月28日、2・3号溝と5号溝の掘り下げを開始する。当遺構は4～5mごとにセクションベルトを設け、その部分で区割りし、各層位ごとに順次遺物を取り上げながら掘り下げた。なお、大型の破片や半完形遺物については出土状態を写真で記録し、位置を略図で記録した。

10月1日、2号溝のセクション図・写真を撮影し、セクションベルトを掘り下げ完掘した。及び3・5号溝についても同様の方法で完掘した。

10月7日、1・4号溝の掘り下げを開始する。これについても他の溝と同様の方法で行い、7号溝とともに11月11日完掘した。

10月21日、1・2号井戸の掘り下げを開始する。1・2号井戸ともにセクションは1本のみの設定とし、まず井戸側内のみを半載して掘り下げた。次に井戸側外を掘り下げ、セクション図・写真を撮影、もう片側も掘り下げ、完掘した。遺物の取り上げは上層・中層・下層に分けて上げ、2号井戸については出土状況図を作成した。両井戸とも完掘後、平面図・エレベーション図を作成し、井戸側の取りあげを行った。また、各土坑についても同様の方法を使った。

11月12日より各遺構の全景写真撮影を開始し、11月17日、調査区域の完了後の全景写真を撮影した。

11月18日より遺構平面図の作成を開始、11月24日全ての作業を完了し、発掘調査を完了した。



発掘調査参加者

## 第3章 遺跡の概要と本調査の概要

### 第1節 遺跡の概要

銭畑遺跡は市道国道長崎線と市道梯・大島線の交差点から南西側に分布する遺跡で、西側は宮竹用水まで、東側は市道梯・大島線付近まで、南側は梯町の墓地近くまで広がる。この遺跡は北側で御館遺跡に接し、御館遺跡は市道国道長崎線と市道梯・大島線の交差点から、主に御館町の現在の集落が存在する微高地へと分布する。この2つの遺跡は確認された経緯のために分けられているだけで、中世主体の遺跡である点や地形上区分不可能な点を考えれば、同一の遺跡として把握すべきものである。つまり、宮竹用水を西限として御館町の現集落から梯町の墓場までの幅200m程度に分布する一つの遺跡というわけで、広い範囲に分布する中世を中心とする集落遺跡として位置付けできる。当区域は現在、多くが水田となっているため、旧地形を把握しにくい、試掘調査によって、宮竹用水側と遺物分布の切れる東側には谷（低湿地帯）が入っていることを確認しており、南北に帯状に長い微高地上に立地していたものと予想される。

さて、銭畑遺跡、御館遺跡ともに鎌倉・室町時代中心の遺跡であるが、ここで各調査の概要を説明すれば、御館遺跡では14～15世紀頃の溝3条、大溝（堀？）1条、土坑3基、井戸1基が検出、銭畑遺跡では平成3年度調査で、12世紀末～13世紀初頭の溝1条、14世紀前半頃の溝2条、15世紀後半～16世紀前半の溝1条、中世の井戸と思われる土坑7基（時期は特定不可能）が検出、今回の調査では14世紀前半の溝1条、14世紀中頃～後半の溝3条、15世紀後半の溝1条が検出されている。これらの遺構の時期を見ると12世紀末から16世紀まで存在するが、連続と営まれた感はなく、おおよそ12世紀末前後、14世紀代、15世紀後半前後の3時期に分けられるものとする。中心となるのは14世紀代で、比較的大型の溝はほぼこの時期に集中し、遺構の数から言っても中心的な時代と言える。さて、当遺跡の検出遺構は上記のとおりだが、いずれも溝と井戸・土坑であり、建物の検出がないことに気づく。両遺跡は御館町という地名より居館跡の存在が予想されているが、現在までその所在は未確認であり、漆器や中国陶磁器の出土や中世遺構が集中する点から当地に存在することはほぼ間違いないものの、遺跡を性格付けできるまでには至っていない。

さて、銭畑遺跡では鎌倉・室町時代以外の遺物も出土しており、平成3年度調査区域では弥生時代中期の土坑1基、弥生時代後期の遺物散布、6世紀末頃の須恵器の散布、8世紀後半の土坑1基、8～9世紀の須恵器・土師器の散布があった。遺構分布は希薄で、遺物出土量も少ないが、各時代の遺構が重複する複合遺跡であることは間違いない。さらに、今回の調査区域では弥生時代後期の土坑3基、8～9世紀の遺物散布に加え、6～7世紀の須恵器・土師器を濃密に包含した層が当区域の西側半分で見出され、7世紀前半に位置付けられる井戸2基も検出された。また、これより南側の梯町墓地付近でも表面採集で須恵器・土師器を確認されており、中世以前の遺構は今回調査した区域より主に南西側に分布することが予想される。これに対し、御館遺跡では中

世以外の遺物は数点出土している程度で、遺構の検出はなく、中世以前の遺物分布は極めて希薄である。つまり、北側では中世以前の遺跡分布は広がりをもたず、主に銭畑遺跡側特に南西側に分布するものと推察する。

## 第2節 本調査の概要

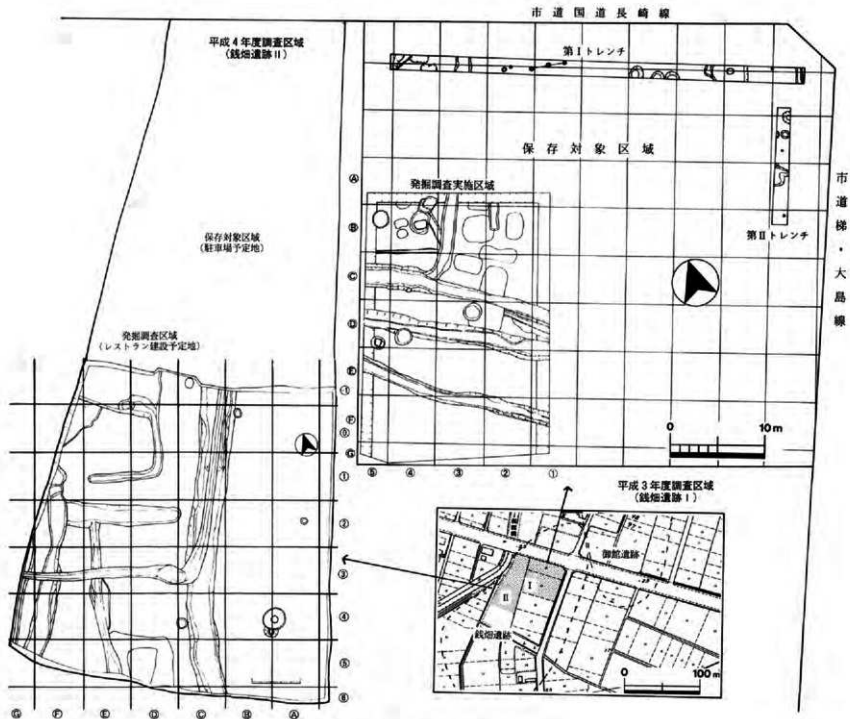
発掘調査を実施した区域は、平成3年度調査を実施した南征建設運輸株式会社の事務所兼車庫用地の西南側に隣接する区域で、盛土により現状保存される駐車場区域を除いたレストラン建設用地約900㎡である。調査区域の区画は、計画された方形の建物に沿って、任意に5m×5mのグリッドを設定し、グリッドは東から西へ1～6、北から南へA～Gとしたが、北側の拡張に伴って東西の番号を0、-1と延長した。

調査は、田地経営時の耕作土が表土として厚く堆積していたため、耕作土と判断できる土層のみバックホーにより剥ぎ取った。この耕作土は50cm程度あり、現況の田面より下に2枚程度の田面を確認することができた。また、耕作土の内、最下層の3'層はこの層を切って、近世頃に位置付けられる5号溝が掘り込まれており、この時期頃から田地として利用されていたことが予想される。この耕作土の下に旧表土があり、その下に遺物包含層が存在する。遺物包含層は主に中世遺物を包含する褐色吹き出しの多い暗灰褐色(砂質)土と主に弥生時代と古墳時代の遺物を包含する暗(青)灰色砂質土とに分けられる。中世の遺物包含層は調査区域の全域に濃淡なく分布し、10～20cm程度堆積しているが、全体的に遺物の包含は希薄である。これに対し、弥生・古墳時代の遺物包含層は調査区域の西側半分、1号溝より西側の区域に分布し、10cm以下の薄い堆積層であるが、遺物の量が多く、特に6～7世紀の須恵器・土師器を濃密に包含している。基本的に、中世の遺構は弥生・古墳時代包含層を切って掘り込まれ、遺構覆土の上に中世の包含層が堆積している。弥生・古墳時代の包含層の下は砂層の地山となり、遺物が砂層に食い込んで出土する箇所もある。遺物包含層は地山層まで人力により掘り下げ、遺物は中世包含層と弥生・古墳時代包含層とに分けて、グリッドごとに取り上げた。

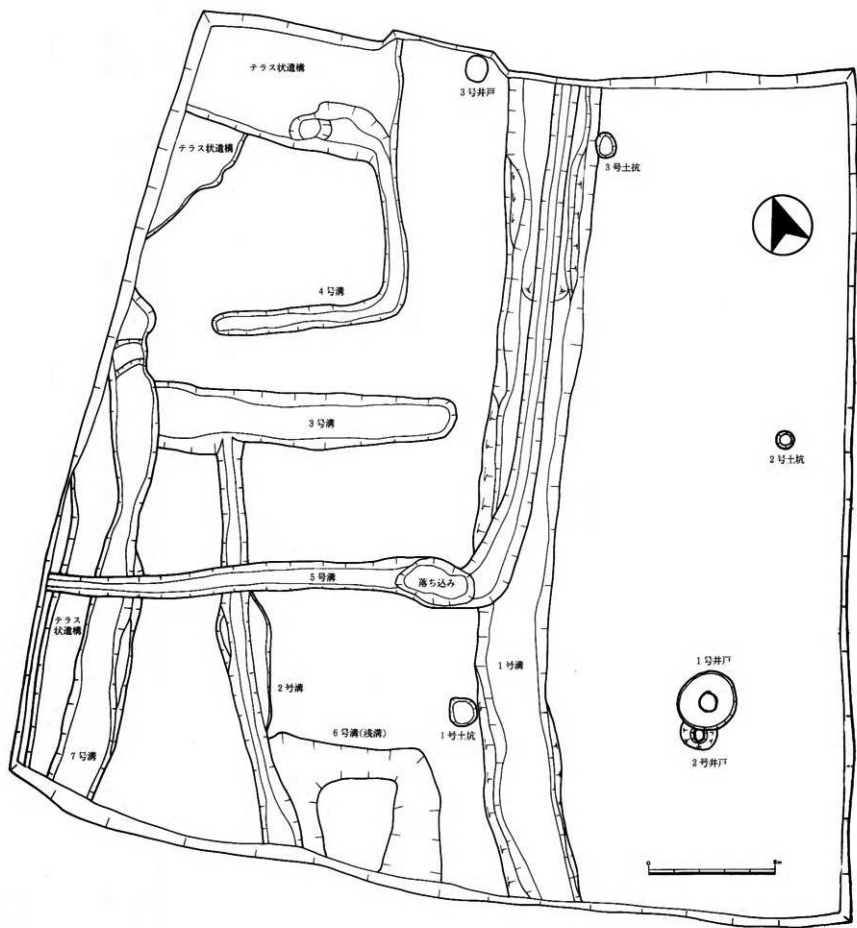
遺構内の掘り下げは土層観察のためのセクションベルト(溝では5mごとに1カ所、土坑・井戸では半載)を残して上層から剥ぎ取るように掘り下げた。遺構覆土は中世遺構で、上層が褐色吹き出しを多量に含む暗灰褐色土、下層が黒褐色泥土(木質遺物多量含有)の特徴をもち、弥生・古墳時代の遺構で、黒褐色砂質土の特徴をもつ。つまり、その時期の遺物包含層に近い土層の特徴をもち、上層での遺物含有率が高い特徴をもつ。

遺構の分布は14世紀前半に位置付けられる幅3m程度の大型の1号溝が調査区域の中央を南北に走り、14世紀中頃の溝が東西、南北に3条、15世紀後半の7号溝が調査区域西側を南北に走っている。中世以外では弥生時代後半に位置付けられる小型の土坑3基、7世紀前半に位置付けられる井戸が2基重複して存在し、主に調査区域の東側に分布する。

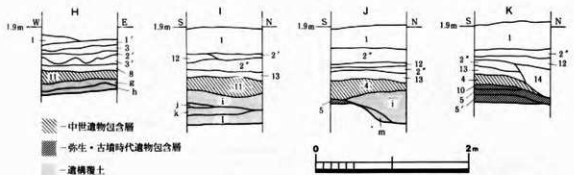
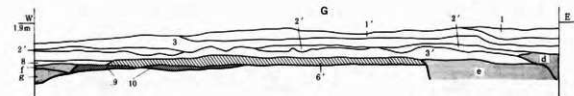
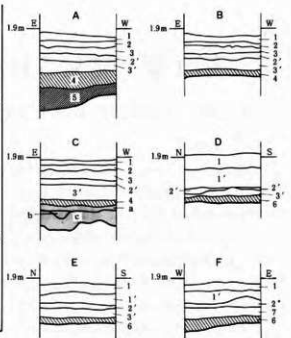
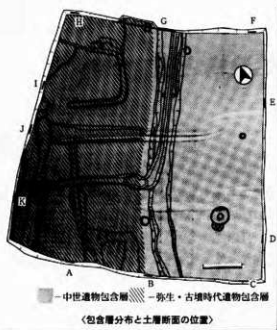




第2図 銭堀遺跡発掘調査区域図 (S=1/400)



第3図 発掘調査区域全体図 (S-1/150)



(発掘調査区域内基本土層)

- |                                |                                  |                                  |                     |
|--------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|---------------------|
| 1 層 暗褐色土:耕作土①                  | 5 層 暗(青)灰色砂質土:包含層下層(弥生・古墳)①      | 8 層 黒褐色(砂質)土:褐色吹出旧表土②            | 〔遺積覆土〕              |
| 1' 層 暗(黄)褐色土:耕作土①'             | 5' 層 暗(青)灰色砂質土:砂質強包含層下層(弥生・古墳)①' | 9 層 (青)灰色砂質土:包含層下層(弥生・古墳)②       | 調査区域外の遺積覆土          |
| 2 層 暗(黄)褐色粘土:耕作土②              | 6 層 暗(青)灰(褐)色(砂質)土:包含層上層(中世)②    | 10 層 黄(灰)褐色砂土:包含層下層(弥生・古墳)②      | 遺物を多く含有する           |
| 2' 層 暗灰褐色粘土:耕作土②'              | 6' 層 暗(青)灰(褐)色砂質土:包含層上層(中世)②'    | 11 層 (青)灰(褐色)粘土:褐色吹出、包含層上層(中世)②' | c 層 5号覆土            |
| 2'' 層 (青)灰褐色粘土:耕作土②''          | 7 層 黒(青)褐色(砂質)土:耕作土下の旧表土①        | 12 層 黒褐色土:耕作土期間                  | d 層 4号覆土            |
| 3 層 黒褐色(砂質)土:耕作土③              |                                  | 13 層 暗灰褐色砂質土:旧表土③                | f~h 層 4号覆土のテラス状遺積覆土 |
| 3' 層 黒褐色土:褐色吹出有、耕作土③'          |                                  | 14 層 黒褐色粘土:覆乱土                   | i~m 層 7号覆土のテラス状遺積覆土 |
| 4 層 暗灰褐色(砂質)土:褐色吹出有、包含層上層(中世)④ |                                  |                                  |                     |

第4図 包含層分布と基本土層断面図 (S=1/50)

# 第4章 発見された遺構と遺物

## 第1節 弥生時代の遺構と遺物

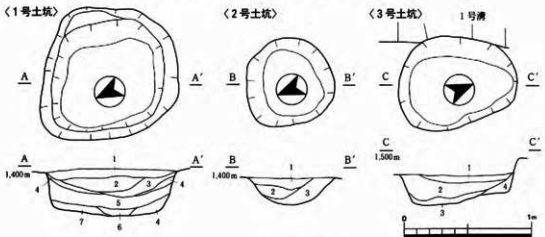
### 第1項 遺構

今回の調査で検出された3基の土坑は全て弥生時代後期のものと思われる。

1号土坑 発掘調査区域の中央南側に位置するもので、1m×1mの隅丸形状を呈し、深さ38cmを測る。遺物は比較的多く、壺の胴部破片34点と口縁部破片1点、壺の胴部破片1点、高坏片1点が出土している。細片のため図示していないが、月影式期のものと推察される。

2号土坑 発掘調査区域の東側に位置するもので、径70cm程度の円形を呈し、深さ20cmを測る。小型の土坑で、遺物は壺の胴部破片4点のみ出土している。

3号土坑 発掘調査区域の北側、1号溝と重複して存在するもので、75cm×95cmの楕円形状を呈し、深さ25cmを測る。遺物は壺の胴部破片6点のみ出土している。



#### 1号土坑覆土層注

- 1層 黒(褐)色砂質土:褐色吹出有り
- 2層 黒(褐)色泥土:灰白色粘土塊少含
- 3層 黒(褐)色砂質土:褐色吹出無し
- 4層 灰白色粘土と黒褐色土の混在土
- 5層 黒褐色砂(質)土:灰白色粘土塊少含
- 6層 黒褐色砂(質)土:灰白色粘土塊多含
- 7層 黒褐色砂質土と黄褐色砂土の混在土

#### 2号土坑覆土層注

- 1層 増灰褐色砂質土:灰白色粘土塊含
- 2層 増灰褐色(砂質)土:灰白色粘土塊含
- 3層 増(灰)褐色土:灰白色粘土塊多含

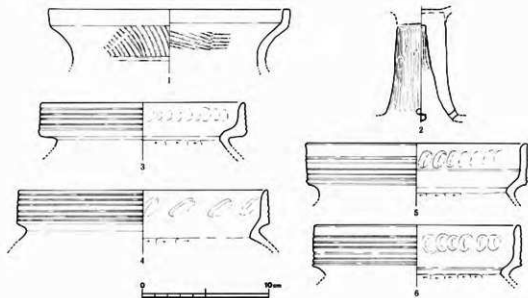
#### 3号土坑覆土層注

- 1層 (黒)褐色(砂質)土:褐色吹出有り
- 2層 黒(褐)色泥土:粘土質
- 3層 黒(褐)色泥土と灰白色粘土の混在土
- 4層 (黒)灰褐色砂質土:地山流れ込み土

第5図 弥生時代の遺構〈1・2・3号土坑〉(S=1/30)

### 第2項 遺物

遺物は3基の土坑、2号井戸、包含層から出土しているが、2号井戸のものはまざれこみであり、この遺構に伴うものではない。遺物の時期はほぼ弥生時代後期の範囲に入るものと考えられるが、2号井戸出土のものは包含層・土坑出土のものよりも若干古手の様相をもっている。2号井戸出土は壺と高坏とがあり、壺(1)は口縁部が直立し、端部で面を作る、粗い刷毛調整を施



第6図 弥生時代の遺物〈1・2は1号井戸内、3～6は包含層出土〉(S=1/3)

すものである。高坏(2)は脚部の破片で、外面を丁寧なへら磨きを施し、裾部との屈曲点付近には4つの円孔が穿たれている。いずれも破片が小さいため、時期を比定するまでには至らない。

包含層からは甕が9個体(個体識別による数値)と高坏が3個体程度出土しているが、図示したものは全て甕の口縁部付近の破片である。これらの甕はいずれも直立する有段口縁に疑凹線文が施される、所謂「月影式」の特徴を有するもので、口縁部内面には連続する指頭圧痕が残す。頸部付近内面は横方向のへら削りが施され、外面には横方向の刷毛調整が一部確認できる。口縁部の特徴から2つに分類できる。

A類(1・2)は口縁端部が丸く、さほど有段口縁の長くないもので、口縁部の疑凹線文は口縁部の上端付近から施され、比較的明瞭に施文している。B類(3・4)は口縁端部にやや平坦な面を形成するもので、有段口縁は直立して長く立ち上がり、全体的にシャープな感じを受ける。口縁部外面の疑凹線文は口縁端部より1cm程度下から施され、線は薄く不明瞭で、有段口縁の下端が突出して稜を形成する。A類器形は在地系の月影式に該当するものであるが、B類器形は口縁端部や有段口縁下端の稜など山陰系の甕器形の特徴を有するもので、山陰系とは言い切れないが、その影響を受けた土器群の可能性をもつ。この2つの類は器形のみでなく、色調においても識別できる。胎土は両類とも砂粒を含む点、金雲母や黒雲母が含有される点で共通するが、色調で、A類は暗橙褐色系を呈するのに対し、B類では淡灰褐色系を呈する。色調の違いは焼き方又は焼いた場所、発色の仕方の異なる胎土など色々考えられるが、器形類型と発色の違いが共通することは興味深い事例と言えよう。なお、当土器群は少ない資料で何とも言い難いが、編年上の位置付けを「月影Ⅱ式」の範疇に考えておきたい。

## 第2節 古墳時代の遺構と遺物

### 第1項 遺構

遺構として確認されるものは7世紀前半に位置付けられる1号井戸と2号井戸のみで、出土遺物の中心的時代である6世紀代の遺構は確認できていない。包含層の出土状況から考えれば、調査区域の西南側にこの時期の遺構が分布するものと予想する。

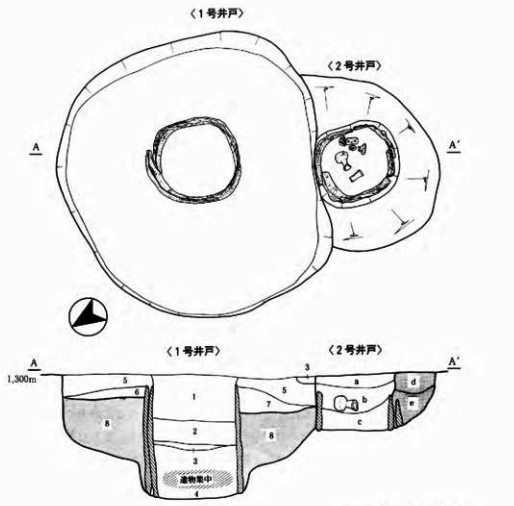
1号井戸と2号井戸は調査区域の南東側に位置し、2基重複して存在している。前後関係は2号井戸→1号井戸で、2号井戸の廃棄後、隣接して北側にさらに深く大型の1号井戸を掘り込んでいる。

#### 1. 1号井戸（第7・8図）

1号井戸は2号井戸の一部を破壊して築かれているもので、掘り方が2号井戸の井戸側部分にまで及んでいる。掘り方は2段掘りのもので、上段の上端で225cm×205cmの略円形、下端で175cm×160cmの略円形を呈し、深さ70cmを測る。下段はやや東側にズレて掘り込まれ、85cm×80cmの略円形、深さ25cm前後を測る。この下段掘り込みの中に井戸側が設置される訳で、井戸側設置後、掘り方に黒褐色系の粘土質の強い土を入れている。ただし、掘り方上層の土は井戸側内覆土と類似する砂質土が堆積しており、この部分は掘り方埋め土ではなく、後の自然堆積土層の可能性をもつ。つまり、掘り方プランで一段低いテラス状となっている可能性をもつものである。井戸側は2個の半截丸太割り貫き材を用いたもので、西側の方が径が大きく、東側のものが入れ子状に入って重なっているため、一木ではないと推察する。重ね目は外側を削り、2つの部材が合わせ易いように加工している。井戸側の直径は外側で70cm程度、厚さ4cm前後、現存長で95cmを測る。井戸側内覆土は上層が黒褐色系の砂質土と粘質土、下層が暗褐色系の砂質土で、砂気の強いのが特徴である。遺物は主に下層より出土しており、特に下底面付近では細かく砕いた完形の土師器埴輪など一括廃棄したような土器群が出土し、祭祀的性格の強いものと予想する。井戸はプラン確認面より砂層であり、いずれの面からも湧水があるが、井戸側下底面では特に砂の目が粗く、湧水が著しい。なお、下底面でのレベルは標高で0.25mである。

#### 2. 2号井戸（第7・8図）

2号井戸は1号井戸掘り方によって北側の掘り方が欠損しているもので、残存する側の掘り方上端で135cm、下端で100cmを測る略円形のプランを呈する。深さは45cmで、井戸側の外側には黄灰褐色砂質土や黒灰褐色土の埋め土が入っている。井戸側は1号井戸と同様、丸太割り貫き材を使用しているが、2個を重ねたものではなく、南側部分で3つの板材を使用し、全部で5つの部材を使用している。井戸側は外側で55cm×65cmの隅丸方形のプランを呈し、厚さは4cm前後、残存長40cmを測る。井戸側内覆土は中央に黒灰褐色系の粘質土を挟み、暗灰褐色砂質土が存在し、上層から中層付近に遺物が出土している。井戸下底面は砂層であるため、湧水があるが、1号井戸において水のくみ出しを行った場合は2号井戸からの湧水はなく、2つの井戸の同時使用は考



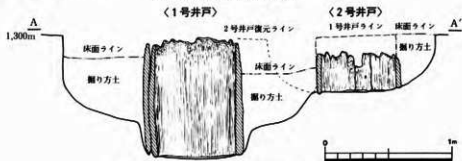
(1号井戸覆土土層注)

- 1層 黒(灰)褐色砂質土:砂が目粗い
- 2層 黒褐色粘土:灰白色粘土塊含有
- 3層 黒褐色粘土と灰白色粘土の混在土
- 4層 暗灰褐色砂質土:砂が目細かい

- 5層 黒(灰)褐色(砂質)土:稀らに黒褐色粘土含有
- 6層 黄灰褐色砂土と黒(灰)褐色砂土の混在土
- 7層 黒褐色土:若干砂質,黄灰褐色砂土含有
- 8層 黒褐色粘土:黄褐色砂土少量含有

(2号井戸覆土土層注)

- a層 暗灰褐色砂質土
- b層 黒灰褐色(粘土)土:砂質土少量含有
- c層 暗灰(褐)色砂土:砂が目細かく,粘土少量含有
- d層 黄灰(褐)色砂質土:黒褐色粘土多め含有
- e層 黒(灰)褐色土:黄灰(褐)色砂質土塊多量含有



第7図 1号井戸、2号井戸平面図断面図 (S=1/30)

え難い。2号井戸の水の出が悪くなったことにより、より深い1号井戸を掘ったものと推察する。

## 第2項 遺物

### 1. 井戸出土遺物

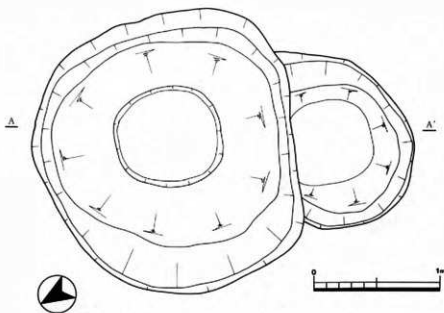
#### (1) 1号井戸(第9・10図)

出土遺物は須恵器で坏H16点(蓋3点、身4点)、高坏1点、甌1点、長頸瓶1点、瓶類(平瓶?)2点、甕11点、土師器で埴15点、鉢1点、高坏2点、甕19点、甕449点(色調や焼成から同一個体と思われるが、接合できていないため、別破片として数えている)で、全体的に土師器の量が須恵器より目立っている。

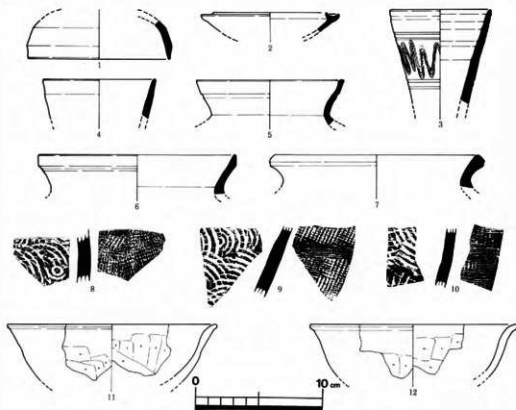
図示した須恵器は坏H蓋と坏H身、長頸瓶、瓶類の口縁部、甕で、5以外はいずれも井戸側内覆土(特に下層)出土のものである。1の坏H蓋は口径11cm、2の坏H身は口径8.9cm、受け部径10.7cmを測り、いずれもへう削りはなく、坏H身の口縁部立ち上がりは受け部と変わらない程度に低い。特に2の坏H身は器肉が薄く作りもシャープである。3の長頸瓶は口径7.8cmで、頸部には2条の沈線で区画された中に櫛描き波状文が施されている。4は長頸瓶か平瓶の口縁部破片で、5は小型甕又は壺形の器種と思われる。6・7の中甕は口径15~16cm程度のもので、6は外面に弱い稜をもちながら先細りするタイプ、7は外面突出気味に口縁部肥厚のタイプである。8~10は甕胴部破片で、外面にはH A類叩き(直行する木目の見える平行線文)後カキ目調整が施され、内面にはD A類当て具痕(木目の見られない同心円文)が残る。以上の須恵器は1・5以外は類似する胎土の特徴を示し、同一の産地の可能性をもっている。これは包含層出土遺物でD群とした胎土の特徴をもつもので(ただし、蛍光X線分析では異なる結果を得ており、これについては後で述べることとする)、他の1と5はA群とE群に分類できる。A群は他に5点確認できるが、大半はD群であり、D群の特徴をもつ須恵器は全部で33点確認される。率としてはA群15%に対し、D群85%であり、D群が圧倒的多数を占める。また、E群とした5は器形的にも古手の様相をもち、井戸側外の掘り方下層より出土しているもので、紛れ込みと考えられる。

土師器は11~14が埴で、11・12は大粒の砂粒を多く含むのに対し、13・14は粒の小さい砂粒を含む。色調も前者では暗橙褐色を呈するのに対し、後者では薄肌色のやや良質系の胎土を呈し、後者がやや精製品の感がある。器形・調整も前者と後者では異なり、前者は口縁部外反器形、内外面へう削り状ナデであるのに対し、後者は内湾器形(13は口縁部若干外傾)で、調整もへう磨きを施す。特に内面のへう磨きは口縁部から体部上位まで横方向の磨きを施した後、縦方向(放射状に近い)に磨きを行い、丁寧で精製品の感が強い。分量は11・12で口径16.4cm、16.2cm、14で口径14.8cm、13で口径16.6cm、器高8.1cmを測る。15の鉢は口径17.8cm、口縁部の内屈する器形のもので、外面には刷毛調整が施される。16の高坏は厚手で裾広りの脚部をもつもので、内外面に刷毛調整が施される。いずれも薄肌色系の色調をもち、あまり砂が目立たないものであるが、砂の粒は大きく、雲母系鉱物が目立つ。17~20の甕はいずれも口縁部付近の破片で、17・18

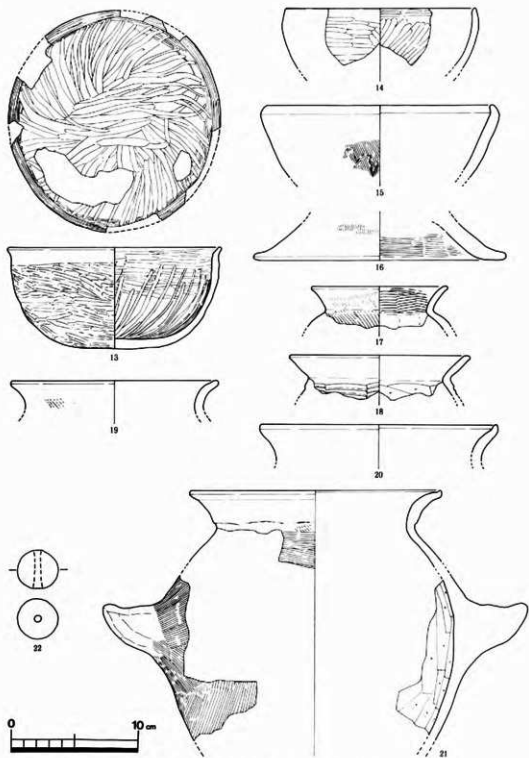




第8図 1号井戸・2号井戸掘り方平面図 (S=1/30)



第9図 1号井戸出土土器(1) (S=1/30)



第10图 1号井戸出土土器〔2〕(S=1/30)

は口縁部「く」字状器形を呈する小型法量のもの、19・20は口縁部外反器形の大型法量のものである。21の甕は胴部上位に甕形の把手をもつもので、口径19.6cm、胴部最大径25cm弱を測る。調整は胴部外面で上位横方向、中位以降縦方向の刷毛調整を施し、内面で縦方向のヘラ削りを施す。外面には煤の付着が認められる。甕の胎土は大粒の砂が多量に含まれる17・18と砂の量がさほど多くない19～21に分けられ、後者には雲母系の鉱物が目立って確認できる。つまり、前者は塊11・12に、後者は15・16の鉢・高杯に類似するもので、土師器の胎土は3つに区分できる可能性をもつ。しかし、いずれでも雲母系の鉱物が量の多少はあるものの、確認できることや白色の軟質砂粒を含む点で共通しており、大きな意味では同質の胎土と言えるものである。

## (2) 2号井戸(第11図)

2号井戸からは須恵器で坏H 4点、甕1点、土師器で高杯1点、甕78点が出土している。1号井戸と同様土師器甕の量が目立っており、内1個体は半完形である。主に井戸側内中層から出土しており、弥生土器の混入品もある。

図示したものは1の須恵器坏H身と2の須恵器甕、3の土師器甕で、1はB群胎土、2はA群胎土の特徴をもつ。図示していないものの胎土は全てD群であるから、量としてはD群が主体となるが、1号井戸ほどではない。1の口径は10.2cm、受け部径で11.6cmを測る。全体的に器肉が厚く、端部などの作りもシャープさに欠ける。3は胴部径10.1cm、胴部長6.4cm、頸部径4.0cmのもので、口頸部は長大化している。調整は胴部外面下半で手持ちヘラ削りを施し、内面で工具状のナデ、胴部上位に大きめの円孔が穿たれ、全体的に器内は厚手である。3は口径13.4cm、胴部径15.8cm、器高推定18.5cmを測る小型の甕で、外面は縦方向又は斜方向の刷毛調整を施し、内面は縦方向のヘラ削りが施される。全体的に歪みがあり、作りも雑で、胎土は大きめの砂を多量に含む。

## (3) 井戸出土土器のまとめ

**器種組成** 出土量は決して多いとは言えないが、2基の井戸ともほぼ類似した組成を示しており、井戸内廃棄ということで、一括性の高い土器群と言える。この土器群の中で主体的に存在するのは土師器煮炊具器種で、破片数では全体の9割を占め、個体数でも過半数以上を占める。この煮炊具器種の多量存在はつまりは供膳具等小型器種の生産量が依然として少ないことを意味しており、奈良時代以降の様相とは一線を画している。貯蔵具器種では須恵器に限定され、土師器は確認されない。この中では甕の量が少なく、瓶類や甕の方が目立っている。さて、供膳具器種ではやはり須恵器が高い傾向をもつものの、土師器甕も半数近く存在し、須恵器主体とは言い難い。供膳具器種の土師器から須恵器への置き換え現象は、南加賀ではMT-15型式～TK-43型式に行われていたとされており(田嶋1989)、それよりも後続する当遺構の時期には供膳具の7割以上が須恵器で占められる状況が想定され、当遺構の須恵器・土師器構成率と若干矛盾する。しかし、これは当遺構が井戸という特殊なものであることに起因すると予想される。

**井戸内運納** 両井戸とも遺物の出土状況は類似しており、井戸側内覆土下層～中層に集中して見

られる。下層と言っても、井戸側下底面にはほとんどなく、いずれも浮いた状態で出土しており、井戸廃棄後の遺物であることが解る。井戸は基本的に使用時においては定期的に内部をさらい清める習慣があるようで、自然災害での埋没などによる突発的な異変を除いて、廃棄後埋め戻すのが通例であり、自然堆積による埋没などは考え難い。当遺構もこの事例に該当すると想定されることから、井戸廃棄後の埋め戻しに際し、故意に井戸側内に埋納されたか粉れ込んだかということになる。さて、井戸より出土する遺物は井戸の廃棄時に井戸内に宿る神霊に対し行われた祭祀儀礼の一部であるとの見解があるが、当遺構においても遺物の出土する層位がまとまっていることから、意識的に埋納されたものと推察でき、井戸埋め戻し時の祭祀に関連する土器群と考えて妥当と言える。次に、井戸内祭祀に使用される土器についてだが、古代においては坏類等小型器種主体で構成されると考えられている（駒見1992）。事実そのような事例は多いと言えるが、必ずしも坏類のみではなく、当遺跡のように土師器煮炊具の多量に出土する井戸も確実に存在している（飛鳥Ⅲ期に位置付けられる飛鳥石神遺跡 S E 800では土師器甕や須恵器平瓶・壺類が多い、古代の土器研究会1992）。埋納される土器群の種類が異なれば、祭祀の方法も異なる可能性があり、祭祀儀礼の方法が必ずしも統一されたものではなかった可能性を意味している。これは、遺物の出方にも関連してくることで、当遺跡の中でも1号井戸と2号井戸とは若干異なる出土状況を示している。2号井戸は比較的大きめの破片又は半完形品が埋納されているのに対し、1号井戸では21の把手付きの土師器甕や13の土師器壺など細かい破片で出土しており、意識的に砕いて埋納されたものと言える。あくまでも想像の域を脱しないが、細かく砕いて埋納する行為が祭祀時に行われたものだとすれば、完形品の埋納とは別に考えるべきものと言え、井戸の埋め戻し時の祭祀儀礼の方法又は土器の使用方法に違いが存在していた可能性を物語っている。

**編年の位置付け** 2号井戸→1号井戸の前後関係は遺構の重複関係から確認できており、出土遺物を見てもこの前後関係は逆転していない。まず2号井戸では須恵器坏Hの口縁部立ち上がりの高さや口径、甕の胴部文様帯の消失と胴部径の小型化から判断して、7世紀第1四半期頃に位置付けられている戸津六字ヶ丘2号窯跡以降と推察できる。1号井戸は坏H口径が2号井戸のものよりも小型化し、立ち上がりが極限まで倭小化している。坏H身の口径が9cm弱というのは当器種の最終段階の法量と言え、現在確認されている南加賀の須恵器窯跡ではこの法量のものが検出されていない。坏Gに統一される金比羅山2号窯跡段階では坏Hは消滅している訳だから、これ以前となる訳で、田嶋編年での古代Ⅰ<sub>1</sub>期が該当する（田嶋1989）。これは飛鳥・藤原宮編年での飛鳥Ⅱに併行する段階であり、飛鳥Ⅱの基準資料とされている坂田寺 S G 100の坏H身の口径8cm台と類似する（古代の土器研究会1992）。また、1号井戸では器面にへら磨きを施した精製品の土師器壺が出土しているが、これはへら磨きを暗文状に見せようとしている点や器形、法量において飛鳥・藤原宮での所謂坏Cに類似するもので、当該器種の在地模倣品であることが理解される。口縁部器形や深身器形は坏Cでもやや古手の飛鳥Ⅰに近い様相を示しているが、在地模倣品であることを考慮すれば、飛鳥Ⅱに下ってもよいものと推察する。以上より、2号井戸を田

嶋編年古代Ⅰ期に1号井戸を古代Ⅰ期に位置付けられるものと考えておきたい。

## 2. 包含層出土遺物

包含層より出土した遺物は須恵器と土師器で、土師器については時期の特定が難しいが、須恵器については比較的理解しやすい。以下に須恵器と土師器に分けて述べることにするが、その前に須恵器と土師器のおおよその量比について述べておく。須恵器については全体の破片数で961点、これに対し、土師器では約5,000点出土しており、圧倒的に土師器の量が勝っている。しかし、器種別で見ると、供膳具等の小型器種が須恵器では坏H、坏G、高坏の501点、7点、24点に対し、土師器では埴、高坏の26点、22点で、圧倒的に須恵器が多い。また、貯蔵具等の器種でも土師器では確認されず、須恵器の施31点、瓶・壺類58点、甕340点に統一される。これに対し、煮炊具器種では土師器に統一されており、甕・甔の器種が4,000点以上を数える。つまり、土師器の圧倒的多数は煮炊具器種の量を反映しているものであり、供膳具等小型器種では須恵器への置き換え現象が進行、貯蔵具では須恵器器種への統一が行われ、「土器組成の、貯蔵器・供膳器＝須恵器、煮炊具＝土師器という用途別の区分」(田嶋1989)が確立する段階の様相と言える。この組成は前述した2基の井戸で土師器埴が比較的多く確認されたこととは対照的であり、井戸内出土という特殊な組成を必要とする場合を除いて、当期の器種組成はおおむね以上のような内容で構成されるものと言えそうである。

### (1) 須恵器(第12～15図)

須恵器は5世紀後葉頃から7世紀中葉までのものが出土しており、希薄な時期もあるが、特に短期間に集中する傾向は見られない。さて、消費地の出土土器を分析するにあたっては、編年の位置付けも重要であるが、消費地での使われ方や産地同定を行うことも重要である。当資料が包含層出土という条件から使用形態を考えることは難しいが、出土土器には幾種類かの胎土が確認でき、それを生産地と照合すれば、生産地同定は可能である。

さて、須恵器の胎土分析は肉眼観察による産地同定が最近活発に行われ、多くの成果が報告されている。今回はこの肉眼観察に加え、同時に奈良教育大学三辻利一教授に依頼し、蛍光X線分析をしていただいた。まず、肉眼観察による胎土分類であるが、以下のA～E群に分けた。

- A群—白色の細かい砂粒を多く含み、黒色粒吹き出しをもつもので、粗い素地をもつ。割れ口がスジ状にギザギザとなるものが一般的で、平滑な感はない。色調は灰色系統のものが多く、青灰色でも青味が弱く、暗灰色も定量存在し、灰白色の生焼け品も定量含まれる。
- B群—A群同様、白色の砂粒や黒色粒吹き出しをもつが、砂粒の量がやや少なめで、素地もA群より若干緻密である。割れ口はA群より平滑で、良好な焼きのものでも白っぽい発色のものが目立つ。
- C群—極めて細かい白色粒子を少量含む程度のもので、素地は全体的にサラサラとした砂っぽい触感を受ける。割れ口は平滑で、(青)灰色や灰色の中でもやや薄い系統の色調が目立つ。
- D群—粒の大きい白色の軟質粒子(凝灰岩系のくず石)が目立つもので、硬質の砂粒は目立たず、

素地は粘土質で比較的緻密な感じを受ける。割れ口は粘土のスジが目立ち、青灰色の発色をもつものが多い。また、表面青灰色、断面赤褐色のものが定量存在し、特徴的である。

E群一層は少ないが比較的大粒の硬質粒子（石英状）を含むので、素地は全体的にサラサラとした砂っぽい質感のものである。割れ口は平滑で、表面が濃い青灰色、断面赤褐色のものが主体を占める。

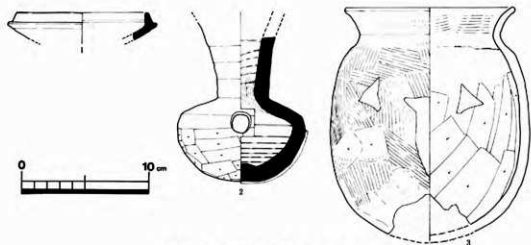
以上、5つに分類した胎土グループについて、以下に個別の説明を加える。

#### ①E群（1～5）

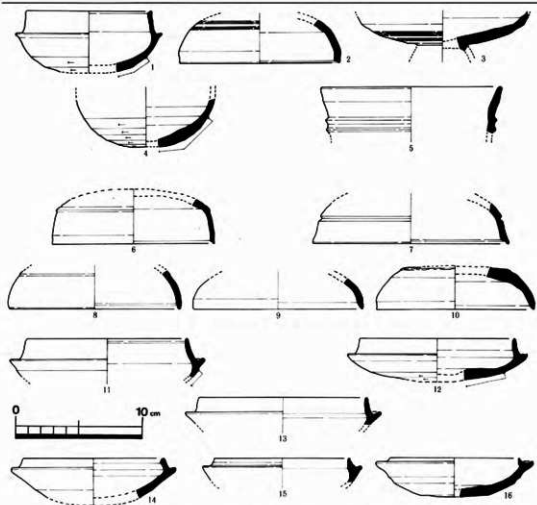
E群は全体的に薄手で、丁寧にシャープな作りをしており、他の群よりも古手の様相が強い。1は口径9.8cm、立ち上がり高1.8cm、器高4.2cmを測り、体部下半には回転ヘラ削り（断面に実線の矢印で範囲を表示、以下この表示はヘラ削りの範囲を示す）、口縁端部には内傾する明瞭な段をもつ。陶邑編年ではTK47型式に位置付け可能である。2は口径12.6cmを測るカキ目調整を伴うもので、蓋の可能性をもつが、高坏の坏部の可能性もある。3は高坏と思われるもので、坏部下位にはカキ目を施す。4は底部回転ヘラ削りの施と思われるもので、胴部径11cmを測る。5は鉢の口縁部破片と思われる。2～5は時期の特定が難しく、確実な編年観を述べることはできない。ただし、施の胴部径や高坏の器形などからTK10型式以降には下らないものと予想され、総体的にはTK47・MT15型式前後に位置付けられるものと予想する。E群は他に坏H身1点、坏H蓋6点、高坏3点、施1点、甕2点が確認され、これらも坏蓋の稜の存在や甕の内面スリ消しからはほぼ同時期主にTK47型式に主体をおくものと考えられる。

#### ②A群（6～29）

A群は陶邑編年のMT15型式以降に比定されるもので、南加賀窯の窯資料（望月1990）では二ッ梨東山4号窯跡1次床～戸津六字ヶ丘2号窯跡2次床又はそれに後続する窯の段階に位置付けられるものである。全体的にシャープさに欠け、やや厚手の作りが目立つ。6～10は坏H蓋で、6は口径12.8cmを測り、天井部の境に弱い稜、口縁端部に内傾する段をもつ。7は口径15.4cmを測り、天井部との境を深い沈線で表現し、口縁端部に内傾する段をもつ。8は口径13.4cmを測り、口縁端部内側に沈線が入る。9は口径13.4cmを測り、口縁端部を丸く仕上げる。10は口径12.4cmを測り、天井部はヘラ切りのままで、口縁端部は丸く仕上げるものである。11～16は坏H身。11は口径12.6cm、立ち上がり高1.7cmを測り、受け部下にはヘラ削り、口縁部内面には沈線が走る。12は口径12.2cm、立ち上がり高1.3cmを測り、底部にヘラ削りを伴う。13は口径13.2cm、立ち上がり高1.3cmを測る。14は口径11cm、立ち上がり高0.8cmを測り、底部にはヘラ削りを伴わない。15は口径10.6cm、立ち上がり高0.7cmを測る。16は口径10.2cm、立ち上がり高0.4cmを測り、底面はヘラ切り痕を残す。以上の坏Hの編年の位置付けは、6・7・11が二ッ梨東山4号窯跡頃、12・13が二ッ梨東山1号窯跡頃、8・9が二ッ梨（峠山）10号窯跡頃、10・14～16が戸津六字ヶ丘2号窯跡～それに後続する時期にそれぞれ比定できる。また、図示していないものも含めた時期を考察できるものの破片数では二ッ梨東山4号窯跡期23点、二ッ梨東山1号窯跡期6点、二ッ梨（峠



第11图 2号井戸出土土器 (S=1/3)



第12图 包含層出土土器〔1〕(S=1/3) (1~5はE群須恵器, 6~16はA群須恵器)

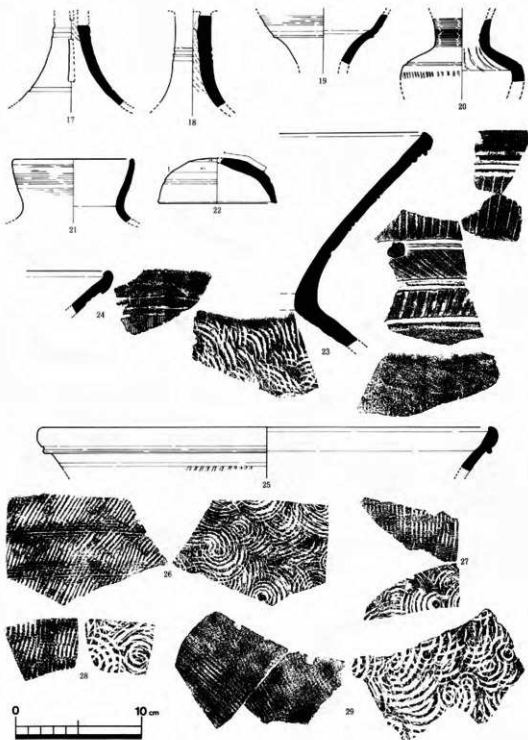
山) 10号窯跡期11点、戸津六字ヶ丘2号窯跡前後期36点で、特に二ツ梨東山4号窯跡と戸津六字ヶ丘2号窯跡前後の時期に多くなる傾向をもつ。これは以下の器種でも同様の傾向である。17・18は高坏で、17は2方向、2段スカシをもつ基部径の細いもの、18はスカシをもたないもので、いずれも戸津六字ヶ丘2号窯跡前後に比定できる。19・20は甗で、19は口縁部にカキ目、20は頸部にカキ目、胴部に連続刺突文をもつ。いずれも二ツ梨(峠山)10号窯跡前後か。21は提瓶の口縁部破片、22は壺蓋と思われる。23~29は大甗で、25は口径35.6cmを測る。口縁部文様帯は横走沈線により数段に区画し、その中を縦方向又は斜方向に沈線を施す。胴部叩きはHa類(木目の直交する平行線文)がほとんどで、内面にはDa類(木目の見られない同心円文)当て具のみ確認される。外面にはカキ目の施されるものが大半で、内面スリ消しは1点も確認できない。以上、A群須恵器に該当するものはこの他にもあり、破片数を合計すれば、坏H252点、高坏16点、甗14点、提瓶・壺類など3点、甗242点存在し、計527点と須恵器の中では最も多い群である。

### ③B群(30~47)

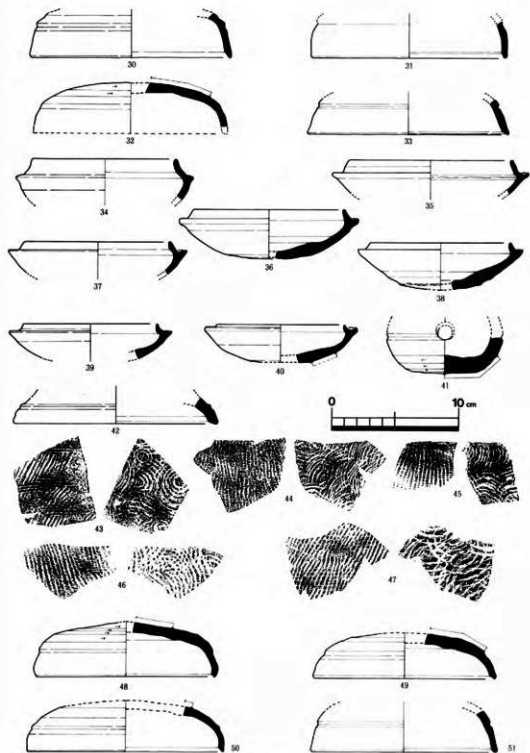
B群は作りがA群と近似するもので、胎土も混入物(砂粒や黒色粒吹き出し)で共通し、時期に関しても二ツ梨東山4号窯跡~戸津六字ヶ丘2号窯跡頃とはほぼ一致する。素地と発色の違いにより分類しているが、同一の産地の可能性が高いものである。30~33は坏H蓋で、30は口径15.7cm、31は15.2cm、32は推定15.5cm前後、33は15.9cmを測るもので、いずれも天井部との境に沈線又は屈曲で転換点を表現し、口縁端部に内傾する弱い段をもつ。二ツ梨東山4号窯跡頃に位置付けられるものであろう。34~40は坏H身で、34は口径11.2cm、立ち上がり高1.3cmを測り、やや特徴的な器形である。35は口径12.8cm、立ち上がり高1.2cmで、二ツ梨東山1号窯跡頃に比定できそうである。36は口径11.9cm、立ち上がり高0.8cm、器高3.9cm、37は口径11.4cm、立ち上がり高0.8cm、38は口径11.0cm、立ち上がり高0.6cm、器高3.8cmを測る。いずれも底面にはヘラ切り痕を残し、36にはその外周に補助削り(菱田・奥西1990、ヘラ切りの際に切り離しを容易にするため外周を削るもので、切り離し後の削り調整とは明確に異なる。図では破線の矢印で範囲を記している)が認められる。口径と調整省略から分校3号窯跡~戸津六字ヶ丘2号窯跡に位置付け可能である。39は口径10.5cm、立ち上がり高0.6cm、40は口径10.0cm、立ち上がり高0.4cm、器高3.0cmを測るもので、40には補助削りが認められる。戸津六字ヶ丘2号窯跡に後続する時期に位置付け可能。41は甗、42は壺の脚部。甗胴部径は9cmと小型であり、戸津六字ヶ丘2号窯跡頃に位置付け可能である。43~47は甗の胴部破片で、外面はHa類叩き後カキ目調整、内面はDa類当て具痕が残る。また、外面叩きには僅かにHc類(木目の右下がりに斜交する平行線文)も確認される。以上、B群須恵器はこの他にもあり、図示したものと合計した破片数は坏Hで149点、高坏で1点、甗で5点、壺類で1点、甗で38点である。時期的には図示したもののまとまりのとおり、二ツ梨東山4号窯跡頃と戸津六字ヶ丘2号窯跡前後に集中する傾向があり、中間時期に位置付けられるものは少ない。

### ④C群(48~59)





第13図 包含層出土土器〔2〕(S=1/3)(全てA群須恵器)



第14図 包含層出土土器(3) (S=1/3) (30~47はB群須恵器, 48~51はC群須恵器)

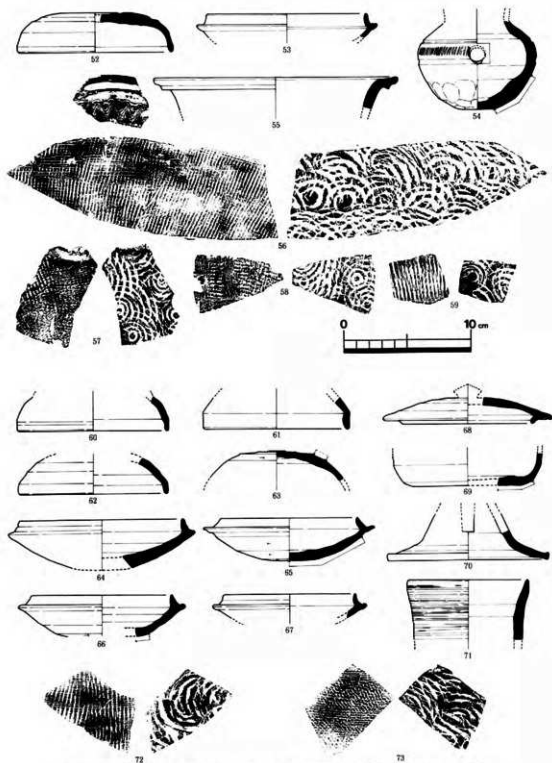
C群はA群よりも若干作りが丁寧なもので、ニッ梨東山4号窯跡頃に位置付けられるものが主体を占める。48～52は坏H蓋で、48は口径14.0cm、器高4.4cm、49は口径14.2cm、器高3.6cm、50は口径15.4cmを測る。いずれも天井部の境に弱い稜をもち、口縁端部には内傾する段、天井部には回転へう削りをもつ。51は口径14.4cmを測り、天井部の境に沈線、口縁端部内側に沈線の段をもつ。いずれもニッ梨東山4号窯跡頃の段階に位置付け可能である。52は口径12.0cm、器高3.1cmを測るもので、天井部にはへう削りをもたず、戸津六字ヶ丘2号窯跡前後に位置付け可能である。これら坏H蓋には天井部内面に「シッタ」の痕跡とおもわれるものがあり、48・49に見られる。53は口径12.6cm、立ち上がり高0.9cmを測る坏H身で、52とほぼ同時期であろう。54は胴部径9.3cmを測る甕で、胴部中には連続刺突文、底部付近にはへう削りが施され、内面底部には突き出し成形した痕跡が認められる。時期はニッ梨東山1号窯跡前後か。55～59は甕で、55は中型甕の口縁部、備置き波状文が施されている。56～59は胴部破片で、外面はHa類叩き後カキ目調整、内面はDa類当て具痕が残る。C群須恵器はA・B群に比量が少なく、識別できる破片数は全部で、坏H13点、高坏2点、甕2点、提瓶等瓶・壺類2点、甕32点である。時期はニッ梨東山4号窯跡～戸津六字ヶ丘2号窯跡のものが確認できるが、その中でもニッ梨東山4号窯跡頃に位置付けられるものが主体的である。

#### ⑤D群 (60～73)

D群は比較的薄手のものが目立ち、坏H蓋の口縁部付近屈曲タイプが目立つ。時期は分校3号窯跡段階以降のもので、田嶋編年(田嶋1989)の古代Ⅰ期・Ⅰ期に中心をもち、Ⅱ期(Ⅱ期まで下る可能性もあり)まで確認できる。60～63は坏H蓋で、口径は60で11.8cm、61で11.3cm、62で11.6cmを測る。器形は器高の高い丸味を帯びるタイプで、口縁部付近で屈曲し、端部を丸く仕上げる特徴をもつ。64～67は坏H身で、64は口径12.8cm、立ち上がり高0.8cmを測り、やや古手のもの。65は口径10.8cm、立ち上がり高0.8cm、器高3.4cmを測り、66は口径11.0cm、立ち上がり高0.8cmを測る。いずれも戸津六字ヶ丘2号窯跡段階と思われるが、底部へう削りが特徴的である。67は口径10.4cm、立ち上がり高0.8cmを測り、上記よりもやや後出か。68・69は坏Gで、68は口径13.4cm、返り径10.1cmを測り、返りが口縁部より下に出るタイプのもの。69は底径8.4cmで、底面をへう削りする。いずれも田嶋編年古代Ⅱ期に位置付けられると考える。70は2方向スカンをもつ高坏で、脚部径は12.6cmを測る。71は瓶類の口縁部破片。72・73は甕の胴部破片で、外面はHa類叩き後カキ目調整、内面はDa類当て具痕が残る。D群須恵器は古代Ⅰ期以降にはほぼ限定されるため、出土量は他に比べ少ないが、この時期のみについては主体的量を有しており、図示したものも加え、その破片数を提示すると、坏H48点、坏G7点、高坏1点、甕8点、瓶類2点、甕29点を数える。

#### (2)土師器(第16図)

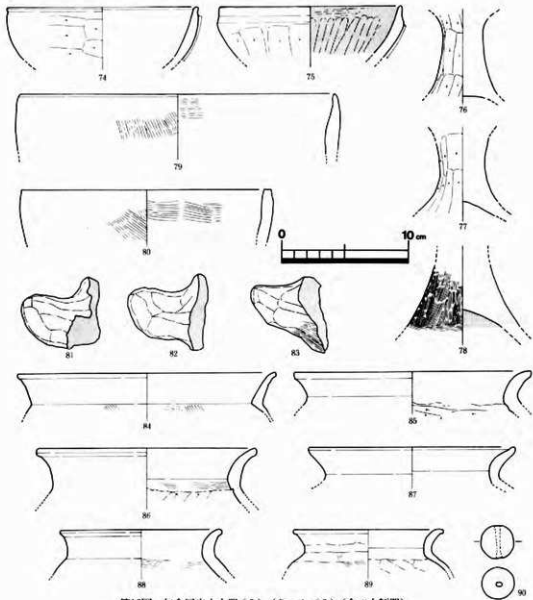
土師器は須恵器と同様6～7世紀頃のものであることは確実であるが、小破片のため時期を特定することは困難で、図示できたものも少ない。胎土は比較的大粒の砂粒と白色のくず石、そし



第15図 包含刷出土土器(4) (S=1/3) (52~59はC群須恵器, 60~73はD群須恵器)

て雲母系鉱物（角閃石も含む）を含むものが多く、その中でも大粒砂粒を多く含むもの（A1）と少なく含むもの（A2）とに分けられる。また、雲母系鉱物があまり目立たず、小粒砂粒を含むもの（B）も少量存在し、これには白色のくず石が目立つ。つまり、3種類の胎土に分けられるもので、これは井戸で述べたものとほぼ共通するものである。以下に各器種の説明を行う。

壺は内面黒色処理を行う75と黒色処理しない74とがあり、いずれも口径は14cm台を測る。図示していないものを含めれば、内面黒色処理は6点なのに対し、処理しないものは14点あり、後者が主流となっている。器形は口縁部を短く外反させるものとやや内湾気味に端部丸く仕上げるも



第16図 包含層出土土器〔5〕(S=1/3)(全て土師器)

のとに分けられ、一部口縁部内屈するものもある。調整は外面でへら削りとヨコナデが主流で、一部刷毛調整を行うものもあり、内面では黒色処理するものの一部に丁寧なへら磨きを行うものも見られるが、多くは雑な磨き又はへら削りやヨコナデである。胎土はA1とA2が主流で、一部Bも存在する。

高坏は脚部が中実タイプと中空タイプとがあり、図示したものはいずれも中実タイプである。いずれも坏部欠損のため全体の器形を推定するには至らないが、脚部は棒状に伸びて短く裾部の広がる器形(76・77)と棒状部分短く裾部広がりの長いやや大型器形(78)とに分けられる。前者は外面をへら削りするものが主体で、後者は刷毛調整するものが目立ち、脚部内面を黒色処理するものが存在する。中実タイプは図示したものも含め、20個出土しており、その中では後者の器形が主流を占める。中空タイプは7個確認しているが、5世紀まで溯るものも含んでいる可能性もある。胎土は大半がAであり、その中でもA1が主体である。

瓶(79~83)は口縁部破片の確認できたものが図示した2個のみで、口径19.8cmと24.8cmのものである。外面は縦方向、内面は横方向の刷毛調整を行う。把手の破片は図示したものも含め、10個確認しているが、把手付きの甕の可能性もある。形態的に大きな差はなく、4cm前後の棒状の粘土を貼り付けた後へら状のもので雑に成形している。胎土は砂の多く含むA1が目立つようである。

甕は口径12~13cmの小型の88・89と16~20cm程度の通常の84~87とに分けられる。器形はいずれも「く」字状に外反する口縁部を基本とし、口縁端部器形から外側に丸くなるタイプと上端を摘まみ上げるタイプとに細分可能である。主体は前者のもので、後者のタイプは少ない。図示していないものも含め口縁部破片数では102確認しており、いずれも同一個体ではないことから102個体存在するものと予想される。胎土はA類のみで、その中でもA1が8割近くを占める。

### 第3項 須恵器・土師器の産地と供給体制について

#### 1. 土師器

土師器は肉眼観察でA・B類に分類できたが、どの時期のものもA類主体であり、埴類に少量B類が確認される程度である。B類は混入鉱物に差はあるものの、素地は類似しており、A類胎土の精製品の可能性が高い。A類は砂粒の入り方から2類に細分しているが、素地の粗さでは共通しており、いずれも在産地と思われる。発色の違いもあるため、同一産地とは言えないが、基本的には同一系統の胎土と言えるだろう。三辻氏には1号井戸の土師器を分析していただいているが、その結果、A類とB類での分析値での差異はなく、Rb-Sr分布図ではばらつく傾向が見られた。また、この分布域は南加賀古窯跡群の領域にも能美(辰口)窯跡群の領域にも属しておらず、この土師器は須恵器窯跡群又はその周辺地域での窯場生産品ではない、つまり、消費地周辺で自給的に生産された製品である可能性も持っている。しかし、窯場製品でないことイコール遺跡近傍の製品ということは言えないわけで、この点についてはさらなる試料分析を行う必要

性があるが、食膳具・煮炊具とも同一産地で、しかも窯場製品でないことは確実であるわけで、7世紀中頃段階では土師器生産が須恵器とは切り離されて存在していたことを物語っているものと言えよう。

## 2. 須恵器

須恵器は肉眼観察でA～E群に識別したが、これを三辻利一氏の蛍光X線分析（後論参照）とクロスチェックし、産地同定を試みると、まず、E群については胎土特徴から非在地産と考えられ、これは三辻氏の分析結果でも同様の傾向が出ており、和泉陶邑窯が有力視される（一概に和泉陶邑窯の製品と言っても幾種類かの胎土の特徴が看取でき、全て同じ色調、混和材の特徴をもっているとは限らない。非在地産を全て陶邑産と考えることは危険が大きいが、あえてここでは陶邑産と想定した）。他のA～D群については、在地産を想定しているが、三辻氏の分析結果でも広義の南加賀窯跡群領域に該当し、南加賀に存在する窯跡のいずれかに該当する。さて、南加賀に存在する窯跡群には南加賀古窯跡群と能美窯跡群が存在するわけだが、三辻氏の分析においてもこの識別に重点を置いて行っていただいた。しかし、結果は後論するように、南加賀古窯跡群の領域に能美窯跡群領域が包括され、両者を識別することは困難と言える。ただ、二者択一での可能性で考えれば、A・B・C群については南加賀古窯跡群産の可能性が高く、この見解は筆者の肉眼観察の識別と共通性をもつことから、南加賀古窯跡群産と見てよいと考える。さて、D群については、三辻氏は能美窯跡群産の可能性は薄く、南加賀古窯跡群産が妥当との見解を述べたが、筆者は混和材の種類や素地の質感から能美窯跡群産を想定している。詳細は後論を参照していただきたいが、問題は今回の能美窯跡群の試料が小松市区域のみの分析値であった点にあると考える。つまり、能美窯跡群の主体が存在する辰口町区域の分析値は今回入っていなかったわけで、肉眼観察を正当化するわけではないが、辰口町区域の須恵器窯跡にはD群の領域に比較的近い窯も存在する点を重視し、D群産地を能美窯跡群としておきたい。

これまでA～E群の産地比定を行ってきたが、次に、時期ごとの各群の構成率を見て行きたい。まず、須恵器全体では、5世紀末～7世紀中頃のものが確認でき、6世紀前半頃と7世紀初頭頃に位置付けられるものが8割近くを占める。胎土別構成では、個体識別による破片数でA群が527点で60%、B群が194点で22%、C群が51点で6%、D群が93点で10%、E群が17点で2%であり、A群が圧倒的の主体を占める。これを時期別に見ると、5世紀末～6世紀初頭のTK47型式併行頃はE群のみで構成され、E群はこれ以降の時期では確認できない。6世紀前半のニッ梨東山4号窯跡頃になると、A群・B群・C群が確認でき、この状況は6世紀後半のニッ梨（峠山）10号窯跡頃まで継続する。E群は非在地産である和泉陶邑窯産の可能性が高く、それ以外は在地産と思われる訳だから、6世紀初頭頃を境に須恵器供給が非在地からの搬入から在地供給へと大きく転換したことになる。A・B・C群は在地産でも南加賀古窯跡群がその産地と推察されるが、各群の構成は6世紀前半で、A群6割近く、B群2割強、C群2割弱、6世紀後半にはC群が確実に減少する。7世紀初頭の分校3号窯跡段階になると、新たにD群が加わり、7世紀前半は

A群5割、B群2割、D群3割程度で、C群は極少量のみの存在となる。この時期はD群の出現が特徴で、特に中頃ではD群が主体、A・B群はほとんど確認できなくなる。D群も在地産と考えられるものであるが、A～C群とは異なり能美窯跡群と推察され、これは能美窯跡群の生産開始と大きく関わってくる。

さて、加賀地方を対象とした古墳時代須恵器の供給に関しては、南加賀地方の消費遺跡資料をまとめた田嶋明人氏の研究(田嶋1989)がある。氏は南加賀地方の加賀市永町ガマノマガリ遺跡・篠原遺跡、小松市漆町遺跡・高堂遺跡の4消費遺跡資料の胎土分類を行い、それを各時期に当てはめ、「TK23型式以前(3様式)は、移入須恵器よりなる段階。TK47型式(在地窯出現期4様式I期)は、在地産が確実に加わる寄せ集めの段階。MT15～TK10型式併行期(4様式II期)は、在地産で供給を賄う段階」と指摘している。当見解は、他の消費遺跡でも確認でき、辰口町西部遺跡群(北野1988)や同期の古墳資料でもおおむね同様の傾向を示している。当遺跡でもこの状況に該当し、E群とした陶邑産はTK47型式以前でのみ確認でき、それ以降は在地産である南加賀古窯跡群産で占められる。さて、6世紀代は南加賀古窯跡群産に統一される状況であるが、田嶋氏もこの時期の在地産須恵器の胎土をA～Cに分類しているように、南加賀古窯跡群でも数種の胎土に分けられる状況が看取できる。当遺跡でも南加賀古窯跡群と判断される胎土はA～C群に分けられ、主要胎土であるA群とB群はほぼこの時期を通じて見られるのに対し、C群は6世紀前半代にはほぼ集中する。この胎土はA・B群に比べ緻密で砂粒を含まない特徴をもち、南加賀古窯跡群でも良質の胎土をもつ。ただ、蛍光X線分析ではA・B・Cともほとんど差異はなかったわけであるから、これは素地である粘土採取地の問題ではなく、混和材の入れ方や粘土としての生成段階での差異と考えられる。C群はこの時期以降は減少し、7世紀以降はほとんど確認できないもので、南加賀古窯跡群出現期のみの胎土特徴と言えるかもしれない。7世紀に入ると、それまでの南加賀古窯跡群で占められる状況からD群とした能美窯跡群産が加わり、出現と同時に定量を占める。加賀地方ではこれ以降、南加賀古窯跡群産と能美窯跡群産で大半を占める状況となり、特に能美窯跡群は北加賀へ供給圏を広げていたものと予想する。当遺跡に見る7世紀代の須恵器産地構成の変化は能美窯跡群の確実な生産・供給が7世紀初頭まで遡ることを物語っており、この時期に出現する高松・押水窯跡群と同様、須恵器生産の第2次波及によって出現した窯跡群であると評価できよう。7世紀初頭は「一群一窯体制」の祖形が形成される段階と評価でき、南加賀地域ではこれ以降、能美窯跡群の終焉期まで同様の形で供給体制が組まれていたものと考えられる。

#### 引用文献

- 北野博司 1988 「古墳時代」『辰口西部遺跡群1』石川県立埋蔵文化財センター  
駒見和夫 1992 「井戸をめぐる祭祀」『考古学雑誌』第77巻第4号 日本考古学会  
田嶋明人 1989 「加賀・能登の古代土器生産」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会  
栗田哲郎・奥西藤和 1990 「八代宮ノ谷窯跡出土の須恵器」『鬼神谷窯跡発掘調査報告』竹野町教育委員会  
望月精司 1990 「南加賀古窯跡群成立期の様相」『ニッ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡』小松市教育委員会



### 第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物

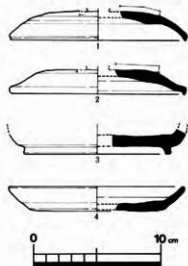
当期の遺物を出土する遺構はなく、包含層からのみ出土している。遺物の時期は8世紀後半から9世紀前半にかけてのものと10世紀から11世紀にかけてのもので、前者の時期では須恵器124点、土師器15点、後者の時期では土師器95点、施釉陶器2点が出土している。

#### 1. 8世紀後半～9世紀中頃の遺物

当期の遺物の器種構成は須恵器食膳具で坏A 65点、坏B 蓋10点、坏B 身15点、皿A 9点の破片数を数え、口縁部計測では坏A 6割、坏B 3割、皿A 1割で存在する。食膳具に比べ、須恵器貯蔵具は少なく、壺・瓶類20点、甕5点であるが、これは甕・壺類の時期の特定が困難であることに起因しており、実数は多く考える必要がある。土師器では煮炊具の長胴甕のみ確認でき、破片数は15点と少ない。

図示できたものは比較的残りのよい4点のみで、1・2は坏B 蓋、3は坏B 身、4は皿Aである。坏B 蓋は口径13cm台を測る天井部に回転ヘラ削りを施すもので、重焼Ⅱa類の痕跡をもつ。坏B 身は台径11cm台のもので、底部厚手、高台は薄手でしっかりと踏ん張る。皿Aは口径13cm台、器高2cm程度で、体部は内面にうねりをもって外傾して立ち上がる。時期は8世紀第4四半期から9世紀中頃に位置付けられる。

次に、胎土だが、須恵器は2つに大別できる。A群は白色砂微粒子を多く含むもので、器面に黒色粒吹き出しが目立ち、割れ口はギザギザして緻密さに欠ける。B群は砂の混入物があまり目立たないもので、割れ口がスパツとして緻密な感じを受ける。一般的にA群は南加賀窯産に多く見られる特徴で



第17図 包含層出土須恵器(S=1/3)

あり、B群は能美窯産に多く見られる。胎土別構成はA群で坏A 57点、坏B 蓋10点、坏B 身13点、壺・瓶類20点、甕5点で、B群で坏A 8点、坏B 2点であり、A群が9割以上の主体を占める。能美窯産でも砂の多く混入するものもあるため、A群が全て南加賀窯産とは言えないが、それでも南加賀窯産が主体を占める状況は確実である。少ない資料のため、結果が偏る可能性もあるが、南加賀古窯跡群と能美窯跡群の供給圏を考えるに興味深い結果と言えそうである。

#### 2. 10世紀～11世紀の遺物

当期の遺物は小破片のみで、図示できたものはないが、概要を記しておく。土師器は全て食膳具器種で、10世紀代(9世紀末も含む)の内面黒色土器・土師器と11世紀代(12世紀初頭も含む)の土師器に分けられる。10世紀代は埴A、埴B、皿Cの器種が確認でき、埴類が主体を占める。11世紀代は埴Aと埴Bがあり、埴Aには小埴器形が目立ち、柱状高台状のものも確認できる。この時期で1点も須恵器の確認がないのは興味深いのが、出土量の少なさの故であろう。

## 第4節 鎌倉・室町時代以降の遺構と遺物

### 第1項 遺構

鎌倉・室町時代以降に位置付けられる遺構は全て溝状遺構で、どの時期も東西・南北へほぼ似通った方位に走り、斜行するものは確認されない。

#### 1. 1号溝

発掘調査区域の中央を南北に走る大型の溝で、南側でやや東に方位を振るが、ほぼ真っすぐなプランを呈す。幅は南側の250cmから北側へ徐々に広げ、北端で最大375cmを測り、深さも北側へ50cmから90cmへと深くなっている。溝底でのレベル差は南端セクションGで0.8～0.85mに対し、北端セクションAで0.5mとなり、30～35cmの比高差を測る。

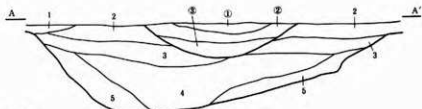
覆土は上層で、褐色の吹き出しを多量に含む暗褐色系の砂質土が堆積し、下層では褐色吹き出しをもたない黒色系の粘質泥土が堆積する。この下層中には木質遺物の混入が顕著で、大半は自然木であるが、下駄等の木製品も出土している。また、溝の壁付近では地山の崩れた黄灰白色の粘土・砂土と黒色土が混在しており、壁面の崩れ方が著しかったことが看取できる。概して上層より下層の堆積が厚く、覆土の2/3は下層泥土である。

出土遺物は中世土師器が主で、個数は少ないが、完形品や半完形品のもが目立つ。出土は主に下層の泥土からで、壁面立ち上がり付近に多く見られる。溝底からの出土もあるが、大半は下底面よりも10～30cm程度浮いた状態で出土するものが多く、溝の埋め戻し又は埋没時に意識的に投入したものと推察する。上層からも土師器は出土しているが、下層のものよりも確実に新しく位置付けられるものである。土師器以外では中世陶器が少量と五輪塔・宝篋印塔が中層より出土している。

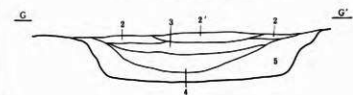
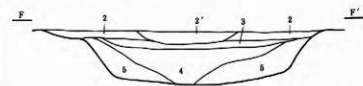
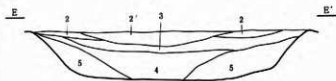
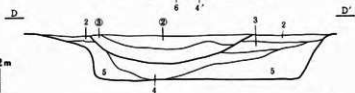
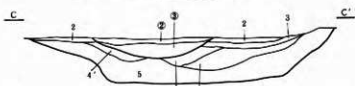
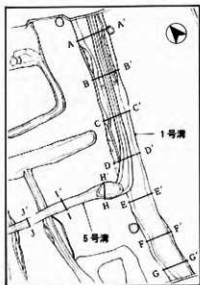
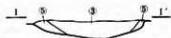
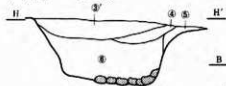
#### 2. 5号溝

1号溝と重複する近世の溝で、1号溝が完全に埋没した段階で掘り込まれている。溝は調査区域の西側を東西に走った後、1号溝と重なる点で、約80度北に方位を変え、ほぼ直角に屈曲して、南北に走るもので、1号溝と重複する南北に走る部分ではほぼ1号溝と主軸を同じくして掘り込まれている。溝幅は西側付近で80～120cm、北側付近で120～150cmと徐々に太くなるが、屈曲付近では部分的に150cm程度と太くなる。溝の深さは20～30cmと浅く、底の丸い断面形で、溝底のレベル差から西から北へと溝が流れていたことを予想させる。覆土は北側付近で、上層に暗褐色又は黒褐色系砂質土の堆積があるが、下層では暗青灰色の泥土が堆積し、この層は西側の覆土でも見られる。さて、この溝の屈曲部分の西側には土坑状の落ち込みがあり（落ち込み内覆土が溝と共通しているため同時併存遺構として判断）、この中に多量の中世遺物（主に中世陶器と石製品）と近世遺物（陶磁器や木製品）が廃棄されている。また、土坑周辺には杭が打ち込まれ、下底面には準大の河原石が敷き詰められており、井戸状又は水溜め状の遺構であった可能性もある。この河原石は溝の下底にも多く確認され、特に南北に走る側で顕著である。

(1号溝)  
L=1,500m



L=1,800m (5号溝)



第18图 1·5号溝土層断面图 (S=1/40)

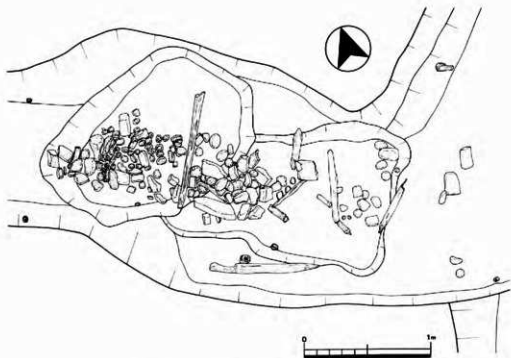
遺構覆土層注

〔1号溝〕

- 1 層 暗(灰)褐色(砂質)土:褐色吹出通有。
- 2 層 (暗灰)褐色(砂質)土:褐色吹出多。
- 2<sup>+</sup>層 (暗灰)褐色砂質土:褐色吹出通有。
- 3 層 暗灰(褐)色粘質土:褐色吹出少。
- 4 層 黒灰褐色泥土:黄白色粘土塊少、木質遺物多。
- 4<sup>+</sup>層 黒灰褐色泥土:黄灰白色砂土混在。
- 5 層 黒灰褐色泥土、黄白色粘土、黄灰白色砂土の混在土
- 6 層 暗黄灰褐色砂質土:地山に近い砂質土

〔5号溝〕

- ① 層 (黒)褐色(砂質)土:褐色吹出多。
- ② 層 暗灰褐色(粘質)土:褐色吹出多。
- ③ 層 暗青灰色泥土:褐色吹出少。
- ③<sup>+</sup>層 暗青灰色泥土:褐色吹出多。
- ④ 層 (暗)褐色砂土:鉄分多く赤味。
- ⑤ 層 暗青灰色砂質土:黄白色粘土塊少。
- ⑥ 層 黒(青)灰色泥土:木質遺物多。

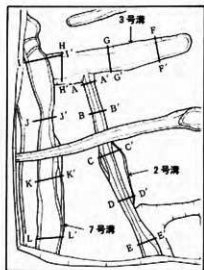


第19図 5号溝内落ち込み平面図 (S = 1/30)

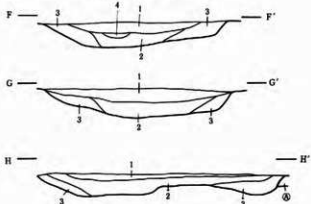
3. 2号溝

2号溝は1号溝にはほぼ平行して南北に走る溝で、北側で3号溝と連結している。幅1m程度、深さ20cm程度の小型の溝で、弥生・古墳時代包含層面から掘り込まれており、溝のレベル差はあまり認められない。覆土は上層が砂質土、下層が泥土で、1号溝とほぼ同様の特徴をもつ。遺物は少ないが、中世土師器が半完形品で数個出土しており、主に下層からの出土である。

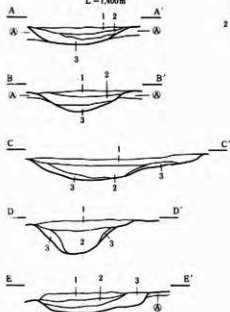
4. 3号溝



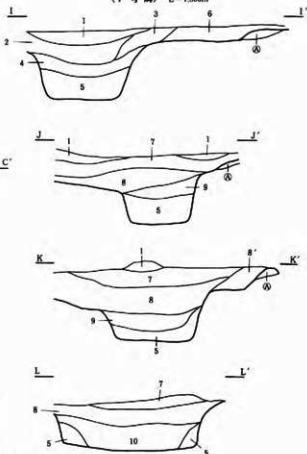
〈3号溝〉 L=1,400m



〈2号溝〉 L=1,400m



〈7号溝〉 L=1,300m



第20图 2·3·7号溝土層断面图 (S=1/40)

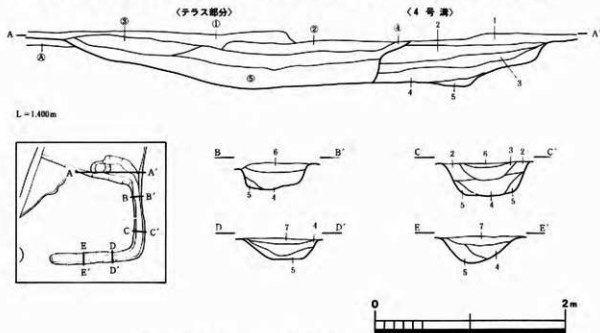
3号溝は2号溝に直交して東西に走る溝で、西側は7号溝に切られ、東側は1号溝の手前1m付近で立ち上がる。幅は2m前後と広めだが、深さは30cm弱と浅く、底の平らな浅い溝である。東から西へやや傾斜する傾向をもつが、概して平坦であり、2号溝との連結部分では3号溝の方が深くなっている。覆土は上層が暗褐色系の砂質土、下層が泥土で、壁側は砂を含む土層である。出土遺物は少なく、中世土師器が数個程度で、他に古墳時代の須恵器と土師器が混在している。

#### 5. 4号溝

4号溝は調査区域の北西側を「コ」状に走る溝で、北側はテラス状に広がっている。幅は70~90cm程度で、深さは30cm前後にほぼ均一、南西側から北側へと若干傾斜し、北側が一番深くなる。覆土は上記の溝と同様、上層が砂質土、下層が泥土であり、下層からは木質遺物の検出が多い。出土遺物は3号溝と同様中世土師器と古墳時代の須恵器と土師器が出土している。北側のテラス部分はこの溝を切るような形で掘り込まれ、浅い平坦な遺構である。覆土は中世の遺構と共通し、極少量の中世土師器が出土している。

#### 6. 7号溝

調査区域の西側を南北に走る溝で、3号溝を切って掘り込まれている。溝の形状は西側に浅いテラス状を形成し、東側で1段下がって掘り込まれるもので、上端幅3.5m前後、下段上端幅1m前後、下段との段差40cm前後を測る。溝のレベルは南側から北側へと若干傾斜し、最北端では若干立ち上がり気味となる。覆土は上層又は中層付近に黒灰色系の泥土、下層に灰褐色系の砂質土が堆積し、上層から下層まで木質遺物の混入が目立つ。つまり、他の遺構で見られた暗褐色系



第21図 4号溝及びテラス部分土層断面図 (S=1/40)

の砂質土が飛ばされた状態であると言え、それだけ深い溝であったことを物語っている。遺物は中世土師器が主に下段の溝の中へ下層から出土しており、いずれも完形に近いものが数枚まとまって(重なったものはないが、同じレベル同じ地点より3~4個体完形又は半完形品で出土)出土している。主に壁面立ち上がり付近に多く見られ、溝底からの出土も極少量あるが、大半は下底面よりも10~30cm程度浮いた状態で出土し、溝の埋め戻し又は埋没時に意識的に投入したものと推察する。テラス部分からも遺物は出土するが、少量でしかも破片のみであり、下段溝のような土師器の出土の仕方は見られない。

遺構覆土土層注

【2号溝】

- 1層 暗灰褐色土：弱砂質、褐色吹出多。
- 2層 暗灰(褐)色粘土：褐色吹出微。
- 3層 暗灰色砂質土：白色粘土塊多。
- A層 暗青灰色砂土：弥生・古墳時代の遺物包含層。

【4号溝】

(溝内覆土)

- 1層 (暗)灰褐色砂質土：褐色吹出多。
- 2層 暗灰褐色砂質土：褐色吹出少。
- 3層 灰白色粘土塊と暗灰褐色土の混在土。
- 4層 暗灰褐色泥質土：木質遺物少。
- 5層 暗(青)灰褐色砂質土：青灰白色粘土塊有。
- 6層 暗灰褐色土：灰白色粘土塊多。
- 7層 暗灰褐色(砂質)土：褐色吹出多。

(テラス内覆土)

- ①層 暗灰褐色砂質土：褐色吹出多。
- ②層 黄(灰)褐色砂質土：褐色吹出少。
- ③層 暗灰(褐)色砂質土：褐色吹出少。
- ④層 暗灰褐色粘土：木質遺物多。
- ⑤層 暗灰褐色粘土と暗灰(褐)色砂土の混在土

【3号溝】

- 1層 暗灰(褐)色土：弱砂質、褐色吹出多。
- 2層 (黒)灰色粘土：木質遺物多。
- 3層 暗(青)灰色(砂質)土：灰白色粘土塊少。
- 4層 黄褐色砂質土
- A層 暗青灰色砂土：弥生・古墳時代遺物包含層。

【7号溝】

- 1層 (黒)褐色土：弱砂質。
- 2層 黒灰(褐)色粘土：木質遺物有。
- 3層 (黒)灰(褐)色(泥)土：少量砂混在。
- 4層 黒灰(褐)色粘土：少量砂混在、木質遺物有。
- 5層 淡灰(褐)色砂質土：灰白色粘土塊・木質遺物多
- 6層 (黒)灰褐色土：褐色吹出少。
- 7層 暗褐色粘土：少量砂混在。木質遺物少。
- 8層 暗灰褐色砂質土：少量粘土混在。
- 8層 (暗)灰褐色砂質土
- 9層 灰(褐)色砂質土：少量粘土混在。
- 10層 灰褐色砂質土：砂質強い。

7. 土師器皿の溝内一括廃棄について

中世に位置付けられる溝は5条検出されたが、いずれの溝でも土師器皿が完形に近い形で出土している。量としては決して多いとは言えないが、意識的に廃棄したことを十分に予想させる。溝内廃棄の仕方は比較的まとまった形で出土するものが多く、完形出土のものに関しては数枚重ねるものや横に並べるものなどが顕著で、投げ込みや流れ込みの形ではなく、埋納の性格を帯びていると評価したい。出土位置は溝の下底部には少なく、どちらかと言えば、ある程度土が堆積

した後の壁際での出土が一般的である。完形出土のものは以上の特徴をもつが、出土量では圧倒的多数を占める破片での出土は特徴を抽出しづらい。これら破片での出土も完形品と出土する層位は同様であり、同時に埋没したことになるが、これらも意識的に廃棄したものかとなると疑問である。意識的に破碎して廃棄したとすれば、接合できるわけであるが、そのような碎いたものをまとめて捨てた感じはない。現段階では何とも言いえないが、破片の存在も土師器皿の廃棄の仕方を考えるに重要な問題であると考ええる。さて、土師器の一括廃棄について、藤田邦雄氏はそれを考える場合、その捨てられ方と捨てられた場所を考慮し、それぞれの条件を加味した分類と系譜の分析により、より精度の高い方向性が見い出せると指摘している（藤田1992）。これは中世土師器皿の使用法を考えるに重要な指摘であり、古代も含め、土器食器を考える上で、最低限報告者が報告すべき項目であると考ええる。さて、この点を加味し、中世の土器食器である土師器皿の使われ方を考えて見たい。これについては既に藤田邦雄氏や田嶋明人氏によって指摘されている（藤田1992・田嶋1992）が、両氏とも中世土師器皿の使用を一般の食膳に並ぶ実用器としての機能をほとんどもち得ていなかったと予想しており、特殊日常的又は非日常的な性格を色濃くもつ、一過性の飲食に供する特殊食器や祭祀に使用される特殊食器としての性格を想定している。両氏の見解は筆者も賛同する所で、この理解に立てば、完形品埋納のような土器廃棄の形は理解しやすい。ただ、破片での出土は先に述べたように、意識的な一括廃棄の状況は想定しづらく、完形品埋納とは別に考えるべきである。土師器皿に日常的な食膳用具としての機能がなくなるとすれば、これらも儀礼用具として使用されたこととなり、その機能を果たした後、不用品として廃棄されたこととなる。溝という遺構の性格が不用品の廃棄場としての性格が強いことを考えれば、至極当然であるが、逆にこのような場で完形品埋納という儀礼行為が行われていたことの方が興味深い。中世村落における儀礼行為がどのようなものであったかは筆者に論ずる力はないが、儀礼行為でも様々な行為があったであろうし、使用することに意義をもつ場合と埋めることに意義をもつ場合があったであろう。このような儀礼行為を遺物から解明することは難しいが、藤田氏も指摘するように、一層の細かな出土状態の記録が必要であると考ええる。なお、藤田氏が指摘するIV期以降の燈明皿機能の導入による特殊日常的要素の減少については、これ以降、土師器皿の大量廃棄される事例が減少することとも呼応し、大筋では理解できることであるが、V期に位置付けられる7号溝や銭畑遺跡Iの6号溝などでもそれ以前と同様の溝内廃棄の形が継続し、燈芯油痕をもつものでも一括埋納されるものは少なくない事例もあり、その導入期にあっては燈明皿としての使用も何らかの儀礼行為に伴っていた可能性があると考ええる。ただ、食器から燈明具としての機能が分化した画期であることは間違いなく、この点は評価しておきたい。

## 第2項 遺物

### 1. 1号溝出土遺物

遺物は下層黒灰色泥土より出土する遺物と上層暗褐色砂質土より出土する遺物に分けられる。

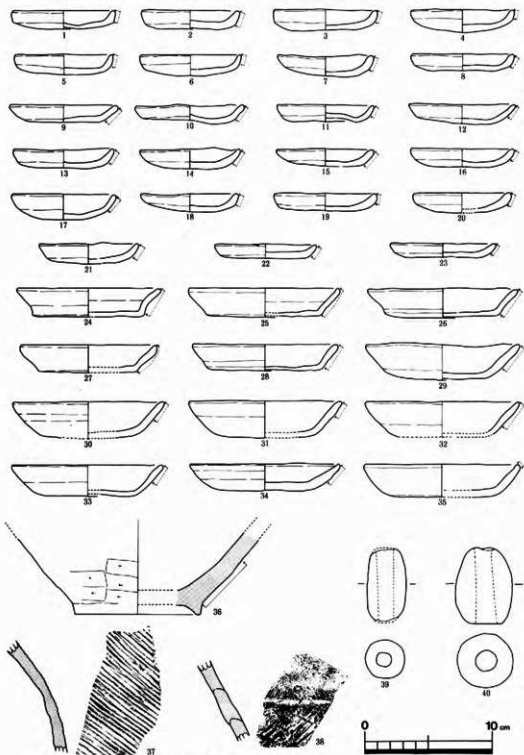


#### a. 下層出土遺物 (第22~24図)

##### 〔土器〕

土器は食膳器具種の土師器皿、貯蔵・調理器具種の加賀・越前・珠洲の甕・鉢、暖房器種の瓦器、漁労具の土鍾に分けられ、破片数から見た構成量は土師器皿807点(97%)、中世陶器甕・鉢(加賀2点、越前11点、珠洲2点)15点(2%)、瓦器1点(0.5%)、土鍾3点(0.5%)となる。この遺構は土師器皿の一括廃棄が認められたものであるが、それは器種構成比にも現れ、日常容器である甕やすり鉢に比べると、土師器皿が群を抜いている。また、同じ食膳器種である中国製磁器がまったく出土していないことも特徴的と言える。

土師器皿(1~35)は法量から口径11~12cm前後を測る大型Ⅰ類と口径8cm前後を測る小型Ⅱ類に分けられる。量比は計測可能な破片数で、Ⅰ類が62個、Ⅱ類が108個あり、Ⅱ類が64%を占める。Ⅰ類・Ⅱ類とも器形や整形・調整方法からⅠ類は3種に、Ⅱ類は4種に分類可能である。ⅠA類(24~28)は平坦な底部から立ち上がり箇所明瞭に体部外反して立ち上がるもので、体部外面全体にヨコナデ(実測図にヨコナデ範囲を破線矢印で明示)を施し、体部内面には難な刷毛状ナデによるスジが明瞭に残る。ⅠB類(29~34)は底部立ち上がり箇所に丸みをもち、体部外傾して立ち上がるもので、体部外面のヨコナデは口縁端部から1/2程度の範囲を行い、体部内面スジ状はあまり目立たない。ⅠC類(35)はB類と同様の器形であるが、口縁端部外側を面取り状に幅狭のヨコナデを行い、断面三角形形状を呈すものである。ⅡA類(1~6・19・20)は体部外面短く直立するもので、底部のやや丸いものと平坦なものがある。調整は外面を口縁端部から底部と体部の転換点までヨコナデする。ⅡB類(7~18)は比較的器肉薄手で、底部と体部の境不明瞭な体部外傾器形を呈するもので、体部外面にはヨコナデを施す。また、この内面には「ℓ」形にまで回した痕跡を残し、他には見られない特徴である。ⅡD類(21・22)はB類に類似するものであるが、内面に「ℓ」形にまで回しの痕跡をもたないものである。22には口縁部に燈芯油痕が確認できる。ⅡE類(23)は器肉が最も薄手で、底部平底、体部短く外傾する器形を呈し、B類同様体部外面ヨコナデを施す。以上、各類型の特徴を述べたが、これら土師器の胎土を観察すると、各類型で比較的まとまりをもつことに気付く。ⅡE類の砂っぽい素地で、窯で焼き上げたような硬質のものを除けば、いずれも細かい粘土質の胎土であることに変わりはないが、1mm大の赤色粒の入り方や発色の違いにより主に3つに区分できる。ⅠB類とⅡB類は赤色粒を比較的多く含むもので、濃肌色か肌色の発色をもつ(B胎土)。これに対し、ⅠA類とⅡA類は赤色粒の入り方がBに比べ確実に少なく、入らないものも存在し、黄色味帯びた灰白色や灰白色、薄肌色の発色をもつ(A胎土)。ⅠC類は赤色粒の入らないものだが、A類と類似する発色をもち、A胎土と同一の胎土の可能性が高い。ⅡD類は赤色粒を含まず、A類よりも灰色に近い(D胎土)。この3つの胎土の違いは基本的に同種胎土をもつ点から産地が全く異なるとは言いが、赤色粒などの混入物の入れ方は異なるわけで、粘土生成の段階で異なる行為が行われた可能性がある。これが調整手法の違いと共通する点は評価すべきで、製作工人グループが3単位存在



第22图 1号溝下層出土遺物(1) (S=1/3)

する可能性をもつ。これらはA類が7割弱と最も多く、次いでB類の3割程度、D類に至っては1割未満で存在する。以上の土師器は一括性の高いものであり、時期幅は少ないと考えられる。

番号	類型	口径	器高	番号	類型	口径	器高	番号	類型	口径	器高	番号	類型	口径	器高
1	ⅡA	8.0	1.5	10	ⅡB	8.4	1.2	19	ⅡA	7.8	1.3	28	I A	11.6	2.1
2	"	7.6	1.5	11	"	7.6	1.4	20	"	7.6	1.5	29	I B	12.0	2.8
3	"	8.2	1.6	12	"	8.3	1.5	21	ⅡD	8.0	1.6	30	"	12.0	2.8
4	"	8.0	1.8	13	"	7.8	1.5	22	"	8.2	1.2	31	"	12.0	2.8
5	"	7.8	1.6	14	"	7.9	1.5	23	ⅡE	11.2	1.1	32	"	12.0	
6	"	7.8	1.7	15	"	7.7	1.4	24	I A	11.3	2.3	33	"	11.6	2.4
7	ⅡB	7.6	1.5	16	"	8.0	1.4	25	"	11.6	2.3	34	"	12.0	2.2
8	"	7.9	1.3	17	"	8.0	2.0	26	"	11.6	2.2	35	I C	12.0	2.6
9	"	8.3	1.3	18	"	7.6	1.4	27	"	10.6	2.2				

下層出土土師器田畠計測表

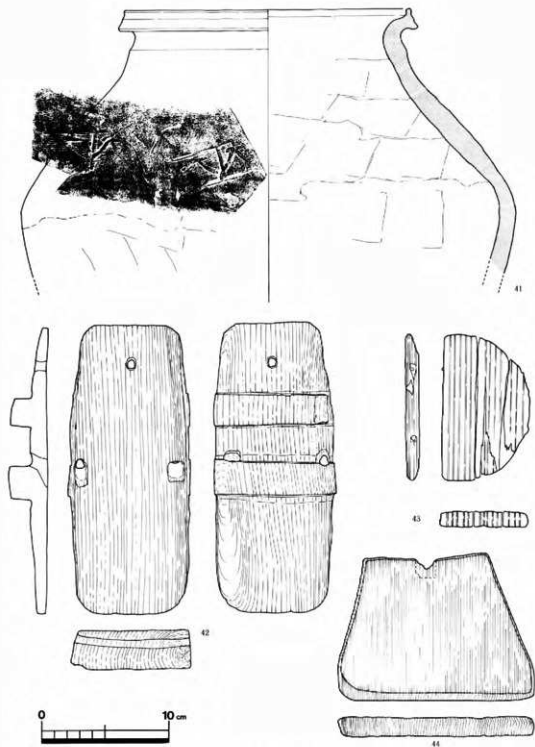
甕・すり鉢(36～38・41)は36が越前産すり鉢で、台径10cmを測る高台をもち、体部下位には手持ちへう削りを施す。内面のおろし目は確認できない。37は須恵器質の珠洲産甕で、胴部外面には平行線文の叩きが施される。38は越前産甕で、胴部上位に縦格子状の押印をもつ。41は加賀産の甕で、口径22.7cm、胴部最大径39.2cmを測り、胴部内面には粗いヘラナデが認められる。押印は胴部上位に「大」字の2つ連なるもので、湯上谷古窯跡で同一の押印(宮下分類VI101、宮下1990)が確認されているものである。この加賀産の甕は口縁部形態から13世紀末～14世紀初頭に位置付けられるものである。中世陶器は器種構成でも述べたとおり、在地である加賀産が1割半程度という極めて少ない占有率で、越前産が7割以上という高い占有率を示す。この時期において在地である加賀産が越前産よりも少ない状況はやや異例と言える。

土鍾(39・40)はいずれも管状土鍾で、全長5.7cm 幅3.1cm、重量42gを測るやや細長の39と全長6.0cm、幅4.4cm、重量118gを測る太い40とがある。

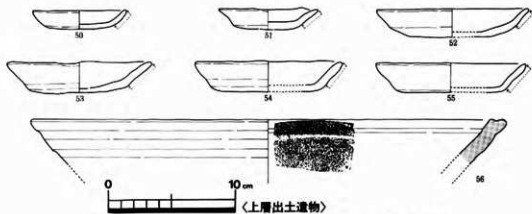
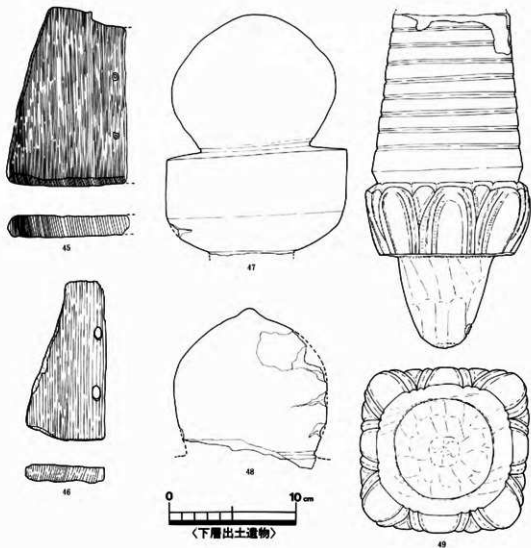
#### 《木製品》

加工してある木製品は下駄・曲物があるが、その量は概して少なく、下層泥土より出土する木質遺物は主に自然木である。

下駄は台と歯の一本で作られた連歯下駄と台と歯の別木差し込み式の差歯下駄とに分けられる。連歯下駄(42)は全長22.8cm、全高3.0cm、幅9.2cmを測るもので、台部の平面形は隅丸長方形を呈す。歯はやや台形を呈す低めのものが、前方よりに付き、後台部が長い形状をなす。緒穴は後ろのほうが大きく、後歯の前、かつ側寄りに空けられている。差歯下駄(44)は歯のみの破片で、歯の高さ11.5cm、幅15.3cmを測る台形をしている。台部との接合側には差し込みのための挟りが認められる。45・46は44に類似する形状をもつため、差歯下駄の歯の可能性をもつものだが、半分が欠損しているもので、欠損する側に2個の穿孔が空けられている。下駄の歯の補修孔とすれ



第23图 1号沟下层出土物(2)(S=1/3)



第24図 1号溝下層出土遺物〔3〕と1号溝上層出土遺物(S=1/3)

ばおもしろい資料である。

曲物(43)は底板の破片で、直径11.5cm、厚さ1.2cmを測る。欠損する側の面には寄せ木接合のための木釘が認められる。

#### 《石製品》

石製品は五輪塔と宝篋印塔のみで、他の石製品は確認できない。五輪塔は2個体ともE区、宝篋印塔はC区と出土地点は異なるが、いずれも上層と下層との中間付近、同一の層から出土しており、下層堆積以後に一括して廃棄されたものと推察する。

五輪塔はほぞ部を欠損した空風輪と風輪との境目以下を欠損した空輪が出土している。空風輪(47)は空輪径13.0cm、風輪径14.2cm、空輪高10.8cm、風輪高8.7cmを測るもので、空輪の頂部丸く、風輪との境が強くすばまっている。空輪(48)は空輪径12.1cm、空輪高11.5cmを測るもので、頂部やや乳頭状にとがり、風輪との境へあまりすばまらない形状を呈す。

宝篋印塔(49)は相輪の破片で、現存高26.3cmを測り、九輪、請花、ほぞの部分が残存している。九輪部分は径9.2～12.0cmを測る隅丸方形で、1.5cm間隔で横走る沈線が巡る。請花の部分は上端径13～13.5cm、下端径10.5cm程度、高さ6cmを測り、上端では隅丸方形、下端では円形に近くなる。蓮弁は1面に3葉ずつ計8葉を配し、その間に小型の間弁を配するもので、花卉を表現する沈線には彫刻工具痕が明瞭に残る。ほぞは上端径7.5cmを測る円形のもので、長さ7cmを測り、下端へと窄まり先端が丸くなる。ほぞの表面には整形痕が明瞭に残る。

以上の石塔の石材は五輪塔が2個とも凝灰岩であるが、47は灰白色の素地をもち色の鮮やかな緑色粒子をやや層状に含むのに対し、48は淡緑色を呈し、緑色粒子も含むが、大粒の白色粒子が目立つ。比較的前者が良質の石質で、後者は剥落が顕著である。さて、凝灰岩の分類については川畑誠氏の研究(川畑1992)があるが、この分類に基づけば、いずれもC類に属し、47はC-1'の滝ヶ原石に、48はC-1\*の原石に該当する。次に、宝篋印塔であるが、これは凝灰質砂岩で、ややくすんだ緑色を呈し、かなり硬質の石材である。凝灰質砂岩の産地は在地では加賀市の福田石のみであるが、加賀市のソソリ石では硬質で濃緑色の砂岩状の凝灰岩が存在しており、この石材の可能性もある。さて、五輪塔が凝灰岩、宝篋印塔が凝灰質砂岩という事例は白山町墳墓遺跡でも確認されており(石川埋文1985)、特に宝篋印塔の石材については同一である可能性が高い。

#### b. 上層出土遺物(第24図)

上層からは土師器皿と甕・鉢の日常容器のみで、木製品や石製品は出土していない。出土量は土師器皿で370点、甕・鉢で3点で、下層同様、土師器皿主体の構成を示す。

土師器皿(50～55)は大小2法量に分けられ、I類は口径11cm台程度、II類は口径7cm台程度を測る。量比は口径の確認できるもので、I類が22点、II類33点であり、II類が6割を占める。器形・調整・胎土から2類に分類できる。IA類(53～55)は平底の底部から体部やや厚めに外傾するもので、外面体部全体にヨコナデが施される。胎土は赤色粒を含まず薄肌色の発色をもち、一部暗灰色を呈し、下層出土の胎土Aに類似する。IB類(52)はやや丸味をもつ底部から底部・

体部の境不明瞭に立ち上がるもので、体部外面にはA類よりも幅狭のヨコナデが施される。胎土は赤色粒を目立って含み、橙褐色の発色をもつもので、下層出土の胎土Bに比較的近い。II B類(50)はやや薄手で体部外傾するもので、体部外面全体にヨコナデが施される。胎土はI B類と同様の特徴をもつ。51もこれと同様の胎土をもつが、底部厚手で、口縁部のうねったもので、内面には燈芯油痕のような黒い附着物が多量に付いている。以上の土師器はA類が7割半、B類が2割半であり、これは下層出土のA・B類量比に近い数値である。

番号	類型	口径	器高	番号	類型	口径	器高	番号	類型	口径	器高
50	II B	7.4	1.5	52	I B	12.0	1.2	54	I A	11.6	2.4
51	"	7.8	1.6	53	I A	11.3	2.4	55	"	11.8	2.4

上層出土土師器皿注量計測表

甕・鉢は加賀産が2点、珠洲産が1点で、図示したものは加賀産のすり鉢(56)である。口径は37.4cmを測り、内面にはおろし目が確認できる。

## 2. 2号溝・3号溝・4号溝出土遺物(第25圖)

2・3・4号溝からの遺物の出土は1号溝に比べると著しく少なく、2号溝で土師器皿87点、甕・鉢の日常容器5点、3号溝で土師器皿44点、日常容器1点、4号溝で土師器皿78点、中国製磁器1点が出土するのみである。

### a. 2号溝出土遺物

土師器皿(1~7)は口径12cm台のI類と口径7~8cm前後のII類に分けられ、1号溝同様、器形・調整・胎土から分類できる。I A類は体部やや外反気味に立ち上がる厚手のもので、体部と底部の転換点が比較的明瞭、体部外面全体にヨコナデを施し、体部内面には横刷毛状のスジが残る。胎土は赤色粒を少量含み、薄肌色の発色をもつ。1号溝下層と比較するとA胎土としたものに類似する。II A類は内面に立ち上がりの転換点をもたないもので、器高は低く、外面の体部と底部との境はヨコナデによって明瞭となっている。胎土はI A類と同様である。II D類は体部外傾器形のもので、薄手の作りをもち、体部外面にはヨコナデを施す。胎土は赤色粒をもたない灰色系統の発色をもつもので、1号溝下層のD胎土に良く似ている。A類にはB類(1号溝B類)としたものと識別困難なものも含まれるが、D類が半数以上を占める状況は間違いないと言える。

日常容器は甕1点とすり鉢1点で、うち加賀産と判断できるものはすり鉢の1点(8)で、これには内面におろし目が確認できる。他は越前産と判断できる甕の破片1点のみである

### b. 3号溝出土遺物

土師器皿(9~12)で図示できたものはいずれもII類のもので、I類は細片で数点出土しているのみである。II類は口径7cm台前後を測るもので、2号溝同様、外面体部・底部転換点の明瞭なII A類(9・10)と体部外傾器形のII D類(11・12)に分けられ、胎土も同様A・D類に分けられる。当遺構出土のものには口縁部に燈芯油痕が認められるものが多く、10~12で確認できる。

日常容器は加賀産と思われる甕の破片1点のみで出土している。

### c. 4号溝出土遺物

土師器皿はⅠ類とⅡ類に分けられるが、Ⅰ類は細片8点のみで、図示できるものはない。Ⅱ類は口径7C台前後と2号溝と同様で、器形・調整・胎土も同様、ⅡA類(13)とⅡD類(14~16)に分けられる。A類とD類の量比も2号溝と良く似た割合を示し、D類が5割強を占有する。

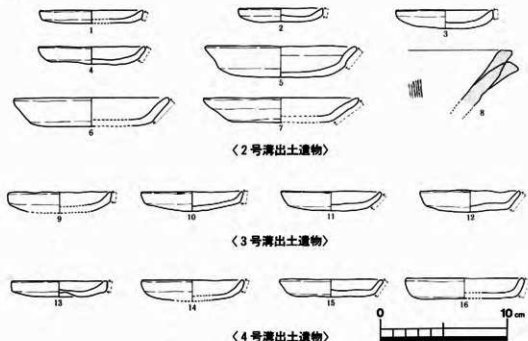
中国製磁器は青磁1点のみ出土しており、体部破片のため図示はしなかったが、編蓮弁文をもつ碗である。14世紀代に位置付け可能なものであろう。

2号溝出土				3号溝出土				4号溝出土			
番号	類型	口径	器高	番号	類型	口径	器高	番号	類型	口径	器高
1	ⅡA	8.1	1.0	5	ⅠA	12.0	2.5	9	ⅡA	8.0	1.6
2	"	6.6	1.1	6	"	12.0	2.3	10	"	8.0	1.6
3	"	7.5	1.5	7	"	12.2	1.9	11	ⅡD	7.8	1.5
4	ⅡD	8.4	1.4					12	"	7.8	1.7
								13	ⅡA	7.4	1.2
								14	ⅡD	8.0	1.6
								15	"	8.0	1.4
								16	"	9.2	1.6

2・3・4号溝出土土師器皿法量計測表

### 3. 7号溝出土遺物 (第26図)

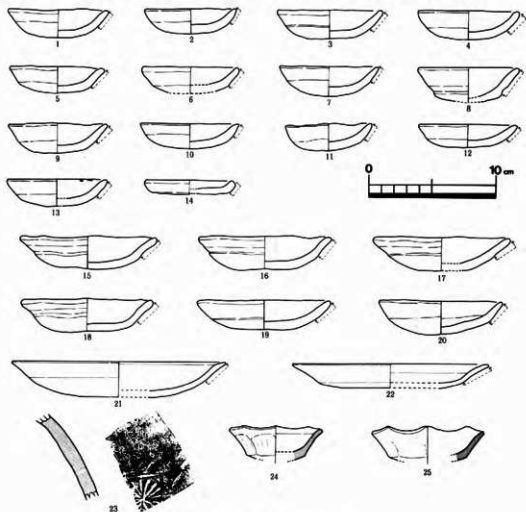
7号溝からは土師器皿、中国製磁器、甕・鉢のみで、木製品などは出土していない。出土量は土師器皿で135点、中国製磁器で5点、甕・鉢で5点で、他の溝同様、土師器皿主体の構成を示す。



第25図 2・3・4号溝出土遺物(S=1/3)



土師器皿（1～22）は口径15cm以上を測る特殊品も2個体存在するが、主に大小2法量に分けられ、Ⅰ類は口径10cm台程度、Ⅱ類は口径7cm台程度を測る。量比は口径の確認できるもので、Ⅰ類が28点、Ⅱ類31点であり、ほぼ半々の占有率をもつ。これらⅠ類・Ⅱ類の器形・調整・胎土を見ると、Ⅰ類で2種、Ⅱ類で3種に分類できる。ⅠA類（15～19）は底部丸底風で、口縁部との境に段をもち、そのまま外傾して立ち上がるもので、全体的に厚手の特徴をもつ。外面ヨコナデの範囲は段から口縁端部までで、内面には刷毛状工具による雑なナデが施される。胎土は赤色粒を少量含み薄い肌色系を呈す。1号溝A胎土に類似する。ⅠB類（20）は口縁部と底部の境に段をもたず、若干屈曲して表現するもので、ヨコナデの範囲はAと共通する。内面には刷毛状のスジがなく、胎土は赤色粒を多めに含み、肌色系で、1号溝のB胎土に類似する。ⅡA類（3・4・6）は底部丸底を呈し、底部と口縁部との境に弱い段をもつ厚手のもので、口縁端部内側が



第26図 7号溝出土遺物（S=1/3）

若干肥厚する。内面にはⅠA類同様刷毛状のスジが明瞭に残り、胎土はⅠA類と共通する。ⅡB類(1・2・7・10~12)は底部と口縁部の境に段をもたず、やや屈曲気味に立ち上がるもので、内面には刷毛状のスジがほとんど確認できない。胎土はⅠB類と共通する。ⅡD類(5・8・9・13)は底部と口縁部の境に段をもたず、口縁部外傾するもので、内面の刷毛状スジはあまり目立たない。胎土は赤色粒を含まず、灰白色を呈し、1号溝D胎土に近いが、1号溝A胎土の赤色粒を含まない一群にも近似している。しかし、ⅡA類とは器形・調整で明瞭に識別できることを重視し、別の一群として捉え、D胎土として理解したい。また、13の口縁部には燈芯油痕が残る。以上の土師器皿の他に口径15cm以上を測る低平な器形で、調整丁寧、薄手の作りのもの(21・22)が存在する。胎土はきめ細かな粉っぽいもので、乳白色を呈し、他とは明瞭に識別できる。この器形は京都系精製品土師器皿として位置付けられているものであり、藤田邦雄氏の分類のFタイプとして位置付けられるものである(藤田1992)。また、胎土に砂を含み硬質に焼き上げた窯焼成品のようなものが1点(14)出土している。これは1号溝下層でも出土しており、ⅡE類としたものである。器形は平底の底部から体部短く立ち上がるもので、極めて低平な器形をしている。

番号	類型	口径	器高	番号	類型	口径	器高	番号	類型	口径	器高	番号	類型	口径	器高
1	ⅡB	7.8	2.2	7	ⅡB	7.8	2.4	13	ⅡD	7.8	2.2	19	ⅠA	10.6	2.3
2	"	7.2	2.0	8	ⅡD	7.9	2.7	14	ⅡE	7.0	1.1	20	ⅠB	9.7	2.6
3	ⅡA	8.2	2.2	9	"	7.8	2.4	15	ⅠA	10.8	2.5	21	京都系	15.5	1.9
4	"	7.8	2.3	10	ⅡB	7.8	2.0	16	"	10.5	2.6	22	"	17.0	2.8
5	ⅡD	7.4	2.1	11	"	6.8	2.2	17	"	10.8	2.7				
6	ⅡA	7.5	2.1	12	"	7.8	1.9	18	"	10.2	2.6				

下層出土土師器皿法量計測表

中国製磁器は図示した白磁多角環2個体(24・25)の他に青磁片1点、白磁片2点が出土している。多角環はいずれも角数6角のもので、口径は24が7.2cm、25が8.6cmを測る。器形は口縁部外反して端部を面取りするもので、軸は乳白色または白色、細かな貫入が全面に入る。時期は15世紀代のものと推察される。

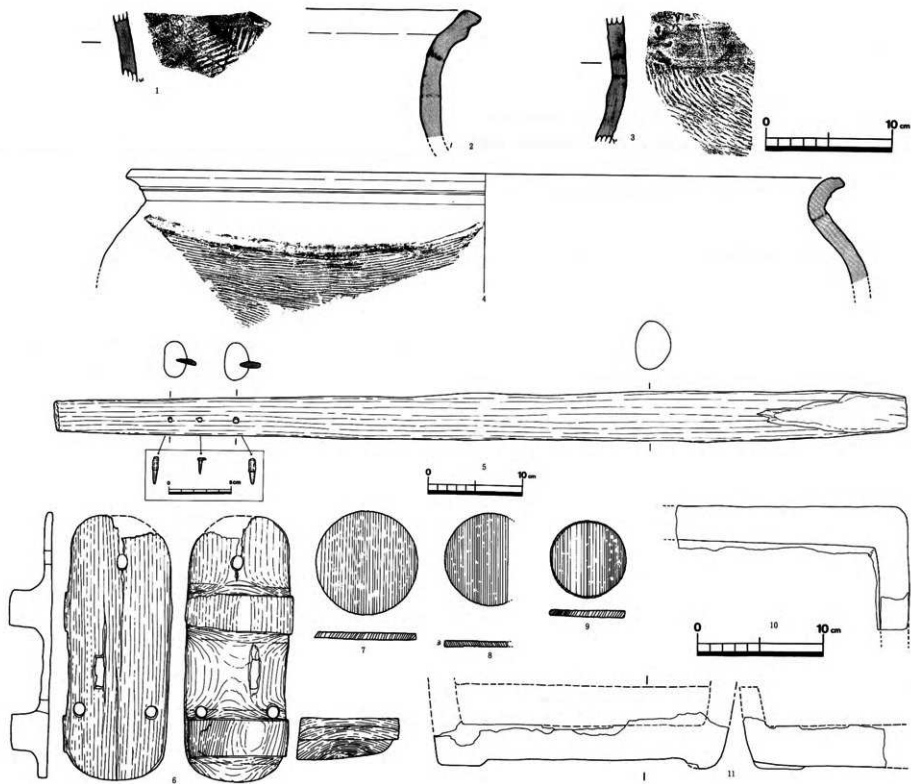
甕・鉢は加賀産の甕3点と越前産の甕2点で、図示したものは加賀産の甕の胴部破片(23)である。この破片には花文の押印が確認でき、湯上谷古窯跡で出土している。宮下氏の分類ではⅡ-301類に分類されているものである(宮下1990)。

#### 4. 5号溝出土遺物(第27図)

出土遺物は落ち込み土坑内にほぼ集中しており、落ち込み以外からの遺物出土は極少ない。さて、出土遺物には遺構に伴うと思われる近世の時期の他に中世のものもまとまって出土している。

##### a. 中世の遺物

全て落ち込み土坑内より出土しており、日常容器である甕・鉢、中国製磁器、瀬戸・美濃の土器類の他、行火などの石製品も出土している。



第27図 5号溝出土遺物（1～5・10・11は落ち込み出土）（4・5はS=1/4，他は1/3）

土器は甕・鉢が主で、陶磁器類は少量、溝で大量出土している土師器皿は1点も確認できていない。甕・鉢は加賀産が7点、越前産が18点、珠洲産が8点で、1号溝と同様越前産が主流を占める。図示したものは越前産の甕(1・2)と珠洲産の甕(3・4)で、越前産のものには斜格子状の押印が確認できる。中国製磁器は青磁のみ2点出土しており、雷文・連弁文が確認できる。時期はほぼ15世紀頃に位置付けられるものと予想される。

石製品は図示した行火(10・11)の他に同一の凝灰岩で加工を施したものが多く出土している。これらは黒色に被熱した面をもつものが多く、開炉裏の緑石として使用されたものが大半と予想する。行火は削り出しの低い足がつき、前面に開口するタイプのもので、前面に堤をもつタイプである。この形態は垣内光次郎氏の分類で1種とされたものであり、行火としては最古形態に属し、14世紀末～15世紀後半の所産と考えられている(垣内1990)。石材はいずれも凝灰岩であるが、1号溝出土の五輪塔とは異なり、やや黄色味を帯びた灰白色を呈し、色のくすんだ大粒緑色粒子と白色粒子を多量に含む。この石材は川畑分類のFグループに属し、中でも遊泉寺石の可能性が高い(川畑1992)。開炉裏緑石も同様である。

#### b. 近世の遺物

大半は落ち込み土坑内出土であるが、溝部分からも少量出土している。遺物は陶磁器の他、下駄・曲物等の木製品などで、出土量は概して少ない。

陶磁器はいずれも国産で、肥前と唐津が確認できる。肥前は磁器と陶器に分けられ、磁器では外面に綾杉文やコンニャク判による文様をもつ碗類が、陶器では白・褐色・緑系の釉のかかった碗・鉢が確認できる。唐津は陶器で、碗・鉢が確認できる。時期はほぼ18世紀代と推察される(藤田邦雄氏よりご教示)。

木製品は下駄と曲物の他、棒状の木製品が出土している。下駄は2点出土しており、いずれも連歯下駄である。6は全長21cm、全高3cm、幅8cmを測り、台部平面形は楕円形を呈す。歯はやや後方につき、緒穴は後歯の前に空けられている。もう1点のものはこれよりも一回り小型のもので、形態は類似する。曲物は底板のみで、直径8.2cmを測る7、7.4cmを測る8、6.1cmを測る9が存在する。5は全長90.5cmを測る棒状の木製品で、幅3.5～5.2cmと端部から徐々に太くなる平面形を呈す。断面形は楕円形を呈し、表面は丁寧に調整されている。この幅狭端部側には3本釘が打ち込まれているが、この釘は片側のみで貫通してはいない。なお、釘の形状は断面角形、直径5mm、長さ2cmのものである。

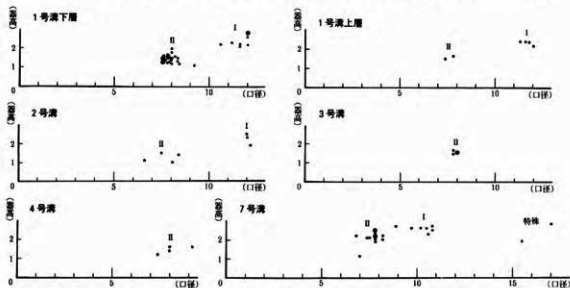
#### 5. 包含層出土遺物

包含層からは土師器皿383個、甕・鉢等の日常容器59点、瓦器3点、中国製磁器6点が出土している他、木製品数点も出土している。いずれもほぼ14～15世紀に位置付けられ、検出された遺構にほぼ該当する時期のものである。包含層出土遺物は時期にばらつきがあり、その概要を述べることは差し控えたいが、日常容器について若干述べると、加賀産31点、越前産20点、珠洲産8点で、1号溝など遺構出土の越前産主体、加賀産少量構成とは異なる様相を呈す。遺構内出土の

遺物が資料的に少ないことより、やや偏った占有率となる可能性が高いことを考慮し、銭畑遺跡前年度調査区域の加賀産87点、越前産55点、珠洲産25点の構成を考えれば（小松市1992）、包含層出土の構成率が本来の構成量と言えそうである。さて、銭畑遺跡の産地構成を他の加賀地方の遺跡と対比すると、14～15世紀の加賀地方における日常容器の産地構成は、在地である加賀産は5割以上（7割前後が一般的）を占め、次いで、珠洲産が2割前後、越前産に至っては1割程度（2割前後の構成量をもつ遺跡もある）が一般的である。遺跡によって若干の違いはあるものの、越前産が極少ない点では共通しており、その中では銭畑遺跡の越前産の占有率は目だった存在と言えそうである。

#### 6. 土師器皿の編年と類型抽出の意味

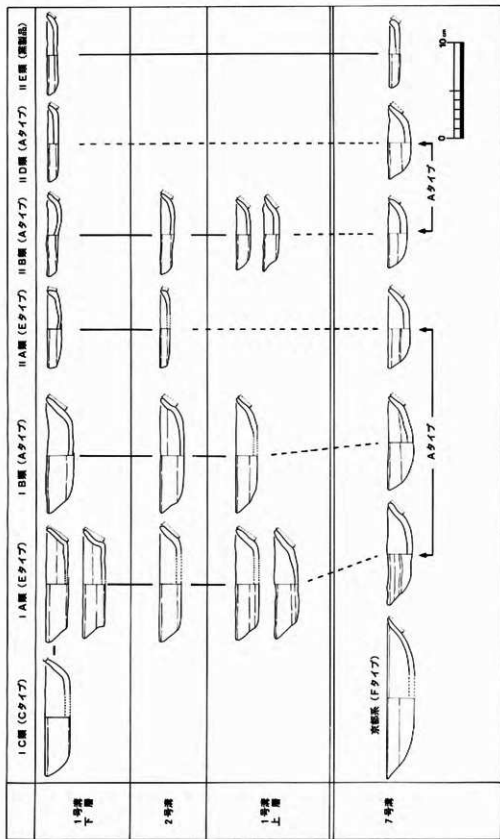
編年案提示の前提として各遺構で述べた分類を整理し、その流れを概観してみたい。まず、法量ではいずれの遺構でも大型Ⅰ類法量と小型Ⅱ類法量が存在するが、7号溝ではⅠ類が小型化してその境が不明瞭となり、また特殊大型法量として15cm以上のものが出現する。ただし、この法量は京都系の特殊精製品であり、Ⅰ類とは別に存在、Ⅰ・Ⅱ類の2法量分化はほぼ継続して存在する。次に器形・調整についてだが、1号溝下層では外面ヨコナデの強く、幅広のA類と幅狭でやや弱めのB類に大別でき、A類では内面刷毛状ナデによるスジが明瞭、B類ではⅡ類に「ℓ」形のなで回しが確認できる。主体はこの2類型であるが、Ⅱ類ではB類に近い器形で体部立ち上がり長めのD類が存在し、定量を占める。このD類には煙炷油痕が残り、特徴的。この他にもⅠ類ではC類とした口縁部面取り状器形とⅡ類で窯焼成品状のE類が存在するが、極少量である。これら各類型はⅠ類・Ⅱ類で胎土がほぼ共通し、まとまりをもつ傾向があり、胎土を含めた類型として提示できる。次に、2・3・4号溝であるが、Ⅰ・Ⅱ類ともに明確なB類の存在は確認で



第28図 土師器皿法量分布図（1メモリ＝1cm、大丸は2点以上）

きず、A類とD類で構成される。A類は体部に幅広のヨコナデを施す点で共通し、特にI類では内面刷毛状のスジが残る。I号溝下層に比べ、I類で体部器肉の厚手化と外反化傾向が見られ、若干底部も丸味を帯びる傾向にある。II類では器高の低下と内面体部立ち上がりの不明瞭化が傾向向か。D類では体部立ち上がりのやや長めに外傾するしっかりした定型化したものとなり、この遺構でも燈芯油痕の目立つものが多い。次にI号溝上層であるが、ここではD類が確認されず、A・B類で構成される。A類はI類法量のみで、器形は2号溝よりも体部外傾の進行と底部小型化が看取でき、口径も若干小型化の傾向を見せ始める。B類はI類が体部ヨコナデの幅狭で共通するが、I類法量のみは器形・調整でB類との共通性はなく、胎土のみで分類した。2～4号溝でB類が欠落するため、段階的な変遷をたどることは難しいが、底部丸底、体部外反、器肉厚手の新器形が存在することが特徴的と言える。次に、7号溝であるが、これまでの様相とは異なり、連続性は追いつらい。しかし、胎土ではA類・B類・D類が存在し、A類ではヨコナデの強さと内面刷毛状ナデによるスジで共通し、B類ではそれと逆の要素で共通、D類では燈芯油痕の目立つ点で共通する。この点を重視すれば、各類型は7号溝でも継続して存在することとなるが、器形の傾向としてはいずれの類型でも底部丸底、体部外傾、器肉厚手となり、1号溝上層で新しい様相として出現した器形が定型化し、それに統一される様相をもつ。法量はI類では確実に1号溝上層よりも小型化するが、II類法量では変化に乏しく、かえって器高において深身となる径高指数において差が生じている。また、7号溝ではこれまで存在していない胎土で京都系と呼ばれる器形のものが登場し、特殊大型法量をもつ。これまでのA～D類とは別類型であり、新出類型として位置付けられる。

以上、分類の整理と各類型の器形変化を述べてきたが、述べた順に1号溝下層→2・3・4号溝→1号溝上層→7号溝の編年序列が可能である。1号溝上層と7号溝ではその間に時間差をもつことは前述したとおりだが、1号溝下層から1号溝上層へは比較的連続した流れが想定できる。さて、加賀地方における土師器皿の編年については藤田邦雄氏の研究（藤田1989・1992）があるが、氏はこの中で非クロコ土師器を器形と調整方法の違いによりA～Fタイプに分類、その各タイプの出現・消滅と器形変化・法量変化から、11世紀末～16世紀前半の資料をI～V期に区分している。当資料を藤田氏の分類案に当てはめて見ると、IA類は底部平底・体部外反器形からEタイプに該当し、B類はI・II類とも通常器形ということでAタイプ、D類もAタイプに属すと思われる。IC類は口縁部面取りからCタイプの形骸化した段階のものと位置付けられ、IIA類はDタイプに類似する。しかし、IIA類はIA類と調整方法で共通し、特に体部と底部の転換点付近の器形が類似している。両者は胎土でも共通点をもち、同一製作集団による可能性をもつことを重視し、IA類と同様、Eタイプの小型類型として位置付けたい。以上は1号溝下層から1号溝上層の土師器皿群の分類であるが、7号溝に関してはそれが当てはまらず、当分類でA・B・D類としたものは全てAタイプに包括される状況となり、唯一この段階より出現する京都系の大型皿がFタイプとして分類される。7号溝段階は器形の統一化が顕著な特徴であり、異なる



第29図 鉄道連絡士師血編年図( S = 1/4 )

製作グループでも統一的な器形を製作するという、器形統合が行われた段階として位置付けられる。以上から、藤田氏の編年案を当てはめれば、1号溝下層はEタイプの定量出現からⅢ-Ⅱ期として位置付けられるが、極少量Cタイプが存在し、IA類にも口縁部の若干摘まり上げ状のCタイプ形骸化口縁が認められる。Cタイプの胎土がA類と共通することを考えれば、藤田氏の指摘するCタイプ→Eタイプの流れの移行段階として位置付けることが可能で、Eタイプの初原的段階として考えることができる。EタイプでのCタイプの名残は次に位置付けられる2・3・4号溝では認められず、Eタイプ器形として完成する。いずれもⅢ-Ⅱ期に位置付けられるものと思われ、その中で1号溝下層はやや古手の様相と言えるであろう。次に位置付けられる1号溝上層段階はEタイプ器形に、底部丸底化と小型化に伴う体部外傾化の傾向が出現する。この器形は次の段階に出現するAタイプ丸底器形へと継続する器形と位置付けできるが、I類法量は依然として11cm台を保っており、Ⅲ-Ⅱ期の範疇で捉えられるものと予想したい。7号溝はI・II類が丸底タイプの器形に統一され、新しい器種としてFタイプが存在する。Aタイプの丸底器形はⅣ-Ⅱ期に定型化し、この段階のものとは底部器形や法量で類似する。しかし、Fタイプの出現はⅤ-Ⅰ期とされており、Ⅳ期に遡る可能性も指摘されているが、当遺構のものがFタイプ導入期の器形とは位置付けづらい。Fタイプが依然として大型法量を呈し、Ⅴ-Ⅰ期に位置付けられる錢畑遺跡I6号溝よりはAタイプが古手の様相をもつことを考えれば、Ⅴ-Ⅰ期とするのが妥当と考える。

以上、編年案を述べたが、各時期を通して類型が継続する状況が見られることは前述したとおりである。1号溝下層から1号溝上層段階はこの類型がそのまま器形に現れ、1遺構内でも数種の器形が混在する現象が特徴であったが、7号溝段階ではほぼ1種の器形に統合され、調整方法や胎土の違いによって辛うじて類型が継続する。7号溝段階に見られる1種形態への器形統合の段階にあっても類型が継続する状況は何を意味するのであろうか。さて、土師器はその焼成が簡易であるために、遺構の確認が難しく、その生産体制を考えるに大きな障害となっている。そのため、消費遺跡からのアプローチが生産体制を解明する唯一の方法であるが、消費遺跡から出土する土師器の器形・成形調整・胎土の3点を細かく分類し、各地域間で比較して行くことが重要となってくる。このような作業はこれまでも行われ、辰口西部遺跡群では各類型と胎土がある一定のまとまりをもって存在する傾向が報告されており（藤田1988）、七尾市藤橋遺跡でも成形・調整の類型と胎土がある程度まとまりをもって存在することが確認されている（木立・三辻1992）。つまり、当遺跡で確認できた類型の提示は他の遺跡でも確認できることであり、器形・調整類型の違いが生産者を表すことも十分考えられる。しかし、基本的な器形類型については藤田氏が「粘土採取地および生産集団は違っても、製作技術は十分に共通し得た」と述べるように、生産者の枠を越えたところで存在するもので、ここでの器形類型というのは調整技法や器形細部での作り手の癖を多く反映させているものを重視している。さて、ここで述べた各類型が生産者を表すという前提でさらに述べるとすれば、1遺構内で出土する儀礼具的要素をもつ食器が複数



の生産者から供給されたこととなり、また、辰口町や加賀市などで出土する中世土師器との胎土や細部器形での違いを考えれば、この生産単位又は供給単位というのは極めて狭い範囲での小規模なものとなる(ただし、比較的離れた箇所でも同一形態・胎土の土師器皿も出土する事例もあり、一部商品的に流通する場合もあった可能性もある)。さて、このような生産・供給の状況は古代末の土師器食器でも確認できるものであり、10世紀以降の安養寺遺跡群の資料では郡内に数箇所の生産地をもつ狭域供給で、その生産地も遺跡周辺地域での小規模生産地が数箇所に別れて存在するような在地狭域供給の可能性が指摘されている(北野1988)。しかし、古代末の上記の様相も限られた資料である点から問題もあり、中域程度を供給圏とする考えも一部では提示されている(木田1993)。この問題は遺跡相互での類型の対比や細分類型のグルーピングなど単一遺跡ではなく、地域を対象とした類型の抽出が必要であり、現段階で結論づけることは早計であるが、古代末と中世の土師器食器生産が比較的類似する形態であったことは間違いないと思え、それは古代末頃から顕在化する祭祀的な土器廃棄などの土器食器の使われ方の変化が中世へと傾斜するものであることと呼応している感がある。あくまでも推測の域を出るものではないが、当時の土師器食器の生産・流通体制を狭域内での小規模なものとする予想し、森降氏の指摘する「地方農村を舞台とする在土器生産においては、古代の国郡単位の生産供給圏よりもさらに小さな単位での地域供給圏が形成されており、これらの小地域の中で土器の生産・流通・消費のサイクルが完結している様相」(森1993)を想定したい。これまで述べたことは中世土器の土師器食器という一部分のものであり、中世土器全般に言えることではないが、地方における在土器生産全般において、どれだけ「商品」として位置付けできるものがあったか、今後、広域流通が予想されがちな甕・すり鉢等も含め、検討し直す必要があると言えるだろう。

#### 引用文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1985『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡(Ⅱ)』
- 垣内光次郎 1990「中世北陸の暖房文化」『石川考古学研究会会誌』第33号 石川考古学研究会
- 川畑 誠 1992「石製品の産地に関する一考察」『小川』石川県立埋蔵文化財センター
- 木田 清 1993「若干の考察」『中村井手遺跡』松任市教育委員会
- 木立雅明・三辻利一 1992「胎土分析」『藤橋遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 北野博司 1988「土師器の生産と供給」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』資料編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 小松市教育委員会 1992『銭畑遺跡Ⅰ』
- 田嶋明人 1992「古代の土器と中世の土師器」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
- 藤田邦雄 1988「中世」『辰口西部遺跡群Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 藤田邦雄 1989「中世土器素描」『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会
- 藤田邦雄 1992「加賀における様相-土師器-」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
- 宮下幸夫 1990「押印等について」『湯上谷古窯跡』小松市教育委員会
- 森 隆 1993「中世の土器生産の特質と成立過程」『古代文化』第45巻第3・4号 古代学協会

## 第5章 自然科学的分析

### 銭畑遺跡出土土器の蛍光X線分析

#### 第1項 分析試料の概要

今回は銭畑遺跡の中でも資料の多かった6・7世紀の須恵器及び土師器を三辻利一氏に依頼し、蛍光X線分析していただいた。さて、今回の分析試料は須恵器主体で、土師器については概要を把握することのみを目的とし、7世紀中頃の1号井戸出土のみ提出した。この土師器は井戸内一括品で、比較的まとまりをもっており、器種は埴と甕を抽出した。須恵器については、1号井戸(全てD群に分類)のものも数点提示したが、包含層出土のものが主で、肉眼観察によるA～E群の5群に分けた中からそれぞれ分析試料を抽出した。蛍光X線分析は肉眼観察分類に沿って、産地同定を試みて戴いた。また、須恵器の大半が在産と考えられたため、同定すべき在産窯の試料として、南加賀古窯跡群と能美窯跡群(辰口窯跡群)の二つの窯跡群の試料を提示した。

さて、南加賀古窯跡群、能美窯跡群ともにこれまで蛍光X線分析を行ったものがあり、大体的様相は把握されていたが、より一層の詳細な試料分析を試みるため、今回は南加賀古窯跡群から最南部に位置する那谷桃の木山1号窯跡(8世紀初頭)、中央部に位置する二ツ梨東山窯跡のうち6世紀中頃の1号窯跡と8世紀初頭の2号窯跡の2基、北部域に位置する戸津古窯跡群のうち8世紀前葉の62号窯跡と9世紀前葉の58号窯跡、10世紀前葉の61号窯跡の3基、計6基の試料を提示した。この試料抽出には南、中央、北の3地点から時期の異なる窯を選定し、器種に偏りがないよう行った。土師器試料としては戸津古窯跡群から9世紀後葉の1号土器溜まりを提示した。また、能美窯跡群からは分析の実施されていない小松市側の窯跡を対象とし、8世紀初頭の河田山1号窯跡と8世紀後半の里川窯跡の2基を選定した。今回の生産地分析試料の提示は、これまでの単一の窯資料でのみ設定していた南加賀古窯跡群の分布領域を信憑性の高いものとするを目的としており、能美窯跡群でも同様、これまでの辰口町域のみの分布領域に小松市域の窯の分布領域を加えることによって信憑性の高いものとするを目的としている。(望月精司)

#### 第2項 蛍光X線分析

土器型式により編年を行うにしても、また、胎土分析により産地を推定するにしても、まずはじめに、土器を分類する作業を必要とする。胎土分析による窯跡出土須恵器の分類にはこれまで、母岩の長石類に由来するとみられるK、Ca、Rb、Srの4因子がとりわけ有効であることが示されて来た。この分類結果が遺跡出土須恵器の産地推定にも活用される訳である。

本報告では銭畑遺跡出土須恵器の産地を推定することを目的としているが、地元の南加賀窯跡群と辰口窯跡群の相互識別の結果についても併せて報告する。

分析法は従来どおり、土器試料を粉末にしてから約15トンの圧力を加えてプレスし、錠剤試料を作成した。理学電機製波長分散型の全自動式蛍光X線分析装置、3270型機が使用された。

窯跡出土の全試料の分析値は表1にまとめられている。分析値はすべて、岩石標準試料JG-1による標準化値で表示されている。

はじめに、各窯跡出土須恵器の化学特性を大雑把に把握するために、Rb-Sr分布図を作成した。

図1には辰口窯跡群の河田山1号窯跡の須恵器のRb-Sr分布図を示す。今回分析した辰口窯跡群の全試料を包含するようにして辰口窯跡群領域を描いてある。長方形に描いてあることには特に意味はない。描き易いためである。したがって、この領域は定性的な領域を示すにすぎないが、それでも、他の窯跡出土須恵器と比較する上には十分役立つ。図2には、同じ辰口窯跡群の里川窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図を示してある。全ての試料は辰口窯跡群領域内に分布しており、両窯の須恵器の化学特性は類似していることを示している。事実、両者の2群間判別分析の結果、両者の相互識別は困難であることを示した。この結果、両窯は辰口窯跡群として一括できることになる。なお、図2には比較のため、後述する南加賀窯跡群の分布領域を示しておいた。

次に、南加賀窯跡群の須恵器の特性と辰口窯跡群との相互識別の結果について述べる。図3には二ッ梨東山1号窯跡の須恵器のRb-Sr分布図を示す。この図には今回分析した南加賀窯跡群のすべての須恵器を包含するようにして南加賀窯跡群領域を描いてある。二ッ梨東山1号窯跡の須恵器はよくまとまって分布している。しかし、南加賀窯跡群領域の左下方に偏って分布することがわかる。このようなことは同じ窯跡群内の窯の間ではしばしば見られることであり、同じ場所ですべて採取しなかったことを示すものと考えられる。他方、二ッ梨東山2号窯跡の須恵器のRb-Sr分布図を図4に示す。4点、二ッ梨東山1号窯跡領域に分布するものがあるが、大部分のものは、Sr(Ca)量が多く、1号窯跡領域の右側にずれて分布した。したがって、4点の須恵器はともかく、二ッ梨東山2号窯跡の多くの須恵器は二ッ梨東山1号窯跡の須恵器のみならず、他の南加賀窯跡群や辰口窯跡群の須恵器から相互識別できる。1号窯跡と2号窯跡の須恵器の間、何故このようにSr量(Ca量)が異なるか、その原因は不明である。

二ッ梨東山1号窯跡と辰口窯跡群の相互識別の結果は図5に示されている。この図は2群間判別分析図と呼ばれる。両軸にとった $D^2_{(1)}$ 、 $D^2_{(2)}$ はそれぞれ、辰口窯跡群、二ッ梨東山1号窯跡の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値であり、K、Ca、Rb、Srの4因子を使って計算された。5%の危険率をかけて、HotellingのT<sup>2</sup>検定にかけた結果、辰口窯跡群の領界として $D^2_{(1)} \leq 10$ 、また、二ッ梨東山1号窯跡の領界として、 $D^2_{(2)} \leq 10$ が求められた。さらに、辰口窯跡群の試料は二ッ梨東山1号窯跡の重心から遠く離れて分布しており、 $D^2_{(1)} > 10$ の領域に、また、二ッ梨東山1号窯跡の試料も $D^2_{(2)} > 10$ の領域に分布し、互いに相手群の領域から十分離れて分布することが判明した。したがって、図5では $D^2_{(1)} \leq 10$ 、 $D^2_{(2)} > 10$ の領域を辰口窯跡群領域とし、 $D^2_{(1)} \leq 10$ 、 $D^2_{(2)} > 10$ の領域を二ッ梨東山1号窯跡領域とした。両群の試料は完

全に分離しており、その相互識別は完全に可能であることが示された。

次に、那谷桃の木山1号窯跡の須恵器のRb-Sr分布図を図6に示す。南加賀窯跡群領域内のかなり広い部分を占めて分布していることがわかる。桃の木山1号窯跡と辰口窯跡群の須恵器の2群間判別分析図は図7に示されている。D<sub>(3)</sub>は桃の木山1号窯跡の重心からのマハラノビスの汎距離である。2群間判別分析図では両者の化学特性が類似してくると、両群の試料は互いに接近して分布するようになり、ついには、D<sup>+</sup><sub>(3)</sub> ≤ 10、D<sup>-</sup><sub>(3)</sub> ≤ 10の重複領域に混在して分布するようになる。図7を見ると、辰口窯跡群の須恵器はほとんどが重複領域に分布するが、うまい具合に、桃の木山1号窯跡の須恵器は大部分がD<sup>+</sup><sub>(3)</sub> ≤ 10、D<sup>-</sup><sub>(3)</sub> > 10の桃の木山1号窯跡領域に分布しており、ある程度の誤判別の確率はあるものの、相互識別の可能性はあることを示している。

図8には戸津58号窯跡の須恵器のRb-Sr分布図を示す。南加賀窯跡群領域の左下方に偏在して分布することがわかる。辰口窯跡群との相互識別の結果は図9に示されている。この場合は両群の試料の多くは重複領域に分布しており、互いに誤判別の確率は高い。両者の相互識別はやや困難である。

同様にして、南加賀窯跡群内の各窯と辰口窯跡群の須恵器の相互識別の可能性を検討した。

図10には戸津61号窯跡の須恵器のRb-Sr分布図を、また、辰口窯跡群との2群間判別図を図11に示す。部分的に相互識別は可能であることを示している。

図12には戸津62号窯跡の須恵器のRb-Sr分布図を示す。戸津61号窯跡の須恵器とは違い、南加賀窯跡群領域の上方に偏って分布することがわかる。また、図13より、辰口窯跡群とも部分的に相互識別ができることがわかる。

このようにしてみると、辰口窯跡群と完全に相互識別できるのは二ツ梨東山1・2号窯跡のみで、他の南加賀窯跡群内の多くの窯の須恵器は部分的にしか、辰口窯跡群の須恵器から相互識別されないことがわかった。南加賀窯跡群の須恵器の化学特性は基本的には辰口窯跡群と同質であることを示している。両地域は地質からみても、基本的には同じであるためであろう。図14にはNa因子を比較してあるが、Na因子でも南加賀窯跡群と辰口窯跡群は類似していることがわかる。強いて言えば、南加賀窯跡群の須恵器の中には辰口窯跡群に比較してNa量が少ないものがあるという点である。とくに、二ツ梨東山1号窯跡出土須恵器には少ない。表1より、Fe因子も両窯跡群の相互識別には有効でないことが分かる。

以上のデータに基づいて、銭畑遺跡から出土した須恵器の産地が南加賀窯跡群か辰口窯跡群かを調べてみた結果について説明する。

銭畑遺跡出土須恵器の分析値は表2にまとめられている。これらの須恵器は考古学的な型式と胎土観察によって、A、B、C、D、Eの5群に分類されている。この分類にしたがってRb-Sr分布図を描いたのが図15～18に示されている。全ての須恵器は南加賀窯跡群領域に分布するが、辰口窯跡群領域内に分布するものは少ない。このことから、定性的にも辰口窯跡群産は少ないことが予想される。どの母集団に帰属するかを判断するためには、各母集団に対して、Hotel

lingのT<sup>2</sup>検定をかけなければならない。そのために、辰口窯跡群、南加賀窯跡群の各窯の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値を計算した。南加賀窯跡群の各窯はRb-Sr分布図からわかるように、ずれて分布したので、各窯ごとにマハラノビスの汎距離の二乗値を計算した。その結果は表3にまとめられている。5%危険率をかけた検定では、各母集団への帰属条件は $D^2_{(1)} \leq 10$  (Xは母集団名)となる。

まず、A群の須恵器をみると、辰口窯跡群に対して、この帰属条件を満足するのはNo3、4、5、9、10、13の6点のみである。しかし、これら6点もマハラノビスの汎距離が辰口窯跡群に対してよりも近い窯が南加賀窯跡群内のいずれかの窯の中にあり、そのため、辰口窯跡群産であることは疑わしい。一応、帰属条件を満足したという点で、南加賀窯跡群産又は辰口窯跡群産としておいたが、辰口窯跡群産の可能性は少ないとみられる。したがって、考古学的観察からの予想どおり、A群の須恵器は南加賀窯跡群産と推定される。同様のことはB群の須恵器についても言える。C群はRb-Sr分布図では辰口窯跡群領域に分布するが、表3ではNo34、37の2点が辰口窯跡群産の可能性はあるものの、それ以上にマハラノビスの汎距離に近い窯が南加賀窯跡群内にあり、C群の須恵器もほとんどが南加賀窯跡群産と推定される。ただし、No33はK量が少し多く、両群への帰属条件を満足しなかった。それで産地不明とされた。

ところが、D群の須恵器は胎土観察から辰口窯跡群産の可能性があるとみられたが、胎土分析では表3に示されているように、辰口窯跡群産の可能性のあるのはNo43の1点のみで、他は辰口窯跡群には帰属しなかった。むしろ、No44を除いた残りの12点の須恵器は戸津62号窯跡に帰属した。No44は今回対象としたどの母集団にも帰属し得ず、産地不明となった。

型式からみて古式の須恵器とみられるE群の須恵器のRb-Sr分布図は図19に示されている。一応、南加賀窯跡群領域内には分布するものの、E群の4点に分布するところに対応して分布した窯はないことは図3、4、6、8、10、12と比較すればわかる。やや近いものとして、那谷桃の木山1号窯跡、戸津62号窯跡がある。しかし、図14のNa因子では1点を除いて他の3点は南加賀窯跡群にも、辰口窯跡群にも対応しない。外部地域からの搬入品である。陶邑からの搬入品である可能性が高い。

次に、1号井戸から出土した須恵器のRb-Sr分布図を図20に示す。3点とも南加賀窯跡群領域の周辺に分布するが、表2より南加賀窯跡群や辰口窯跡群の須恵器に比べてK量が少なく、逆にFe量が多いことがわかる。したがって、南加賀窯跡群産でもなく、辰口窯跡群でもない。外部地域からの搬入品である可能性をもつ。

図21には1号井戸から出土した土師器のRb-Sr分布図を示す。土師器の戸津1号土器溜まり領域は図22に示した戸津1号土器溜まり出土土師器の分析データに基づいて描いたものである。そうすれば、戸津1号土器溜まりに対応するものはほとんどなく、かつ、埴、甕の器種による差異も認められないことがわかる。このままでは土師器のデータ解釈は困難である。今後の宿題としておく。

(三辻利一)

図1 河田山1号窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図

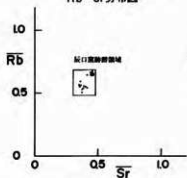


図2 里川窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図

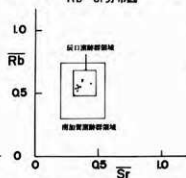


図3 ニッ梨東山1号窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図

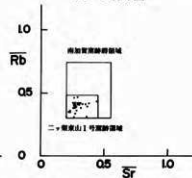


図4 ニッ梨東山2号窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図

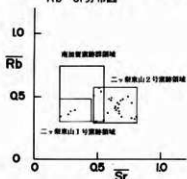


図5 ニッ梨東山1号窯跡と辰口窯跡群の須恵器の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)

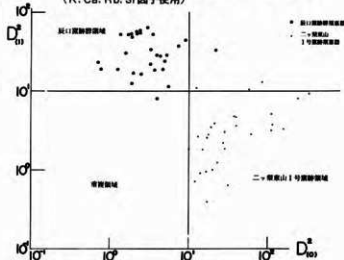


図6 桃ノ木山1号窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図

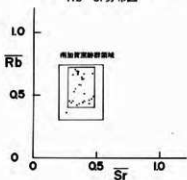


図7 桃ノ木山1号窯跡と辰口窯跡群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)

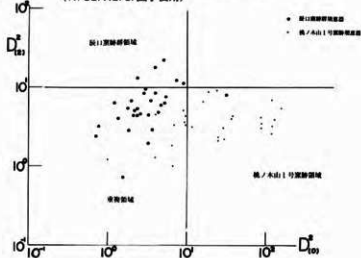


図8 戸津58号窯跡出土須恵器の Rb-Sr分布図

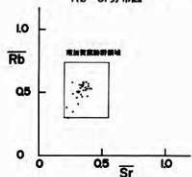


図9 戸津58号窯跡と辰口窯跡群の相互識別(K, Ca, Rb, Sr因子使用)

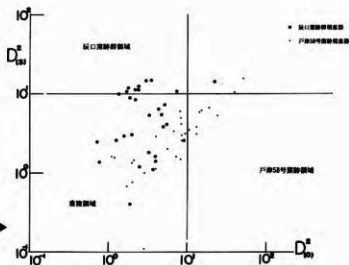


図10 戸津61号窯跡出土須恵器の Rb-Sr分布図

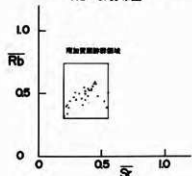


図11 戸津61号窯跡と辰口窯跡群の相互識別(K, Ca, Rb, Sr因子使用)

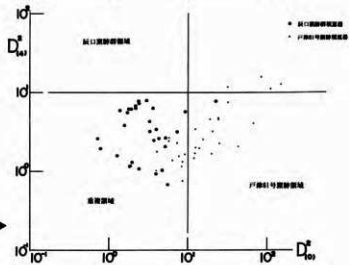


図12 戸津62号窯跡出土須恵器の Rb-Sr分布図

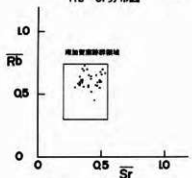


図13 戸津62号窯跡と辰口窯跡群の相互識別(K, Ca, Rb, Sr因子使用)

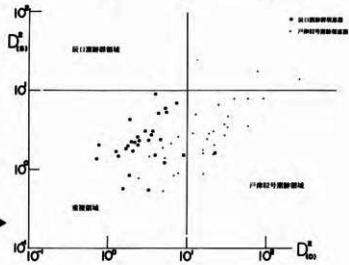


図14 Na 因子の比較

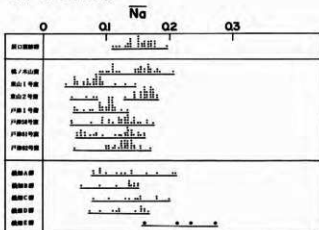


図15 鏡畑遺跡出土A群須恵器の Rb-Sr分布図

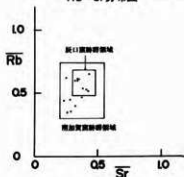


図16 鏡畑遺跡出土B群須恵器の Rb-Sr分布図

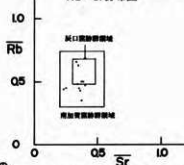


図17 鏡畑遺跡出土C群須恵器の Rb-Sr分布図

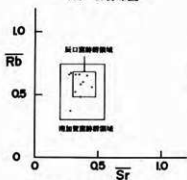


図18 鏡畑遺跡出土D群須恵器の Rb-Sr分布図

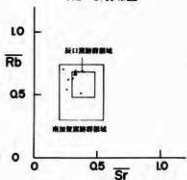


図19 鏡畑遺跡出土E群須恵器の Rb-Sr分布図

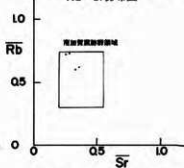


図20 1号井戸出土須恵器の Rb-Sr分布図

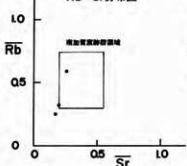


図21 1号井戸出土土師器の Rb-Sr分布図

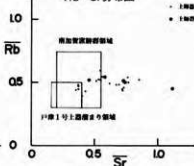


図22 戸津1号土器濱まり出土土師器の Rb-Sr分布図

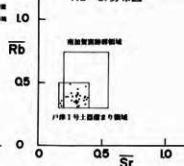




表1 石川県南部地域の粟跡出土須置器、土師器の分析値

出土地	番号	砂 壁	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
星川1号粟跡	1 坏 B	0.360	0.111	2.29	0.541	0.385	0.131	
	2 皿 B	0.409	0.111	1.67	0.542	0.321	0.116	
	3 皿 A	0.418	0.213	2.16	0.578	0.499	0.196	
	4 皿 B	0.366	0.066	1.91	0.484	0.305	0.111	
	5 坏 A	0.388	0.104	1.78	0.517	0.328	0.134	
	6 坏 B	0.397	0.111	2.27	0.546	0.337	0.137	
	7 "	0.415	0.094	1.74	0.558	0.326	0.138	
	8 坏 A	0.351	0.114	1.95	0.545	0.346	0.135	
	9 坏 B	0.421	0.142	1.91	0.566	0.374	0.122	
	10 皿 B	0.475	0.133	1.98	0.601	0.366	0.148	
河田山 1号粟跡	1 甕	0.480	0.154	1.57	0.650	0.456	0.170	
	2 "	0.454	0.158	1.62	0.644	0.451	0.169	
	3 "	0.448	0.151	1.60	0.645	0.461	0.166	
	4 "	0.455	0.157	1.56	0.672	0.449	0.176	
	5 "	0.377	0.116	1.79	0.505	0.370	0.137	
	6 "	0.407	0.109	2.03	0.549	0.348	0.137	
	7 "	0.408	0.120	1.82	0.538	0.378	0.151	
	8 "	0.426	0.114	1.83	0.589	0.360	0.161	
	9 "	0.438	0.132	1.72	0.549	0.399	0.157	
	10 "	0.415	0.122	1.77	0.529	0.366	0.151	
11 "	0.410	0.121	1.77	0.547	0.378	0.151		
12 "	0.441	0.132	1.60	0.638	0.410	0.152		
13 "	0.452	0.153	1.58	0.646	0.436	0.168		
14 "	0.460	0.151	1.57	0.662	0.452	0.174		
15 "	0.459	0.144	1.55	0.661	0.440	0.168		
16 "	0.448	0.152	1.61	0.648	0.446	0.170		
17 "	0.401	0.139	1.72	0.541	0.408	0.160		
18 "	0.412	0.110	1.93	0.564	0.360	0.160		
19 "	0.472	0.151	1.56	0.651	0.444	0.175		
20 "	0.446	0.112	2.04	0.562	0.354	0.154		
郡谷城の木山 1号粟跡	1 坏 B	0.452	0.111	1.76	0.668	0.348	0.177	
	2 "	0.369	0.100	1.52	0.584	0.364	0.155	
	3 "	0.367	0.089	1.51	0.554	0.338	0.148	
	4 "	0.478	0.072	1.97	0.686	0.339	0.167	
	5 "	0.498	0.088	2.06	0.705	0.331	0.154	
	6 "	0.441	0.099	1.68	0.628	0.380	0.170	
	7 坏 B	0.470	0.081	1.73	0.687	0.352	0.161	
	8 "	0.369	0.143	1.56	0.514	0.408	0.154	
	9 "	0.490	0.195	1.99	0.671	0.471	0.179	
	10 "	0.478	0.077	1.82	0.678	0.345	0.185	
	11 "	0.361	0.471	1.52	0.506	0.767	0.169	
	12 "	0.464	0.071	2.10	0.656	0.308	0.144	
	13 長頸瓶	0.468	0.132	2.00	0.640	0.380	0.160	
	14 "	0.396	0.357	1.73	0.507	0.754	0.207	
	15 小甕	0.454	0.111	1.45	0.626	0.364	0.167	
	16 "	0.478	0.107	1.36	0.666	0.401	0.164	
	17 "	0.415	0.112	1.36	0.582	0.373	0.151	
	18 大甕	0.347	0.250	1.94	0.428	0.441	0.120	
	19 "	0.374	0.263	2.28	0.459	0.442	0.151	
	20 "	0.424	0.173	2.04	0.527	0.321	0.101	
	21 "	0.312	0.094	1.49	0.452	0.310	0.110	
	22 "	0.267	0.060	1.57	0.361	0.261	0.089	
	23 "	0.367	0.247	2.13	0.418	0.348	0.094	
	24 "	0.389	0.271	2.20	0.445	0.401	0.115	
	25 "	0.315	0.083	1.54	0.448	0.281	0.104	
	26 "	0.440	0.318	2.26	0.489	0.475	0.168	
	27 "	0.378	0.233	2.18	0.434	0.356	0.112	
	28 "	0.382	0.266	2.22	0.438	0.365	0.111	
	29 "	0.288	0.094	1.52	0.437	0.265	0.112	
	30 "	0.402	0.295	2.25	0.473	0.459	0.160	

出土地	番号	鉄 量	K	Ca	Fe	Rb	Str	Na
二ツ栗東山 1号層	1	坏 H	0.332	0.131	2.25	0.421	0.300	0.088
	2	"	0.353	0.127	2.43	0.422	0.314	0.088
	3	"	0.318	0.091	2.71	0.383	0.271	0.054
	4	"	0.345	0.139	2.88	0.398	0.270	0.072
	5	"	0.323	0.110	3.30	0.359	0.233	0.048
	6	"	0.344	0.100	2.58	0.408	0.285	0.082
	7	"	0.356	0.105	2.57	0.383	0.276	0.053
	8	"	0.328	0.089	2.66	0.383	0.255	0.084
	9	"	0.305	0.120	3.33	0.314	0.258	0.056
	10	"	0.343	0.098	2.78	0.423	0.271	0.091
	11	横 層	0.330	0.095	2.01	0.393	0.360	0.085
	12	"	0.326	0.096	1.97	0.314	0.360	0.090
	13	大形層	0.325	0.096	2.10	0.368	0.263	0.074
	14	"	0.308	0.113	2.67	0.387	0.273	0.070
	15	"	0.395	0.117	2.61	0.405	0.258	0.071
	16	"	0.340	0.169	3.08	0.358	0.277	0.065
	17	"	0.304	0.109	1.81	0.373	0.290	0.080
	18	"	0.351	0.144	1.94	0.417	0.376	0.128
	19	"	0.328	0.091	1.55	0.413	0.326	0.092
	20	"	0.316	0.108	3.00	0.350	0.232	0.083
	21	"	0.366	0.207	1.88	0.428	0.443	0.147
	22	"	0.373	0.158	2.65	0.413	0.295	0.083
	23	"	0.394	0.092	2.62	0.459	0.282	0.089
	24	"	0.325	0.198	1.60	0.379	0.315	0.087
	25	"	0.338	0.221	2.92	0.407	0.288	0.084
	26	"	0.314	0.115	2.74	0.337	0.273	0.091
	27	"	0.316	0.213	2.29	0.352	0.222	0.037
	28	"	0.349	0.248	1.94	0.414	0.353	0.114
	29	"	0.340	0.206	2.53	0.418	0.253	0.050
	30	"	0.286	0.241	3.97	0.311	0.198	0.051

出土地	番号	鉄 量	K	Ca	Fe	Rb	Str	Na
二ツ栗東山 2号層	1	坏 B 層	0.329	0.221	1.75	0.424	0.859	0.143
	2	"	0.293	0.315	2.05	0.316	0.767	0.161
	3	"	0.328	0.213	1.79	0.447	0.658	0.163
	4	"	0.356	0.248	1.81	0.380	0.672	0.144
	5	"	0.379	0.208	1.63	0.474	0.610	0.154
	6	"	0.326	0.241	1.90	0.417	0.639	0.160
	7	"	0.358	0.143	1.59	0.514	0.468	0.170
	8	"	0.352	0.231	1.83	0.390	0.647	0.160
	9	"	0.396	0.220	1.61	0.479	0.569	0.172
	10	"	0.336	0.248	1.77	0.472	0.683	0.175
	11	"	0.355	0.250	1.85	0.341	0.685	0.159
	12	"	0.327	0.243	1.90	0.413	0.696	0.167
	13	"	0.329	0.222	1.88	0.441	0.668	0.173
	14	"	0.363	0.251	1.89	0.365	0.671	0.175
	15	"	0.391	0.347	2.52	0.314	0.551	0.181
	16	"	0.349	0.315	2.87	0.290	0.484	0.179
	17	坏 B	0.327	0.192	1.81	0.365	0.583	0.147
	18	"	0.370	0.322	1.83	0.448	0.765	0.157
	19	"	0.363	0.154	1.58	0.542	0.526	0.176
	20	"	0.328	0.207	1.80	0.493	0.610	0.161
	21	"	0.341	0.151	1.80	0.301	0.486	0.132
	22	"	0.359	0.225	1.75	0.476	0.703	0.171
	23	"	0.343	0.312	2.04	0.338	0.606	0.169
	24	"	0.340	0.318	1.98	0.331	0.769	0.163
	25	"	0.413	0.110	1.42	0.558	0.506	0.155
	26	"	0.353	0.231	1.79	0.495	0.739	0.166
	27	大形層	0.297	0.103	2.78	0.343	0.212	0.047
	28	"	0.343	0.147	2.83	0.386	0.323	0.084
	29	"	0.316	0.156	2.56	0.361	0.267	0.068
	30	"	0.312	0.118	2.18	0.378	0.292	0.073

出土地	番号	砂 量	K	Ca	Fe	Rb	Str	Na
戸塚58号露跡	1	坏B量	0.382	0.110	2.07	0.458	0.900	0.119
	2	"	0.404	0.170	2.05	0.551	0.984	0.170
	3	坏 B	0.427	0.139	1.48	0.586	0.885	0.153
	4	"	0.403	0.180	1.90	0.533	0.404	0.165
	5	"	0.403	0.129	1.51	0.538	0.373	0.152
	6	"	0.268	0.101	2.37	0.361	0.273	0.094
	7	坏 A	0.443	0.129	1.92	0.559	0.923	0.129
	8	皿 A	0.450	0.105	1.88	0.511	0.810	0.130
	9	"	0.426	0.106	1.27	0.523	0.373	0.147
	10	"	0.225	0.088	1.79	0.304	0.288	0.095
	11	"	0.485	0.108	1.80	0.510	0.911	0.139
	12	"	0.382	0.117	1.82	0.469	0.941	0.145
	13	"	0.396	0.095	1.56	0.506	0.821	0.135
	14	"	0.372	0.178	2.91	0.411	0.307	0.105
	15	"	0.445	0.128	2.01	0.583	0.378	0.129
	16	"	0.417	0.161	2.18	0.525	0.406	0.167
	17	"	0.428	0.155	1.98	0.565	0.348	0.118
	18	"	0.388	0.149	1.37	0.472	0.377	0.137
	19	双耳皿	0.429	0.122	0.991	0.575	0.354	0.134
	20	长脚瓶	0.443	0.143	1.39	0.532	0.383	0.145
	21	"	0.428	0.114	1.00	0.540	0.346	0.122
	22	皿口蓋	0.416	0.094	1.27	0.506	0.312	0.105
	23	"	0.452	0.095	1.34	0.556	0.827	0.110
	24	"	0.408	0.122	1.16	0.518	0.345	0.076
	25	皿 B	0.360	0.111	1.55	0.483	0.329	0.126
	26	大型壺	0.415	0.049	1.33	0.580	0.259	0.045
	27	"	0.346	0.076	1.18	0.488	0.265	0.097
	28	"	0.276	0.064	2.04	0.372	0.218	0.045
	29	"	0.388	0.124	1.21	0.540	0.332	0.128
	30	"	0.418	0.108	1.16	0.547	0.341	0.136

出土地	番号	砂 量	K	Ca	Fe	Rb	Str	Na
戸塚61号露跡	1	坏 A	0.337	0.058	1.82	0.439	0.251	0.075
	2	"	0.313	0.051	1.86	0.414	0.231	0.068
	3	"	0.388	0.201	1.27	0.393	0.544	0.116
	4	"	0.357	0.069	1.76	0.485	0.275	0.093
	5	"	0.382	0.287	1.42	0.398	0.524	0.159
	6	"	0.295	0.047	1.94	0.398	0.222	0.066
	7	"	0.295	0.067	1.94	0.399	0.229	0.055
	8	坏 B	0.394	0.066	1.70	0.445	0.302	0.087
	9	"	0.382	0.167	1.78	0.516	0.373	0.182
	10	"	0.418	0.191	1.78	0.550	0.361	0.086
	11	"	0.405	0.106	2.05	0.501	0.323	0.128
	12	"	0.350	0.078	1.87	0.394	0.241	0.059
	13	"	0.343	0.138	1.91	0.456	0.338	0.128
	14	皿 C	0.283	0.061	2.87	0.319	0.199	0.063
	15	"	0.289	0.065	2.95	0.321	0.200	0.061
	16	坏形鍋台	0.411	0.158	1.40	0.588	0.449	0.145
	17	"	0.384	0.138	1.45	0.535	0.416	0.152
	18	"	0.387	0.140	1.48	0.544	0.420	0.153
	19	"	0.410	0.154	1.42	0.581	0.444	0.152
	20	"	0.370	0.135	1.50	0.526	0.403	0.141
	21	皿口鉢	0.360	0.159	1.97	0.451	0.389	0.134
	22	双耳瓶	0.543	0.142	1.24	0.484	0.985	0.080
	23	"	0.353	0.073	1.29	0.507	0.286	0.057
	24	大型壺	0.342	0.100	1.63	0.418	0.349	0.120
	25	"	0.313	0.148	1.42	0.580	0.431	0.135
	26	"	0.420	0.223	1.31	0.511	0.546	0.137
	27	"	0.494	0.174	1.35	0.591	0.452	0.138
	28	"	0.421	0.122	1.34	0.539	0.389	0.140
	29	"	0.387	0.178	1.39	0.476	0.472	0.139
	30	"	0.431	0.127	1.30	0.495	0.367	0.130

出土地	番号	科 種	K	Ca	Fe	Rb	Str	Na
戸焼62号採跡	1	坏B重	0.444	0.087	1.42	0.602	0.346	0.133
	2	"	0.464	0.180	1.45	0.608	0.490	0.130
	3	"	0.471	0.087	1.32	0.700	0.385	0.139
	4	"	0.441	0.089	1.55	0.587	0.330	0.135
	5	"	0.461	0.188	1.41	0.652	0.403	0.125
	6	"	0.390	0.260	1.48	0.445	0.448	0.117
	7	"	0.446	0.112	1.48	0.607	0.353	0.133
	8	"	0.412	0.091	1.89	0.581	0.328	0.107
	9	坏B	0.500	0.134	1.48	0.555	0.357	0.134
	10	"	0.468	0.387	1.78	0.601	0.497	0.102
	11	坏A	0.404	0.242	1.30	0.517	0.419	0.126
	12	"	0.434	0.217	1.18	0.549	0.485	0.154
	13	"	0.426	0.099	1.92	0.548	0.287	0.126
	14	"	0.440	0.194	1.43	0.565	0.469	0.170
	15	"	0.460	0.079	1.52	0.703	0.347	0.127
	16	"	0.423	0.188	1.42	0.557	0.403	0.099
	17	大型重	0.419	0.082	1.58	0.573	0.463	0.049
	18	"	0.571	0.122	1.16	0.588	0.473	0.135
	19	"	0.414	0.114	1.34	0.600	0.485	0.138
	20	"	0.456	0.100	1.35	0.608	0.354	0.137
	21	"	0.475	0.197	1.41	0.620	0.416	0.125
	22	"	0.394	0.190	1.44	0.573	0.402	0.109
	23	"	0.423	0.105	1.34	0.590	0.354	0.143
	24	"	0.408	0.079	1.55	0.577	0.316	0.107
	25	"	0.433	0.152	1.27	0.643	0.416	0.153
	26	"	0.427	0.074	1.26	0.686	0.360	0.123
	27	"	0.454	0.095	1.61	0.640	0.330	0.113
	28	"	0.474	0.213	1.29	0.651	0.457	0.138
	29	"	0.420	0.092	1.47	0.587	0.334	0.130
	30	"	0.484	0.084	1.28	0.726	0.371	0.143

出土地	番号	科 種	K	Ca	Fe	Rb	Str	Na
戸焼1号 土橋池まり (土師跡)	1	内黒焼A	0.355	0.076	1.30	0.450	0.303	0.105
	2	"	0.386	0.084	1.55	0.356	0.358	0.105
	3	内黒焼B	0.334	0.052	1.55	0.387	0.273	0.098
	4	"	0.292	0.083	1.95	0.380	0.175	0.032
	5	"	0.340	0.059	1.20	0.357	0.263	0.123
	6	"	0.365	0.137	1.54	0.372	0.379	0.097
	7	内黒焼C	0.348	0.090	1.31	0.391	0.370	0.107
	8	"	0.349	0.057	1.53	0.486	0.245	0.088
	9	"	0.328	0.058	1.26	0.403	0.298	0.107
	10	"	0.325	0.064	1.28	0.415	0.312	0.107
	11	小型重	0.360	0.048	1.37	0.390	0.234	0.075
	12	"	0.375	0.059	1.49	0.454	0.260	0.089
	13	"	0.358	0.092	1.27	0.388	0.367	0.088
	14	"	0.330	0.059	1.26	0.394	0.301	0.111
	15	"	0.365	0.097	1.33	0.379	0.366	0.107
	16	平底大重	0.342	0.066	1.22	0.353	0.295	0.106
	17	"	0.343	0.060	1.25	0.383	0.295	0.114
	18	"	0.348	0.057	1.17	0.342	0.302	0.112
	19	"	0.360	0.072	1.32	0.373	0.324	0.116
	20	"	0.318	0.053	1.24	0.384	0.216	0.064
	21	"	0.334	0.094	1.91	0.350	0.281	0.076
	22	"	0.381	0.089	1.38	0.413	0.307	0.107
	23	長脚重	0.375	0.070	1.35	0.400	0.326	0.110
	24	大型重	0.345	0.059	1.25	0.354	0.306	0.107
	25	"	0.284	0.043	2.32	0.388	0.166	0.057
	26	"	0.285	0.042	2.23	0.354	0.181	0.050
	27	"	0.333	0.110	1.34	0.331	0.374	0.100
	28	埴	0.280	0.079	1.43	0.397	0.313	0.091
	29	"	0.285	0.081	1.41	0.311	0.314	0.092
	30	埴	0.351	0.102	1.55	0.473	0.369	0.135

表2 綫烟達跡出土須惠器・土師器の分析値

分 類	番 号	器 種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
A 群 須惠器	1	坏 H	0.406	0.083	2.95	0.621	0.246	0.090
	2	"	0.333	0.077	2.54	0.442	0.234	0.080
	3	"	0.319	0.073	1.96	0.447	0.282	0.088
	4	"	0.468	0.140	1.57	0.649	0.431	0.205
	5	"	0.419	0.125	2.00	0.583	0.342	0.143
	6	"	0.449	0.073	2.50	0.604	0.323	0.123
	7	"	0.330	0.143	2.25	0.399	0.321	0.098
	8	"	0.297	0.095	2.22	0.347	0.263	0.081
	9	"	0.419	0.091	1.48	0.542	0.376	0.165
	10	"	0.453	0.087	2.48	0.606	0.347	0.130
	11	壺	0.276	0.115	1.79	0.364	0.293	0.091
	12	"	0.426	0.104	1.63	0.528	0.414	0.180
	13	"	0.410	0.091	1.41	0.607	0.342	0.118
	14	"	0.365	0.116	1.73	0.473	0.368	0.139
	15	"	0.459	0.143	2.04	0.519	0.420	0.210
B 群 須惠器	16	坏 H	0.324	0.075	2.45	0.442	0.231	0.082
	17	"	0.329	0.078	2.09	0.443	0.250	0.091
	18	"	0.473	0.075	2.22	0.655	0.333	0.136
	19	"	0.359	0.107	1.57	0.476	0.344	0.136
	20	"	0.394	0.122	1.35	0.495	0.374	0.148
	21	壺	0.297	0.142	1.13	0.488	0.404	0.140
	22	"	0.304	0.109	1.11	0.427	0.356	0.118
	23	"	0.398	0.141	2.08	0.450	0.348	0.135
	24	"	0.357	0.134	1.82	0.349	0.370	0.144
	25	"	0.364	0.144	1.73	0.496	0.381	0.145
C 群 須惠器	26	"	0.506	0.099	1.70	0.633	0.345	0.152
	27	坏 H	0.324	0.119	1.31	0.480	0.357	0.130
	28	"	0.412	0.201	1.99	0.654	0.412	0.201
	29	"	0.275	0.129	2.38	0.368	0.281	0.078
	30	"	0.468	0.094	2.36	0.659	0.349	0.147
D 群 須惠器	31	坏 H	0.524	0.075	1.98	0.657	0.274	0.132
	32	"	0.465	0.095	1.87	0.562	0.454	0.137
	33	壺	0.564	0.058	1.79	0.668	0.284	0.179
	34	"	0.385	0.101	1.62	0.563	0.357	0.154
	35	"	0.501	0.072	1.73	0.663	0.317	0.151
	36	"	0.342	0.086	1.75	0.518	0.323	0.104
	37	"	0.430	0.126	1.96	0.695	0.388	0.155
	38	坏 H	0.516	0.076	1.79	0.671	0.330	0.155
	39	"	0.530	0.094	1.84	0.662	0.330	0.158
	40	"	0.428	0.065	2.68	0.623	0.274	0.089
	41	"	0.449	0.101	1.62	0.682	0.386	0.119
	42	"	0.394	0.063	3.19	0.541	0.256	0.073
	43	"	0.390	0.113	1.33	0.509	0.370	0.155
	44	壺	0.581	0.075	2.74	0.701	0.227	0.168
	45	"	0.439	0.069	2.55	0.627	0.309	0.169
46	"	0.499	0.060	1.70	0.682	0.345	0.157	
47	壺	0.494	0.072	2.54	0.691	0.333	0.122	
48	"	0.487	0.077	1.75	0.668	0.327	0.145	
49	"	0.493	0.067	2.54	0.665	0.324	0.117	
50	"	0.528	0.066	1.73	0.660	0.326	0.159	
E 群 須惠器	51	坏 H	0.566	0.090	1.48	0.724	0.250	0.161
	52	"	0.602	0.086	2.23	0.730	0.280	0.234
	53	高 坏	0.456	0.123	2.41	0.618	0.355	0.213
	54	壺	0.456	0.123	2.41	0.602	0.333	0.272
D 群 須惠器	1	壺	0.395	0.106	1.62	0.584	0.258	0.076
	2	坏 H	0.247	0.112	4.08	0.248	0.167	0.043
	3	"	0.273	0.099	3.15	0.328	0.200	0.047
土師器	1	壺	0.455	0.419	1.24	0.537	0.764	0.217
	2	"	0.380	0.286	2.99	0.435	0.349	0.206
	3	"	0.360	0.308	2.53	0.450	0.368	0.178

出土地 I号 井戸	分類 土留跡	分區	番号	跡地	K	Ca	Fe	Rb	St	Na
	4	變	0.395	0.350	0.991	0.437	0.719	0.192		
	5	"	0.507	0.239	0.991	0.524	0.532	0.183		
	6	"	0.438	0.373	1.14	0.503	0.773	0.234		
	7	"	0.401	0.109	2.09	0.433	0.431	0.171		
	8	"	0.451	0.297	0.987	0.479	0.671	0.203		
	9	"	0.394	0.278	2.42	0.476	0.371	0.198		
	10	"	0.481	0.247	1.51	0.590	0.540	0.169		
	11	"	0.506	0.244	1.37	0.505	0.508	0.181		
	12	"	0.383	0.292	2.40	0.476	0.373	0.198		
	13	"	0.361	0.294	1.77	0.389	0.401	0.140		
	14	"	0.443	0.314	1.14	0.461	0.732	0.243		

出土地 I号 井戸	分類 土留跡	分區	番号	跡地	K	Ca	Fe	Rb	St	Na
	15	變	0.485	0.254	1.15	0.538	0.555	0.185		
	16	"	0.396	0.337	1.00	0.440	0.720	0.200		
	17	"	0.508	0.437	1.96	0.516	0.651	0.240		
	18	"	0.444	0.285	1.23	0.486	0.617	0.183		
	19	"	0.448	0.273	0.978	0.482	0.689	0.182		
	20	"	0.507	0.260	1.09	0.519	0.595	0.189		
	21	塊	0.472	0.266	0.855	0.537	0.577	0.140		
	22	"	0.446	0.382	1.94	0.496	0.743	0.219		
	23	"	0.508	0.325	1.70	0.514	0.726	0.286		
	24	"	0.474	0.446	0.920	0.445	1.11	0.244		
	25	"	0.478	0.209	0.996	0.523	0.455	0.111		

表3 線煙道跡出土須蓋跡の産地推定

番号	分區	戻り口 跡跡	焼ノ木 山1區	二ツ梨 東山1區	戸 58号	戸 61号	戸 62号	推定産地
1	A群	50	33	55	29	14	7.6	附加實績
2	"	12	7.8	8.0	5.0	2.3	19	"
3	"	10	4.8	13	4.5	1.5	17	"
4	"	2.2	3.7	53	7.8	6.8	1.3	or戻り口
5	"	7.4	3.5	35	6.7	5.5	1.2	or"
6	"	13	8.2	39	5.7	8.3	1.8	附加實績
7	"	25	9.0	1.2	4.0	3.3	17	"
8	"	23	24	4.0	5.9	3.1	31	"
9	"	0.9	28	18	9.0	5.1	2.7	or戻り口
10	"	8.8	9.5	39	4.6	7.3	1.0	or"
11	"	28	6.3	14	5.7	4.0	30	"
12	"	22	55	19	18	6.7	3.9	"
13	"	8.2	2.1	40	8.6	6.2	1.6	or戻り口
14	"	11	15	6.7	5.5	0.5	8.1	or"
15	"	22	75	35	13	3.3	3.9	"

番号	分區	戻り口 跡跡	焼ノ木 山1區	二ツ梨 東山1區	戸 58号	戸 61号	戸 62号	推定産地	
16	B群	13	7.1	11	5.7	2.6	20	附加實績	
17	"	"	9.4	6.1	8.6	3.4	1.6	18	"
18	"	23	4.3	58	9.2	18	2.2	"	
19	"	6.7	8.1	7.5	3.0	0.4	8.6	or戻り口	
20	"	13	4.5	25	9.7	1.5	10	"	
21	"	34	15.1	44	21	3.8	19	戸跡61号	
22	"	26	7.9	18	11	2.3	19	"	
23	"	15	2.1	7.6	3.1	1.3	11	附加實績	
24	"	60	112	13	28	5.4	22	"	
25	"	"	8.8	2.1	13	4.0	0.5	6.2	"
26	"	21	27	68	6.5	11	4.47	"	
27	C群	18	4.3	24	8.3	1.4	12	"	
28	"	32	71	71	96	17	4.9	"	
29	"	32	5.3	15	7.1	6.7	30	"	
30	"	19	5.9	63	7.1	11	2.5	"	

番号	分類	底口距離	橋ノ木	二ツ根	戸ノ橋	戸ノ橋	戸ノ橋	備定距離
		距離	山ノ上	東山ノ上	58号線	61号線	62号線	
31	C群	60	28	95	20	19	12	附加距離
32	"	47	107	37	38	17	53	"
33	"	88	110	163	82	28	17	"
34	"	5.6	4.4	37	9.7	4.4	3.1	" or 底口距離
35	"	34	14	73	10	15	5.0	"
36	"	8.8	3.6	28	8.3	2.7	9.2	"
37	"	0.4	1.0	32	3.5	3.6	0.2	" or 底口距離
38	D群	35	20	82	11	16	6.0	"
39	"	37	29	92	11	16	8.1	"
40	"	31	6.2	48	14	10	4.1	"
41	"	15	8.8	87	16	12	2.3	"
42	"	15	5.6	23	6.7	4.7	7.4	"
43	"	5.3	8.2	12	4.4	0.9	5.0	" or 底口距離
44	"	142	52	170	54	95	30	不明
45	"	20	1.9	46	9.5	9.9	2.1	附加距離
46	"	29	6.7	74	10	16	3.8	"
47	"	35	4.1	77	13	17	4.1	"
48	"	29	5.3	67	10	14	3.4	"
49	"	32	11	89	11	16	3.9	"
50	"	41	20	93	12	17	7.9	"



図23 荒崎群と道路の位置

### 第3項 蛍光X線分析結果に対する考古学的所見

#### 1. 銭畑遺跡出土の須恵器・土師器について

三辻氏が第2項で述べた銭畑遺跡出土の須恵器・土師器の産地比定について、考古学の立場から所見を述べたい。

まず、須恵器であるが、E群については、三辻氏の分析結果で、非在地産とする結果が出ており、筆者の見解と整合性をもつ。産地としては三辻氏の想定される陶邑窯跡群産とするのが妥当であろう。次に、A・B群についてであるが、両者は類似する胎土で、一群としての設定も可能であるが、比較的B群に砂粒が目立ちにくいことから、分類している。両群の砂粒の入り方や粘土素地の粗さは、南加賀窯跡群産特有のもので、これは三辻氏の分析結果と整合性をもち、南加賀窯跡群産と見て、ほぼ間違いない。このA・B群に類似する分析値をもつものにC群がある。三辻氏はA・B群同様の南加賀窯跡群産を想定しているが、C群はA・B群に多く見られた砂粒が皆無に近く、粘土素地のきめ細かさから、一般的な南加賀窯跡群須恵器の胎土特徴を有していない。このため、南加賀窯跡群以外の産地も想定されるが、南加賀窯跡群よりも良質の胎土である能美窯跡群とは粘土素地の質感が異なり、能美窯跡群胎土に含まれる白色で軟質のくず石を含まないことから、能美窯跡群の可能性は低く、南加賀地方の消費遺跡において同質の胎土のものが定量出土していることを鑑み、三辻氏の分析どおり、南加賀窯跡群産とするのが妥当と考える。ただ、南加賀窯跡群産の中では最も良質の胎土であり、8世紀以降は確認できない胎土であるため、南加賀地域でも異なる窯の存在の可能性も残されている。次に、D群であるが、これも三辻氏の分析結果では南加賀窯跡群産と想定されている。しかし、D群はA～C群よりもSr量が高めにまとまり、Ca量に0.1を越すものが少なく、K量に0.4以下のものが少ないという差異が見られ、異なる化学特性をもつ胎土として位置付けできるような気がする。これは肉眼観察でも同様で、D群の粘土素地の粘質性や白色で軟質のくず石を多く含む点は、A～C群では確認できなかったものであり、南加賀窯跡群須恵器では確認されない特徴と言える。類似する特徴をもつのは能美窯跡群にあり、ここに産地を求められると想定するが、今回提示している能美窯跡群須恵器の分析値とは類似性が乏しい。しかし、今回の能美窯跡群の分析試料には入っていないが、辰口町側に分布する湯屋窯跡や和気地区の須恵器窯跡の分析値とは類似する点もち(三辻1985)、辰口町側を含めた能美窯跡群領域としては十分整合性をもたせることができると考える。ただし、辰口町側の須恵器窯跡を含めても能美窯跡群の分析値は南加賀窯跡群の分析値と重複する部分があり、蛍光X線分析の見地のみから両窯跡群の識別を行うことは誤判別を伴うものと理解しておく必要はあろう。

次に、土師器についてであるが、肉眼観察で見られた胎土のA・B群の違いは分析値との整合性が乏しく、同質の胎土として位置付けできる。また、埴と甕での分析値のまとまりも確認し難く、器種による産地別も想定しづらい。さて、三辻氏はこの土師器産地について、結論を避けられており、保留する形をとっている。このため、三辻氏の分析値をもとに筆者の私見ではあるが



産地比定を試みる。まず、土師器生産地試料として提示したものは南加賀窯跡群の1号土器溜まりのみで、能美窯跡群のものは提示していない。しかし、1号土器溜まりのいずれの因子の分布を見ても須恵器窯跡の分布領域内にあり、基本的に須恵器窯跡群内で生産された土師器は須恵器と同一の化学特性をもつことが理解できると思う。つまり、須恵器・土師器に区別なく、銭畑遺跡の土師器を須恵器窯跡群内の須恵器と対比すれば、須恵器窯跡群内での生産品かどうかはわかるはずである。銭畑遺跡出土の土師器の分布領域を見ると、K量、Rb量は南加賀窯跡群・能美窯跡群と類似する傾向を見せるが、他の因子では異なる分布域が設定でき、両窯跡群産とすることは考え難い。つまり、他の生産地が想定されるわけであるが、北加賀地方の土師器の分析値や能登地方とも異なり、やはり、在地に生産地を求めるのが妥当と言える。積極的な論拠はないが、須恵器窯跡群内の基幹的生产地からのものではなく、遺跡周辺に存在する小規模生産地の製品と想定しておきたい。

## 2. 生産地試料における蛍光X線分析値の器種別分布について

以上、銭畑遺跡出土須恵器・土師器の産地比定を考古学的見解を織り込みながら、考察を加えてきたが、最後に、今回提示された蛍光X線分析値の生産地データ（特に南加賀窯跡群）をもとに気づいた点を若干述べてみたい。

さて、今回の生産地試料は同一案内の複数器種を抽出しているが、この分析値は筆者が当初予想したような窯ごとにまとまるような分布領域はもたず、比較的ばらついて存在し、まとまっても2群に分けられるような分布領域をもつ。そこで、三辻氏の分析値を生産器種に分けて分布図を描いたところ、図示した通り、比較的まとまることに気づいた。このような生産器種による分析値のまとまりは、これまで岡山理科大学の研究グループによって報告されており（飯島・亀田・白石・直原1991）、小型器種と大型器種に分析値のずれが存在することが指摘されている。南加賀窯跡群では、全ての窯跡・化学因子が該当するとは言えないが、ニッ梨東山2号窯跡の甕と環Bにおいて、Sr量が0.4を境に明瞭に別れ、桃の木山窯跡の環と甕においてRb量が0.5を境に別れる。また、戸津58・61号窯跡でも重複部分はあるものの、Sr量の中心にずれがあり、Rb-Sr分布以外にもCa量やNa量で器種の違いにより分布領域が別れる。つまり、生産器種特に甕と食膳具器種とでは、異なる粘土を使用している可能性が高いわけであるが、これを肉眼観察で見ると、さほど違いは認められない。確かに、食膳具器種に胎土の良質なものも存在するが、甕にのみ砂粒が多く含まれるような統一性はなく、肉眼では確認し難い他の要因が存在するような気がする。仮に、粘土中に意識的に何らかの行為を施したとして、それが大型器種と小型器種とで異なる質・量であったなら、その行為には法則性が存在するはずである。つまり、そのような行為により粘土の化学組成が変化すれば、分析値の分布領域の違いには法則性が存在するはずである。しかし、小型器種と大型器種との化学因子分布領域には法則性はなく、Ca量では桃の木山窯跡とニッ梨東山2号窯跡で甕と環の分布域が逆転する現象があったり、Na量では桃の木山窯跡・ニッ梨東山2号窯跡と戸津61号窯跡で環・甕の分布域が逆転、Rb・Srでも同様の現象が見

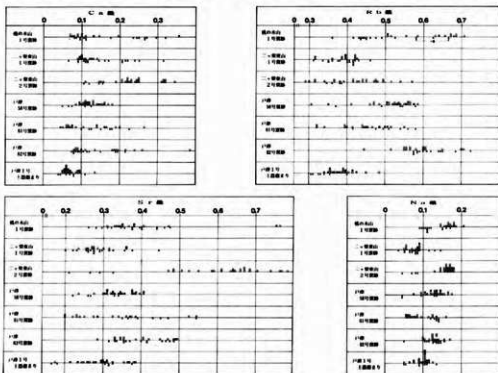
られる(岡山理科大学の研究グループによる考察では、窯跡付近採取の粘土の、粘土中の砂を取り除くことによって化学組成が変化するとされており、砂粒を取り除いた粘土の方が窯跡出土須恵器の化学組成に近づくとしてされている。そして、主成分であるSiO<sub>2</sub>の量が甕と坏では甕の方が少なく、そのまま粘土と砂粒を除いた粘土との関係に対応しているとしてされている。しかし、この分析でも全体としては土器に近づく傾向はあるが、離れるものもあるとしてされており、当試料のように逆の結果もあり得る。飯島・亀田・白石・直原1991)。このように考えてみると、器種による化学因子の違いは基本的に粘土に施される行為、例えば混和材の混入などとの関連性が薄く(戸津1号土器溜まり試料では坩と長甕を提示してあるが、粒の大きめの砂を胎土中に多く含む長甕と比較的砂の量が少ない坩とでは分析値に大きな違いは確認できず、同質の分布領域をもつ)、もともと粘土素地がもつ化学組成の違いに主な原因があるような気がする。つまり、器種により粘土採掘場所を違えた可能性で、これを考えるうえで、同一窯場内での時期の異なる窯の分析値のずれが参考となる。この事例は二ツ梨東山1・2号窯跡や戸津58・61・62号窯跡で確認でき、両者とも窯場ごとに類似する分布域の傾向はあるものの、各窯によって分布域の中心がずれている。窯場によって分布域が異なる傾向があるわけだから(南加賀窯跡群の二ツ梨東山窯跡の分布領域の違いや能美窯跡群の辰口町側と小松市側の違い)粘土採取は窯に近接する場所からということになるわけで、近接する粘土採取地であっても採掘場所の深さや位置によって異なる化学組成が存在する可能性があるわけである。今回は窯跡採取粘土の分析を行っていないため、他の事例を引用するが、埼玉県鳩山窯跡群では粘土採掘坑及び工房跡出土の粘土の蛍光X線分析が三辻氏によって行われている(三辻1992)。この事例ではいずれの粘土もほぼ鳩山窯跡群の須恵器に類似する分析値をもち、須恵器生産に使用された粘土であることが分かっている。さて、筆者がここで注目したいのは、その粘土の化学組成があまりまとまりを持っていないことである。この窯跡群は幾つかの支群に別れるため、ばらつきがあるのは当然ではあるが、一つの単位群と推察される柳原A地区の粘土採掘坑でも特定の化学因子ではなく、複数の因子でばらつきがあり、近接した場所であっても粘土採取地が異なれば、異なる化学組成をもつことを示しているものと判断する。この事例をそのまま当てはめるには無理があるかもしれないが、採掘位置や採掘の深さによって、粘土の化学組成が異なっている可能性は十分に予想できる。つまり、逆の場合、粘土採取地や採掘の深さによって粘土の化学組成が異ならないものもあった訳で、これは戸津62号窯跡や二ツ梨東山1号窯跡の事例が該当する。基本的に、粘土採掘は工房単位にまかされていたものと予想するが、器種により粘土採取地を変えることは何を意味するのであろうか。ここで注目されるのが、食膳具を代表とする小型器種と甕を代表とする大型器種の成形方法の違いである。前者はロクロ整形(成形)、後者は叩き成形という成形段階の大きな違いがあり、それに適した粘土を選別する行為が必要であったのではなかろうか。食膳具と甕とを別の工人が製作したために採掘場所が異なることも可能性としてはなくはないが(末松庵寺出土瓦のうち湯屋窯跡産と推定されるⅡ類・Ⅲ類はRb量に変化があり、また、Ⅲ類でも叩き板の異なるA<sub>1</sub>類は他のA<sub>1</sub>類・

A<sub>s</sub>類とCa量において異なる分布領域をもつ。このような互類型の違いは工人の違いを表す可能性が高く、つまりは、粘土の違いは工人の違いを表す可能性もある。三辻・木立(1986)、成形方法に応じた粘土選別による結果であったと推察しておきたい。

以上、生産地試料の蛍光X線分析結果から気づいたことを書いてみた。筆者に化学的知識が乏しく、分析値の解釈に誤りがあるかもしれないが、器種ごとの分布域の違いは確実であり、分析値を見るにおいて、重要な点であると考え。蛍光X線分析による胎土分析は、これまで消費遺跡出土の土器産地推定から、流通の問題を取り扱うことが多かったが、今後は前述のような生産地における粘土採取・生成、そして工人及び工人集落の問題解明に活用される方向性も検討しなければならないと思う。この点については今後の課題としておきたい。(望月精司)

#### 引用文献

- 飯島賢治・亀田修一・白石純・直原伸二 1991「蛍光X線分析法による胎土分析に関する基礎的研究－備前地方の須恵器窯跡資料を中心に－」『岡山理科大学森山研究所研究報告』第17号  
 三辻利一 1985「湯屋窯跡出土屋瓦・須恵器と隣接諸地域資料の胎土分析」『辰口町湯屋古窯跡』辰口町教育委員会  
 三辻利一 1992「鳩山窯跡群出土須恵器および粘土の蛍光X線分析」『鳩山窯跡群IV』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会  
 三辻利一・木立雅朗 1986「末松庵寺出土瓦の産地」『石川考古学研究会会誌』第29号 石川考古学研究会



各窯跡におけるCa因子・Rb因子・Sr因子・Na因子の器種別分布

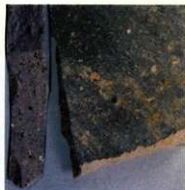
(○-食器器具器種、■-須恵器は鉢・瓶・壺、土師器は小型壺、▲-須恵器は壺、土師器は長壺・埴)



A群



B群



C群



D群



E群

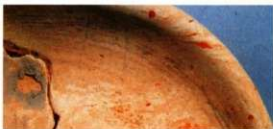


能美京里川支群 (D群?)

古墳時代須惠器胎土類型



A胎土 (A類)



B胎土 (B類)



C胎土 (D類)



窯焼成品 (E類)

中世土師器皿胎土類型



銭畑遺跡全景（北→南）



1号溝完掘全景（北→南）

1号溝掘り下け調査風景



1号溝写真①



1号溝断面土層 (B-B')



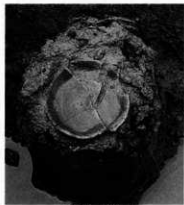
下層出土下駄



上層出土土師器皿



下層出土土師器皿



下層出土土師器皿



中層出土宝篋印塔



中層出土五輪塔



2号溝全景(南→北)



5号溝全景(1号溝との重複)



5号溝内落ち込み土坑



3号溝全景(西→東)



落ち込み内遺物出土状況



7号溝全景(南→北)



7号溝土層断面(B-B')



遺物出土状況(壁際の中～下層)



中～下層出土の土師器皿





1・2号井戸全景



1号井戸の井戸側



1号井戸土層断面



2号井戸の井戸側



2号井戸土層断面



包含層出土弥生式土器



土師器埴(削り)

土師器埴(コガキ) ▶

1号井戸出土土器



須恵器壺



土師器甕

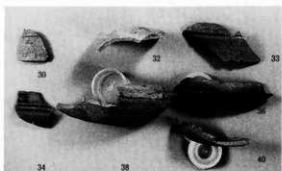
2号井戸出土土器



B群須恵器



A群須恵器



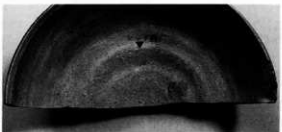
B群須恵器



D群須恵器



C群須恵器

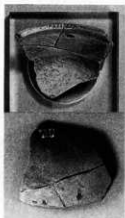
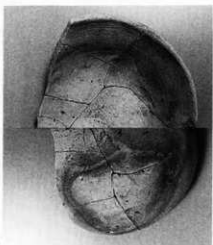
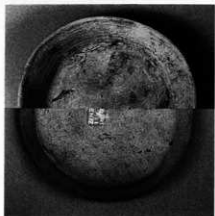


内面天井にシッタ痕を残す



内面天井に同心円当具状成形痕

包含層出土須恵器



▲ 土師器Ⅲ I A類

土師器Ⅲ I B類 ▶

土師器Ⅲ I C類



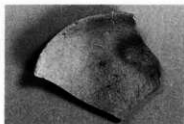
土師器Ⅲ II A類

土師器Ⅲ II B類

土師器Ⅲ II D類



土師器Ⅲ II E類



1号溝下層出土遺物①



41

加賀甕押印 (湯上谷VI-101)



38

越前甕押印



宝篋印塔



◀五輪塔 (48)



▲土鐘



差面下駄 ▶

45

44



五輪塔



43

▲曲物底板

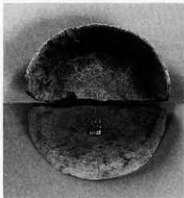
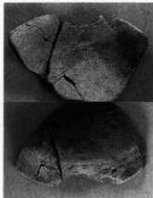


42



差面下駄 ▶

1号溝下層出土遺物 2)



土師器ⅢⅠA類

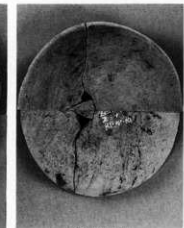
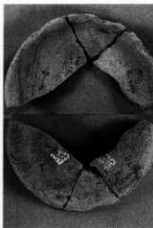
土師器ⅢⅠB類

土師器ⅢⅡB類



土師器ⅢⅡB類

1号溝上層出土土師器



土師器ⅢⅠA類

土師器ⅢⅡA類

土師器ⅢⅡB類

2号溝出土土師器



土師器Ⅲ A類



土師器Ⅲ B類



3号溝出土土師器



土師器Ⅲ A類



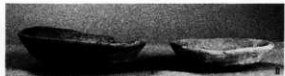
土師器Ⅲ B類



4号溝出土土師器



土師器Ⅲ A類型



土師器Ⅲ B類型

7号溝出土遺物(1)



土師器皿ⅠA類

土師器皿ⅠB類

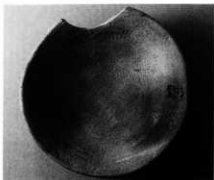
京都系土師器皿 ▶



土師器皿ⅡA類

土師器皿ⅡB類

土師器皿ⅡD類



土師器皿ⅡE類

◀土師器皿の内面に布目痕(製作?)

7号溝出土遺物2)





白磁多角环

◀加賀斐押印(湯上谷Ⅱ-301)

7号溝出土遺物③



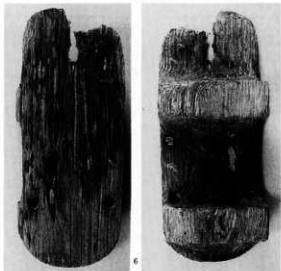
肥前系磁器



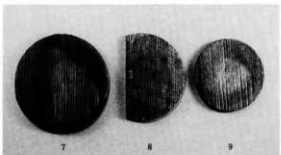
肥前系陶器



唐津系陶器



連面下駄



曲物底板

行火▶



5号溝出土遺物

銭畑遺跡Ⅱ  
レストラン建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

---

平成 5 年 11 月 15 日 印刷  
平成 5 年 11 月 30 日 発行

編 集 石川県小松市教育委員会  
発 行 石川県小松市教育委員会  
有 限 会 社 叶 井  
印 刷 マルト印刷工業株式会社

---



